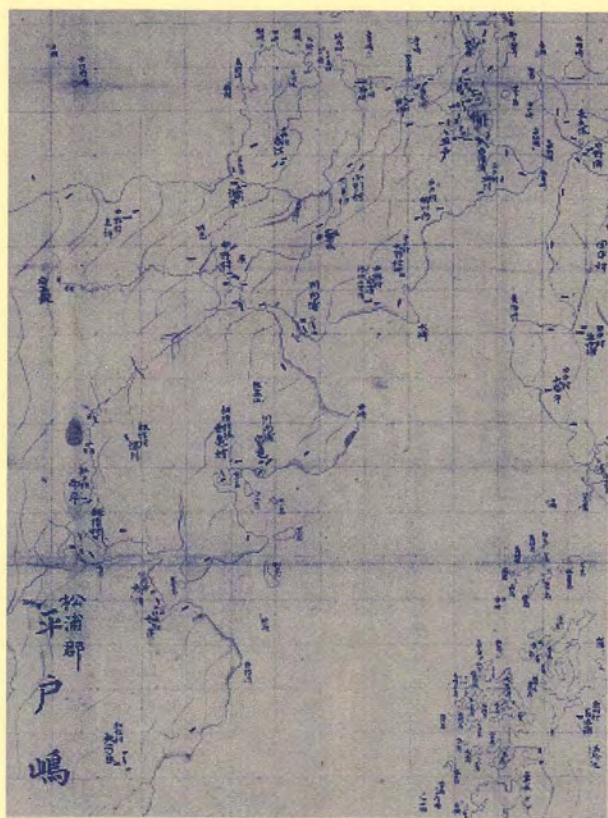


史料と伊能図

# 伊能忠敬

研究

二〇〇六年 第四四号



伊能忠敬研究会

表紙図解説

米国議会図書館蔵伊能大図二〇四号部分

「肥前平戸」付近

本図の範囲は九州本島西端の北松浦半島と平戸島、生月島(本図では池属<sup>いけつ</sup>)とその周辺である。平戸島の平戸港は、長崎に先立つてオランダとの交易に門戸を開いた良港であった。

平戸藩は平戸島と対岸の九州本島の松浦、彼杵<sup>そのぞ</sup>地区のほか、杵岐と五島列島の一部を藩の領域としていた。藩域の測量に際し、一〇〇日以上にわたり藩士が付き添った。この時のことを、藩主であった松浦静山は彼の著書『甲子夜話』に、伊能忠敬が西国測量を始めると聞き、藩領の地図を所望し、忠敬の没後になったが入手したことが記されている。

この地図の地域を測量したのは、文化八年十一月から始められた第八次測量の文化一〇(一八一三)年一月二九日から二月一七日の間で、伊能本隊が行なっている。

本図は、陸地測量部(国土地理院の前身)が、国土の地形図類作製のための計画・設計用に写したものであると思われる。明治初期に内務省地理局保管の大図の原図から必要最小限の要素を写し取ったと考えられる。まさに骨格図のように海岸線、交通路を描き、集落は黒描で写し取り、山岳等は省略されている。これらの写図がわが国の近代以降の地図作製に果たした役割は大きかった。

(題字は伊能忠敬の筆跡)

(清水 靖夫)

目次 44号

特報 二〇一〇年「伊能図ウオーク」を目指して 編集部 一

報道発表から話題拡がる

伊能忠敬新資料九百点寄贈

伊能忠敬は国際情報通だった

嫁に出すようで

忠敬の不思議ー対馬国ー

佐原市から香取市へ

水が伝える先人の偉業

インターネットで伊能書探求!

新史料研究から

伊能測量隊員 柴山傳左衛門について (二)

伊能図にみる朝鮮の山々 その一

「文化の開拓者 伊能忠敬翁」(二)

特集長崎測量

平戸ご案内

長崎街道こぼれ話

伊能測量隊 長崎に来る

新地域史料

越後岩船測量ー与惣左衛門覚書より (二)

研究ノート

続三浦半島に忠敬の足跡を歩く

良助の次男 榎本武揚 (三)

伊能測量隊 子午線一度の長さの測定 (二)

忠敬談話室だより

「点と線」伊能図と鷹見泉石

房総にご縁があつて

表紙図解説 清水靖夫

編集協力 坂本巍 前田幸子

読売 新聞	一	安永 純子	六	遠藤 薫	二九	風間 広吉	四四
日本経済新聞	二	辻本 元博	一四	河島 悦子	三二	白根 貞夫	五〇
毎日 新聞	四	宮内 敏	二二	松尾 紀成	三九	伊藤 栄子	五六
佐久間達夫	五	編集 部	六九			佐久間達夫	六三
朝日 新聞	六二					山本 公之	七〇
編集 部	二一					朝岡 洋子	七二

特報

二〇一〇年(平成二二年)

「伊能図ウオーク」を目指して

一九九九年から二〇〇一年正月まで二年にわたり全国を歩いた「伊能ウオーク」に続き、伊能測量開始二〇〇年にあたる二〇一〇年一月を期して、全都道府県の伊能測量の道を歩く「伊能図ウオーク」が計画されています。順路は別図のとおりで、千葉県スタート、東京都ゴール。原則として各都道府県に一週間をあて、伊能大図の展示会や主要ルートを選んで歩き、県庁所在地などで大会を開いて一年間で全国一周を目指しています。計画の詳細は来年早々に発表予定になっています。どうぞご期待下さい。

日本ウォーキング協会あるけるけ新聞四月号



2006年2月13日 報道発表から 話題広がる

# 伊能忠敬 新資料900点寄贈



伊能忠敬が極秘文書を写した書類

江戸時代後期の地理学者、伊能忠敬(1745-1818年)の子孫、伊能洋さん(「東京都世田谷区」の自宅に残されていた忠敬自筆の文書や地図など約900点の目録を、「伊能忠敬研究会」顧問の安藤由紀子さん(「八千代市大和田新田」と、伊能洋さんの表向きさん)がまとめ、忠敬の旧宅がある佐原市に寄贈した。実物も順次、寄贈される。安藤さんは「『忠敬さん』のファンには、ぜひ見せたい」と話している。

地図や  
星座図  
子孫が佐原市に

伊能家に眠ったままになっていた所蔵品を約10年かけて整理した。専門家によると、重要文化財級の資料はいくつもの点がある。忠敬が1808年ごろ、オランダから幕府の老中にあてられた極秘文書「オランダ風説書」を写写した自筆の文書が見つかっ。測量で知られる忠敬が、実は当時の国内外の先達情報を知らえた人物であったことをうかがわせる貴重な発見だ。このほか、忠敬が全国を測量する前の1798年ごろ、当時の国宅があった江戸・深川から浅草までの約9キロを歩いて実測した、伊能測量の原点と言われる地図もある。忠敬の孫、忠敬が1895年ごろ製した、当時としては最新の星座図も見つかった。佐原市にはこれまで、忠敬の著作など約4400点が寄贈されているが、今回寄贈される資料についても、3月下旬をめどに伊能忠敬記念館で展示する予定だ。岩瀬良三市長は「郷土の偉人の資料は大切に守り、育てていきたい」と話している。

外圧が伊能図を誕生させた！

新資料から安藤さんが解く

初の実測日本地図を作った伊能忠敬。地方の商家の隠居の身で全国を測量して歩いた物語はよく知られるが、実は幕府の機密情報にも通じていた。新資料は忠敬のもう一つの顔を示す。



伊能忠敬自筆の「阿蘭陀風説書」の写し

信に見いだされ、四十年以上も若年寄を務めた。さらに、忠敬の測量の師である高橋至時ら天文方を統括する立場にもあった。

さらに九百余点の資料の中には、至時の弟弟子で幕府暦学御用を務めた足立左内がロシアの海軍軍人、ゴローニンを尋問した時の様子を記した手紙なども見つかった。

ているものの、実際はフランスの勢力下にあったオランダが、フランスの同盟国であるかのような記述になっている。

図を製作した背景には、ロシアなど北方からの脅威に備える動きがあったと指摘する。キーマンとなったのは忠敬の三人目の夫人、ノブの父親で

至時は当時、気鋭の天文学者。千葉・佐原の有力商家の隠居だった忠敬が「測量を学びたい」と望んだところで簡単に弟子入りできるはずはなかったが、至時が幕府によって大坂から江戸へ呼び寄せられてわずか一カ月後の猛烈に忙しい最中に入門を果たして

いる。正敦の何らかの働きかけがあった可能性が強い。この裏には「仙台と佐原

伊能忠敬は国際情報通だった

# 機密文書が語る顔

「この裏には  
仙台と佐原

(編集委員 松岡賢明)



江戸時代後期の測量家、伊能忠敬（一七四五—一八一八年）は、国際情勢に強い関心を持ち、幕府の高度な機密情報も入手していた。東京・世田谷の伊能家に伝存する資料の中から、そのことを示す文書がみつかり、十三日に公表された。従来の忠敬像を覆すものになりそうだ。

## 欧州の戦況記す

この資料は、文化五年（一八〇八年）六月に幕府がオランダ商館長から受け取った「阿蘭陀風説書」の一部を忠敬が自ら書き写した文書。半紙半分ほどの大きさの和紙に八行にわたって記されている。内容はナポレオン戦争に関連した情報で、揺れ動くヨーロッパの情勢を記している。戦況はほぼ正確に書かれて

鎖国下の日本ではオランダ船が長崎に入港した際、長崎奉行所の通詞（通訳）が新しく赴任する商館長から毎回、海外事情を聴取して和訳し、「風説書」として江戸に送っていた。国際情勢を知るための唯一の手がかりとも言え、幕府にとって高度の機密情報だった。忠敬はその機密情報をもどのような手段を使ってか、見ていたことが分かる。



伊能忠敬肖像画（部分、伊能忠敬記念館蔵）

仙台藩医の桑原隆朝。桑原は蘭学者の大槻玄沢はじめ、『赤蝦夷風説考』の著者下藤平助、『海国兵談』の林子平ら北方警備の重要性を訴えた医師・知識人らのグループに属していた。

しかも、桑原は仙台藩主、伊達宗村の八男で近江・堅田の堀田家養子となった堀田正敦の侍医でもあった。正敦は兄の藩主、重村の後継者が幼かったため藩主補佐を長年にわたって務める一方、松平定

の強い結びつきも作用した可能性がある」（安藤さん）。仙台藩は江戸の米市場の有力な供給者で、流通拠点となったのが佐原だった。仙台から太平洋沿岸を南下した輸送船は利根川をさかのぼり、佐原で荷を小分けして江戸へ運んだ。忠敬は佐原を代表する有力商家の経営者だった。これらの関係から、忠敬は一般人では知り得ない機密情報に触れる機会があったとみられる。

## 外臣が生んだ地図

忠敬が機密情報に通じていたことを示す資料は、今回の文書以外にもある。一例は有力な支援者だった大川治兵衛にあてた手紙だ。忠敬は「北方警備のため仙台藩は五百人、秋田藩は三百人の出兵を

記者に应对する萩原、渡辺、鈴木、星埜、伊能、安藤のみなさん  
東京神田日本ウォーキング協会にて 2月13日





NHKニュース9より 06年2月13日  
同時に「伊能忠敬の子孫の家に残されていた資料」「オランダからもたらされた書物を忠敬が書き写した資料」などが紹介された。  
デジカメ撮影者は本号「文化の開拓者伊能忠敬翁」著者の宮内敏さん。



史料922点を寄贈  
伊能忠敬7代目の妻

## 伊能陽子さん

嫁に出すようで  
ちょっとさみしい

さんの夫、洋さんの祖母で5代目の孝さんもその一人。佐原にある伊能家本宅の訪問客に地図を広げ、説明役を務めた。加藤高明や若槻礼次郎ら戦

伊能家に残る地図や手紙などを20年かけて整理し、922点を伊能忠敬記念館(千葉県佐原市)に寄贈した。「お嫁さんに出すようで、さみしい」と積まれていた。伊能家の伝説は「好奇心と記録」。外向きに多忙な男たちに代わって、女たちが史料を大切に保存・整理してきた。陽子



長崎市生まれ。東京で幼稚園教諭。1961年、洋画家の洋さんと結婚。古文書解読、裏打ち技術などを学んだ。東京・世田谷在住の71歳。

前の名士が連なる芳名録も、今回の寄贈史料の一つだ。忠敬の子孫とは意識しないまま二男の洋さんと結婚。長兄が病死した

め、陽子さんが史料の守り役、広報担当に。「文書が雑然と箱に入っ

写真・小林努

年主に主な史料が記念館に納められた後、不要の紙として納戸にしまわれたり、たどう紙として残っていたもの。伊能忠敬研究会顧問の安藤由紀子さんとともに一枚ずつ開いて、それぞれに重要な意味があることを突き止めた。目録「世田谷伊能家伝存・伊能忠敬関係文書」にその成果が反映された。新史料は21日から記念館で公開される。

忠敬の不思議 ―対馬国― 佐久間 達夫

伊能忠敬が第八次測量で、文化十年三月二十八日から五月二十一日迄の五十三日かけて対馬国の測量をしたとき、これは不思議と思ったのか、次のことを「日記四〇」の巻末に記述している。

忠敬先生日記 四〇

対州(対馬国)に而、高反別を何間何尺何寸と云。無高ゆえの事なり。

一、畠 一間 一町三段(反)三畝十歩程

一、同 一尺 参段参畝十歩程

一、同 一寸 参畝十歩程

一、同 一分 十歩程

右者(は)、上畠間尺之程に御座候。上々畠中下之畠共一ヶ年之所務方、凡、上畠の所持に当り候程を一間与定め候事ゆえ、上々畠者、右之町段より狭く、中下之畠者、右町段より広く候。

此を当国に而者、上畠廻と申候。俵米給は、矢張千石百石と申候。朝鮮より送来候、年々白米五斗参升入に而、一万六千俵宛。

なお、朝鮮国のことについて「測量日記」に次のように記している。

・文化十年三月二十九日

府中(厳原)城下に朝鮮舎あり。朝鮮漂流のもの、此舎へ入置くという。

・四月一日

府中城下田淵町に朝鮮館ある。朝鮮館は、曹洞宗国分寺境内なりしを、昨末朝鮮人来聘に国分寺を外へ移し、新館を建てる。

・四月二七日

鰐浦の遠見番所に登り、朝鮮国を測る。

対馬国府中(厳原)の鳥絵図 伊能忠敬記念館所蔵



## 伊能測量隊員 柴山傳左衛門について (一)

—『伊能測量隊員旅中日記』を中心として—

安永 純子

はじめに

これまで伊能測量隊による日本全国測量の様子についてさまざまな報告がされてきたが、隊員の視点による研究は皆無に等しい。それは、測量の記録として伊能忠敬自身が記した「測量日記」(1)が現存しているのに対して、隊員自身が記した日記がこれまで発見されなかったためである。その原因として、日本史上有名なシーボルト事件によって、高橋景保をはじめとして処罰の対象となった人々の中に隊員が多く含まれていたことが、大きな影響といえよう。

そのような歴史的背景を経て、近年になって伊能測量隊員による日記『伊能測量隊員旅中日記』(以下「隊員日記」とする)が発見され、さまざまな経緯を経て平成二二年に愛媛県歴史文化博物館が購入した(2)。その日記の著者は柴山傳左衛門とみられる。この傳左衛門の経歴について伺える資料は極端に少ない。しかしながら、「隊員日記」には、測量に関する記録の他にも、地域の特産や名所などが旅日記として詳細に記され、傳左衛門が文学における教養を持っていたことがうかがえる。さらに旅にあたっての心情がつぶさに記されていることから、傳左衛門を通して、隊員の心が見事に表現されているのである。

そこで、本稿では、「隊員日記」を中心として、柴山傳左衛門からみた伊能測量について紹介したい。

### 一、柴山傳左衛門について

#### (1)伊能忠敬との出会い

柴山傳左衛門は、伊能研究において、これまであまり知られなかった人物である。それは、伊能測量にあたっては、第六次測量にのみ随行したためである。最初に傳左衛門の記録にみえるのは、「伊能忠敬先生日記」(3)で、文化四(一八〇七)年九月一〇日のことである。

「此日より柴山傳左衛門出ル」と記されている。ちょうど第六次測量に出発する四ヶ月前のことであり、この日から測量隊に加わったとみられる。この時に傳左衛門は初めて忠敬に弟子入りし、これから随行する測量の旅にあたって、忠敬らとともに準備を行なったと考えられる。日記中に傳左衛門は、忠敬に対して「伊能」「伊能氏」「伊能翁」などと、様々な名称で記しているが、その中には「先生」と記しているものもある。忠敬を前にして、傳左衛門は「先生」と呼んだと考えられる。ただし、測量技術は、わずか四ヶ月で習得できるものではない。実際に四国測量において、測量を行なっていることから、おそらくそれまでにある程度の測量技術を身につけていたとみられる。

#### (2)身分について

柴山傳左衛門は御先手高林弥十郎組同心の身分として第六次測量に随行した。下役四人は幕府の役人としての身分であるため、それぞれの所属する組が記されている。傳左衛門の上司となる高林弥十郎は、間宮林蔵との若干の関係がうかがえる。『新訂寛政重修諸家譜(4)』によると、高林弥十郎は、その名を高林利直、通称は弥十郎と名乗った。五〇〇石取の旗本で弥十郎の祖父弥兵衛壽久の妻は間宮孫三郎長女である(5)。また、五男の信顯は間宮市兵衛信理の養子に入っている。信理は間宮林蔵と先祖が同じである(6)。武家の婚姻関係には、役職によるつながりが深い場合が多い。そこで、高林家と間宮家と親



戚関係にもなんらかの關係があったと考えられる。

弥十郎は、寛政一二(一八〇〇)年から御先手御鉄砲頭を文化六(一八〇九)年までつとめた。屋敷は小石川御門内御台所町に、組屋敷は小石川伝通院前にあった<sup>7)</sup>。「与力七キ、同心三〇人」<sup>8)</sup>を抱えていた。傳左衛門は測量の旅を終えた後、高橋景保のいる浅草の厩所で伊能忠敬と別れ、高林弥十郎に旅を無事終えた報告をするために小石川組屋敷を訪ねた。弥十郎は、同年三月に老免して寄合に入り、七月に養老料を賜っている<sup>9)</sup>。この頃すでに老齢だったと考えられる。そして、翌七年四月二〇日に没し、桂林寺に葬られた<sup>10)</sup>。現在高林家の墓所は桂林寺からいつの頃か不明であるが、移転している。移転場所については不明である。

### (3) 伊能測量以後の傳左衛門について

傳左衛門に関する文献について、測量後に確認されるものに高橋景保書簡<sup>11)</sup>がある。文化一〇(一八一三)年二月に浅草天文台で火災があった時の様子を伝えたものである。その時に、傳左衛門は宿直をつとめており、火災から天文台の器具類を避難させている。

この頃は、傳左衛門は高橋景保の組に属していたと考えられるが、同時に門弟であったことがうかがえる。その資料として伊能家に「柴山傳左衛門書簡」<sup>12)</sup>が残されていた。同年八月五日に忠敬の長女妙薫に差し出されたものである。この書簡については、これまでに岡本暉子氏によって「知らされていなかった長男景敬の死」<sup>13)</sup>、『伊能忠敬研究第一八号』<sup>14)</sup>にすでに紹介されている。ちょうどこの頃忠敬は九州測量を行っていた。忠敬が九州測量に出発する時に、忠敬の息子で伊能家の当主をつとめていた三郎右衛門(景敬)は病の床に就いていた。その後病状は悪化の一途をたどり、とうとう亡くなってしまうのである。

この時忠敬の齢は六八を数え、高齢な上にすでに知られているようにぜんそくの持病があった。若く健康な隊員でも、しばしば体調を崩すほどの厳しい旅中で、幾度も発作に見舞われていた。忠敬を迎える現地の諸藩は、忠敬を気遣って藩医を用意していたほどであった。特に九州の地は江戸から遠く離れており、嫡子景敬の死は、忠敬に精神的なショックを与え、持病が悪化されることが懸念された。幕府による御用測量の中心である忠敬が、事業を成し遂げるまでは最悪な状況を避けなければならなかった。実際には、九州測量において、測量隊員たちの体力の消耗は激しかった。特に暑さに悩まされ、第二次九州測量において副隊長である坂部貞兵衛が病によって命を落としたほどだった。

忠敬の身を心配した高橋景保は、忠敬が無事に九州測量を終えて、江戸に帰るまで景敬の死をふせたいと考え、その旨を妙薫に相談した。そこで、多忙な景保に代わって代筆を傳左衛門に依頼したのだった。このようなことから傳左衛門は、景保の代筆を行うほどの役職であり、測量技術も身につけていたことで、第六次測量に派遣されたものと考えられる。

### (4) 傳左衛門の子伝之助について

傳左衛門の年齢については、不明であるが、傳左衛門の子伝之助に関する履歴が国立公文書館に残されていた。その資料は、幕臣の履歴を記した「明細短冊」<sup>15)</sup>である。作成年月については、不明であるが、作成時に伝之助は五三歳と記されている。最後の履歴が文久三(一八六三)年となっているため、この頃の年齢であると推定される。そこで、伝之助の出生時期を推定してみると、傳左衛門が第六次測量に随行した際には、まだ生まれておらず、測量後文化一〇(一八一三)年頃に生まれたものと考えられる。そこで、伊能測量に随行した

頃の傳左衛門は、二〇代もしくは三〇代の年代であったと推測される。伝之助は、興味深い履歴を持っていた。父と同じく測量に関する仕事に従事していたのである。傳左衛門は「進物取次番」を最後につとめて亡くなった。履歴を読みると、伝之助は、天保一〇（一八三九）年に天文方役屋敷内の部屋住で三人扶持を受け、天文方足立左内手附の測量御用役を勤めた。同一四（一八四三）年に家督を継いでいることから、その頃に傳左衛門は死亡したものと考えられる。柴山家にはシーボルト事件による影響を受けなかったといえよう。

家督を継いだ伝之助は小普請組近藤織部組、小笠原順三郎組を経て、安政六（一八五九）年に再び暦作測量御用を命じられ、一〇人扶持に加増された。天文方御屋敷内を住居としていた。

幕藩体制下における武家社会においては、役職についた家は、世襲制で父から子へと代々受け継がれる。特に高録の役職ほどその傾向が強いが、傳左衛門の場合は、この武家社会において下級武士に位置するため、専任となる役職ではなかったと考えられる。しかしながら、伊能測量に従事した傳左衛門は、その後は、全国測量の旅に加わることはなかったものの、その後も測量技術を学び続け、進物取次番までの出世を果たし、天文方における測量技術及び暦作成による役職が後継者となる伝之助に引き継がれたのではないかと考えられる。

## 二、『伊能測量隊員旅中日記』について

### （一）『伊能測量隊員旅中日記』の法量について

「隊員日記」は、縦一六九・九cm、横一一・〇cm、厚さ二・三cmの袋綴じ二冊の小横帳である。四折り半紙に毛筆で書かれ、一巻は一六二丁、二巻は一六〇丁からなる。発見されたのは東京の古書市で、大量の古文書を都内の古書店が購入したところ、束の中から発見されたという。そのうち、平成一二年度東京古典会大入札会において、愛媛

県歴史文化博物館に落札されたものである。この入札会にあわせて、「隊員日記」は、全ての紙に裏打ちを打ち、四方をいくらか裁断して再び綴じられている。補修の際に周囲を切断しており、通常の小横帳よりもやや小さめの大きさである。

発見当時から一巻の表紙は失われていた様子で、一巻に表題はなく、二巻に「旅中日記 第二」と表題があり、「文化五戊

年七月廿四日より文化己巳正月十八日二至」と年月が記されている。旅日記において、たいいていの場合一巻の表紙に著者名が記されることが多いため、失われてしまっていることは残念である。

### （二）第六次測量隊員の構成について

筆頭の伊能忠敬は、小普請方根来喜内支配天文方高橋作左衛門手伝、下役四人のうち、坂部貞兵衛と青木勝次郎は、御先手能勢市十郎同心、下河辺政五郎は西丸御書院番小笠原若狭守組同心、柴山傳左衛門は御先手高林弥十郎組同心である。伊能秀蔵、上田文助、神保庄助の三人は、伊能勘ヶ由（忠敬）の内弟子。久保木佐右衛門は、伊能勘ヶ由内侍、その他、小遣佐助、善八、草履取り藤吉を合わせて一六名で隊員は構成された。



写真1 『伊能測量隊員旅中日記』全2巻表紙

（愛媛県歴史文化博物館蔵）

(3) 構成

本資料の構成については次のとおりである。

第一巻

一、名所・旧跡紹介

a、「遠州引佐群祝田村と同郡都田村三方原論許之條々」

\*文化五年二月一日付日記より抜粋

「三方原訳書村役人ヨリ写取、別帳ニ写置」

b、「浜名湖」

c、「三井寺」

d、「小室浜桜貝」

e、「松山寺」

\*文化五年五月二十六日付日記より抜粋「松山寺二紀之貫

之真筆ノ額あり、写別帳ニ留」

f、「井ノ庄司の墓・海中掛衣岩」

二、目次

「文化五戊辰年正月廿五日東都浅草天文御用屋敷出立道中筋

淡路国四国神社仏閣名所旧跡一覽分」

三、旅行用意金内訳

「文化五戊辰年正月廿五日出立旅行入金持参之分」

四、日記本文

(文化五年一月二五日から同年七月二三日まで)

五、給料明細

a、「三季御切米」

b、「毎月御役御扶持」

第二巻

一、日記本文

(同年七月二四日から翌六年二月一八日まで)

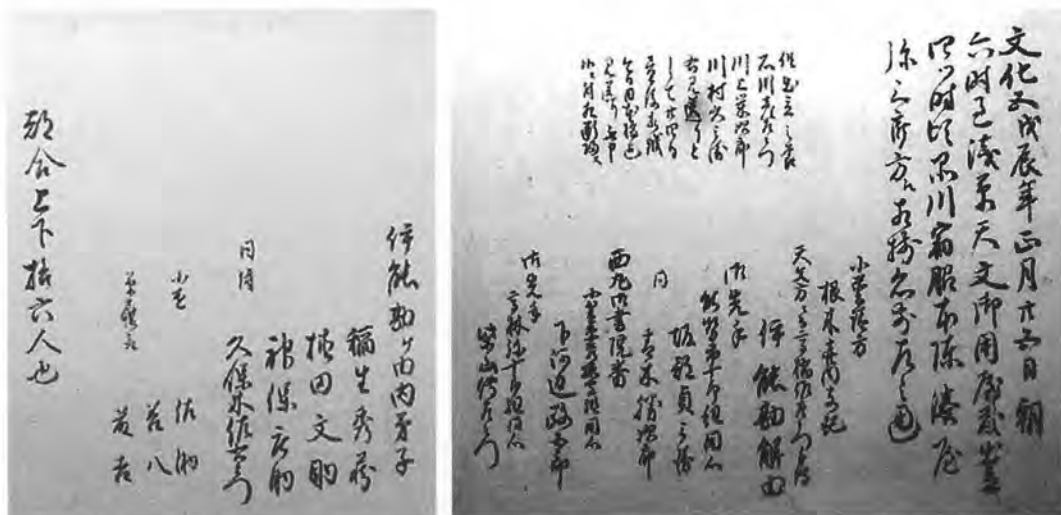


写真2 隊員名簿(同『伊能測量隊員旅中日記』より)

二、旅行費用残金・藩主からの贈物換金合計額  
三、文化五年六月二五日分別紙写の日記

※「此右之記ハ半切紙に認有之ニ付、此所余紙有之ニ付記し置申候也」

四、藩主からの贈物一覧及び換算金合計額とその内訳

「四国并淡路国領主ヨリ送り物覧」

※Ⅱ中の「」は日記本文から抜粋

測量の際に一行は、地方の名所・旧跡を訪ねている。このように測量の合間に名所・旧跡を訪れることは、隊員にとって唯一の楽しみであった。その反面、御用測量は巡検使と同様の扱いであったため、迎え入れる現地住民の準備のひとつに名所旧跡の届け出があった。そこで、事前に村浦から出された名所・旧跡に関する情報を忠敬ら一行は事前知ることができたため、測量の合間に取り入れることになったのである。また、伊予においては、忠敬と地元の測量家と子弟関係が結ばれるなどの学問交流が同時に行なわれている。当時の学問交流は情報伝達のひとつの手段でもあるため、現在と違って文系理系の区別なく、幅広い分野に渡っていた。そこで、伝左衛門のように、わざわざ別帳に写し取り、清書した上で改めて、「隊員日記」の冒頭に「名所・旧跡紹介」が行なわれたのである。その後目次が入るが、二巻には目次が入っていない。

目次の次に傳左衛門の旅行用意金の内訳が記されて、本文となる日記部分に入る。本文は、文化一月二五日から同年七月二五日までで、次に給料の明細が入っている。

二巻では、まず本文の日記から始まる。最後に測量に訪れた諸藩から、忠敬ら一行に贈られた贈り物の換算金額など旅の諸経費が一覧にまとめられている。これらの構成から、傳左衛門は「隊員日記」を測

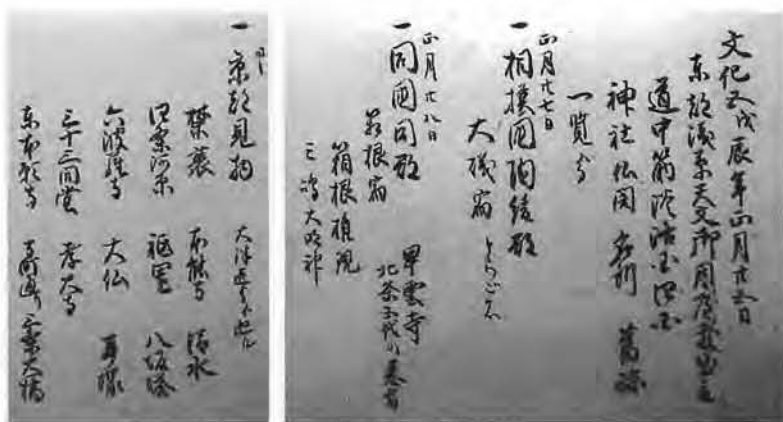


写真3 道中筋淡路国四国神社仏閣名所旧跡一覧分  
(同『伊能測量隊員旅中日記』より)

量の記録として残すだけでなく、意図して「旅日記」に仕立てたのだろう。

#### (4) 隊員の服装

伊能測量の様子について、各地で絵図などが残っているため、測量時の隊員の服装はこれまでも知られている。「隊員日記」においては、



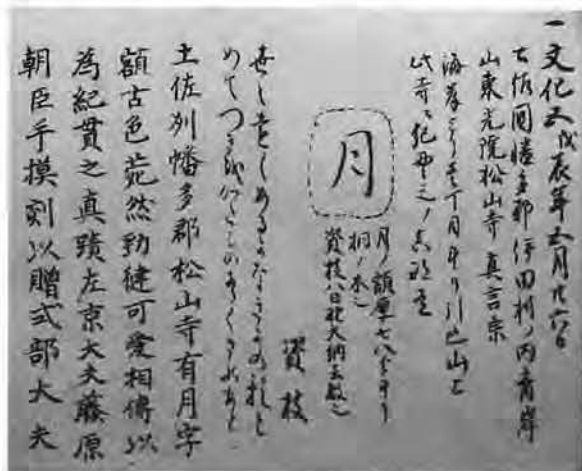


写真4 松山寺 紀貫之筆「月」  
(同『伊能測量隊員旅中日記』より)

測量はもちろんのこと、それ以外の服装も記されている。傳左衛門は、隊員の中でも、幕府から遣わされた下役人であったため、馬一騎と従者一人を連れての参加であつた。出発当日の服装は、羽織・半てん・股引である。冬の季節だったので、羽織だけでは寒さをしのぐことができなかったで、半てんを着用したものとみられる。荷物は柳こり、大小箱、桐油入のそれぞれ一つずつをあわせて三つの荷物である。馬にそれらの荷物をつけ、さらに雨笠を取り付けて出発している。当日は、あいにく雨だったので、早速携帯していた雨笠である桐油笠を着用している。

衣服についての記述が「隊員日記」にはしばしば見られる。江戸に生まれ、幕府の役人をつとめていた傳左衛門にとって、地方へ行き、

測量御用に従事することは、初めての経験だった。傳左衛門のような江戸に在住する武士は、主人の一大事に命を捧げることを武士道としていたため、生涯江戸から出ることがめつたになかっただけに、人生にとつても非常に大きな冒険であつた。

四国測量では、四国沿岸と太平洋側の土佐から瀬戸内海側の伊予とを結ぶ街道を通つた四国縦断測量が行なわれた。四国山脈は千メートル以上の険しい山々が連なっている。特に高知・伊予境に位置する笹ヶ峰は、夏においても気温が低い地域である。傳左衛門は、副隊長である坂部ら率いる四国縦断測量に加わつた。その時に測量時の服装について「野服」と記している。九月七日のことで、四国の山中はたいへん寒いにもかかわらず、宿泊地には火鉢の用意がされていなかった。そのため、綿入の「重手着」で寒さをしのいでいる。他にも測量を行なっていない時の服装を「平服」と記している。おそらく、股引をはいた服装が「野服」で、通常の着物を「平服」と記しているのだろう。江戸人らしい傳左衛門の表記である。この平服は、伊勢で年を越した前日に伊勢参宮内宮を参拝する際に「平服」を着たと記している。一方で、特別に「上下」を着用する時もあつた。正月に同じく伊勢参宮で参拝する際に「麻上下」を着て、二月二四日に大坂呉服町会所に宿泊し、東西町奉行所を訪問する際に、忠敬はもちろんのこと下役すべてが「麻上下」を着ている。このような公の場では、「麻上下」を着用したのだろう。

傳左衛門が武士ならではのこだわりを持っていたこともうかがえる箇所もみられる。武家社会では、五節句には、勤務は休みとなり、礼装に身をつつんでそれぞれの家庭で年行事を過ごす慣わしがあつた。質素儉約につとめた江戸の下級武士のひとりである傳左衛門にとつて、五節句のような「ハレ」の日は一年のうちで数少ない楽しみの日であつたといえる。しかしながら、測量の時には、全くこのような行事を

行なうことはなかった。それよりも、一日も早く測量が行なわれることを忠敬は重要視していたため、雨など天候が悪い時以外の測量が行なえる時にはすべて作業が行なわれた。そのため、傳左衛門は、先述の九月七日に「重陽当日ハ礼服着する迄なく」と記し、節句を行なうこともなく測量を行なったと歎いている一文がある。

### (5) 隊員の給料と諸経費

一卷の巻末には傳左衛門の給料が記されている。「毎月御役御扶持」の固定給の他に「三季御借米」「十月御切米」が支払われている。「三季御借米」は、二月・五月・九月に支給されている。傳左衛門は息子伝之助と同様に知行取りでなく、扶持取りの下級武士に位置することがうかがえる。

毎月の扶持は、文化五（一八〇八）年二月から翌六年一月まで毎月支給され、支給金額は、金一分一三匁から金二分七匁までの範囲である。両に換算された金額も並べて記されており、三八両から五五両までの範囲となっている。合計金額では、両に換算された金額の記述はみえないが、先述の範囲からの支給額では、一八両五分七厘と記されている。その他に地代金として金一兩二分受け取っている。西日本では、銀による換算が主流であったため、諸侯からの贈物を売り払った時に、銀から金に換算された記録を残している。

次に諸経費を見ていきたい。「出立旅用入金持参之分」に出発時の旅の支度金が記されている。出発日の翌日一月二六日に藤沢宿で全体の費用三五両のうち二五両を忠敬に預け、残りの一〇両を自分持ちとした。

忠敬に預けられた分は、長持ちに入れられ、傳左衛門が所持した一〇両（内訳小判一〇両、歩判一兩一分、南鐮三兩三分）のうち小判五両は証文箱に入れられた。そこで、実際に傳左衛門が携帯した所持金

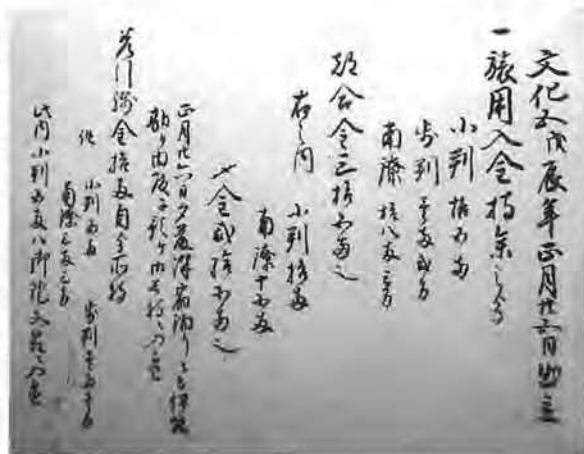


写真5 旅中入金持参之分  
（同『伊能測量隊員旅中日記』より）

は歩判一兩一分と南鐮三兩三分となっていたことがわかる。

旅の途中で、傳左衛門が買い物をしている。八月二六日に小松領今在家町で、測量を終えたばかりの一行を今治領大庄屋青野保屋六蔵が訪れた。隊員達銘々へ藩の御用絵師山本雲溪（15）の絵を贈りたいと申し出たのである。山本雲溪はこの時二七、八才と若かったが、猿の名手として名高い画家森祖仙の高弟であった。雲溪の名は、江戸・大坂の画壇においても評価が高かった。伊予においてもその人気は絶大なもので、今治地方の大半の神社には絵馬が奉納され、かつ伊予において諸藩主から藩士、そして庄屋までが雲溪の絵を求め、現在においても非常に多く残されている。

傳左衛門は、鹿の絵を注文し、翌九月六日に、絵を届けに来た者に

対して、銀二朱を礼金として小菊料を払っている。

また、傳左衛門は、九月二六日から翌月七日まで病氣にかかり、薬を服用している。この時の薬代金として金一〇〇疋を支払っている。この他にも旅の途中で体調を崩しているが、これ以外に薬代金を支払った記述はみられない。

また、忠敬とともに旅の行く先々で諸藩からさまざまな贈り物を受け取っている。このことは「測量日記」にも詳しく書かれているが、二巻末の「四国并淡路国領主ヨリ送り物覚」には傳左衛門と従者が受け取った品が記されている。この品は、忠敬と同様に代金に換金しており、贈り物の換算金額の合計は金一七兩二朱で、従者の分は銀五匁だった。旅の最後に残った金額も記されている。長持ちに入れてあった分と手持ちの分とをあわせて二八兩が残っている。第五次測量以降は、忠敬は隊員に対して飲酒などの行いを禁じていた。傳左衛門は、規律を守り、質素儉約につとめた旅だったことがうかがえる。

(以下次号)

## 註

- (1) 伊能忠敬著「測量日記」(伊能忠敬記念館蔵)。本稿では、久保高一編『伊能忠敬測量日記—文化五年四国全域の原文・解説—』(明浜町教育委員会一九八四年)、『愛媛県史料編 近世下』(愛媛県一九八五年)、佐久間達夫著『伊能忠敬測量日記第二巻』(大空社一九九八年)を参考とした。愛媛県歴史文化博物館蔵『伊能測量隊員旅中日記』。翻刻を拙著『愛媛県歴史文化博物館研究紀要第六・七号』(二〇〇一・二〇〇二年)に発表した。また、拙著『伊予における伊能測量—『伊能測量隊員旅中日記』を中心として—』(同館研究紀要第九号二〇〇三年)に「隊員日記」を中心とした伊予における伊能測量に関する論文を発表した。

- (3) 伊能忠敬記念館蔵「忠敬先生日記」  
 (4) 高橋光寿他編『新訂寛政重修諸家譜 第二巻』(株式会社続群書類従完成会一九六四年)  
 (5) 朝倉治彦監修『江戸城下武家屋敷名鑑 上巻』(原書房一九九二年)  
 (6) 高橋光寿他編『新訂寛政重修諸家譜 第七巻』(株式会社続群書類従完成会一九六五年)  
 (7) 石井良助監修『編年 江戸武鑑』(柏書房株式会社一九八二年)  
 (8) 石井良助監修『江戸幕府旗本人名事典第二巻』(原書房一九八九年)  
 (9) 国史大系編集会編『続徳川実紀』(吉川弘文館一九八二年)  
 (10) 桂林寺蔵「法号記巻」  
 (11) 伊能忠敬記念館蔵「高橋景保書簡」  
 (12) 伊能家蔵「柴山傳左衛門書簡」  
 (13) 岡本暉子著「知らされていなかった長男景敬の死」  
 (14) 『伊能忠敬研究第一八号』伊能忠敬研究会一九九九年  
 国立公文書館蔵「明細短冊」。小西四郎監修『江戸幕臣人名事典 第三巻』(新人物往来社一九九〇年)に翻刻されている。  
 (15) 山本雲溪(一七八〇—一八六一)。「隊員日記」には、「今治城下町画師山本屋幸治画名月峯斎雲溪二十七、八才にて自分鹿ノ画老枚到来」とある。町医及び藩医をつとめたが、大坂で医学を学んだ際に森祖仙から絵を学んだ。師と同じく猿の絵を得意とした。

(やすなが じゅんこ・愛媛県歴史文化博物館)

## 伊能図にみる朝鮮の山々 その一

### Ⅰ 山島方位記の朝鮮の地名と

#### 一九世紀初頭の日本の磁針偏角Ⅰ

### 辻本 元博

#### (1) はじめに 着眼点と展開

日本の測量地図であり、片側測量という制約があるにもかかわらず伊能忠敬は隣国朝鮮の山々をかなり丁寧に測量して伊能図に表現している。

『伊能小図西日本』(神戸市立博物館蔵(1))には朝鮮と記して六山が、『伊能中図』(『大日本沿海輿地全図』東京国立博物館蔵(2))には方位線無し(三山)を足した九山が描かれており、(C図参照)山々の絵の頂上の位置が方位角入りの方位線の交差点になる様に描かれている。但し、これらの山々に記された山名は現代の大韓民国の地図にも見当たらない。伊能図に描かれた朝鮮の山々が韓国のどの山になるのか、伊能の測量方位角台帳『山島方位記』(全67巻・重文・伊能忠敬記念館蔵)記載の方位角の再現による同定結果を説明し、同時に付帯して判明した事項に付いても概観する。尚、今回の論文では従来の拙論に詳細部分での補正を加えた。

以下順に伊能図の日朝間国際測量図部分の意義と日朝交隣時代の背景。伊能図には無く『山島方位記』にのみ記載の朝鮮の山名、地名の同定結果。『山島方位記』記載の釜山及び対馬北部の遺跡関連地名等々に付いても論述したい。更に、『山島方位記』から現在解析中の伊能忠敬測量時の19世紀初頭の日本の磁針偏角を論述する。

大谷亮吉氏が著作『伊能忠敬』(岩波書店1917年)の「羅鍼の偏差」の項で『山島方位記』から江戸、中山道、四国で解析した磁的偏差の傾向から大勢を推測したとし、文化六年(1809年)頃の四国、九州では30分程度西偏と推定しても大過無しとの概観を出し、伊能忠敬の各観測地点を探したり方位角を新たに測定することなどは容易の業ではなく、この問題に関する詳細な研究は他日に譲るとして以来、伊能の測量方位角磁針偏角解析の研究は空白となった。磁針偏角の解析は伊能図の中の朝鮮の山々の同定研究の途上で偶然にも不可欠な要素として浮上し、全く事情を知らない筆者の手で再開していたことになる。筆者が『山島方位記』の方位角から解析した対馬西岸と北端、種子島、江戸・大阪・堺及び現在解析中の蝦夷、陸奥等々の当時の日本の磁針偏角及びそこから新たに判明する事項と活用用途等にも順次言及したい。

#### (2) 伊能図の中の朝鮮の山々の同定環境と同定方法

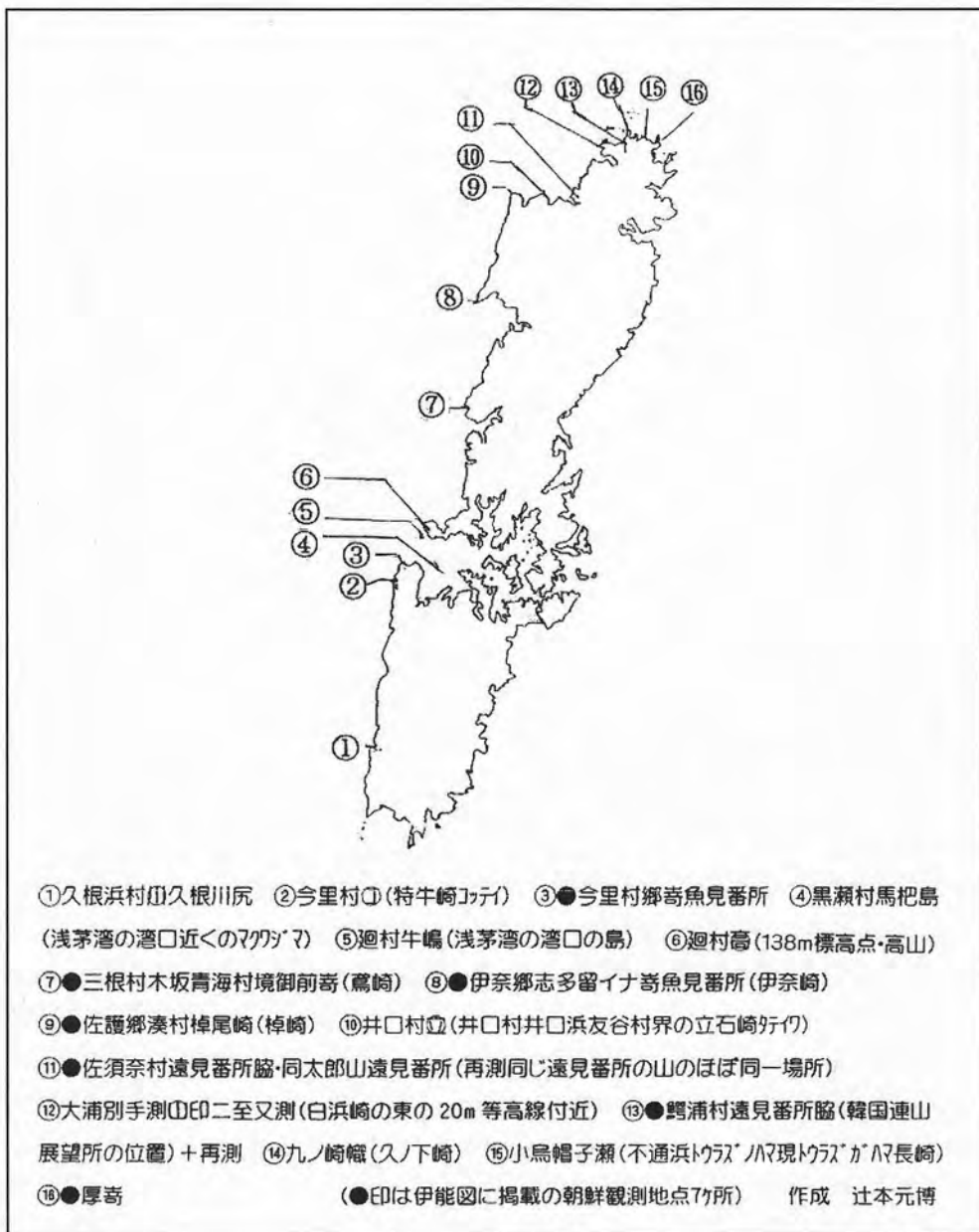
##### 対馬北端・朝鮮南岸間の地理的距離と可視関係

伊能図の朝鮮の山々に付いては大谷亮吉氏の『伊能忠敬』でも単に「朝鮮の諸高山を遠測しその位置を定めた」とするのみで実際に測量した山の同定はしていない。小図には対馬の7ヶ所(3)からの23本、中図には25本の方位線が磁針方位角入りで描かれている。(4)『山島方位記』には対馬の16地点からの重複測量2回(鰐浦・佐須奈)を含む合計18回の朝鮮測量による792件の磁針測量方位角が記載されている。(大浦別手測山印至又測)地点からの朝鮮測量は1回のみと判断。重複測量3回とした従来の拙論を改め2回とする。(A図参照)

(尚、中図と小図との間でも鰐浦からの玉浦山、棹崎、厚崎からの加徳山への方位角に付いては若干の相違が認められる)



A図 山島方位記に見る伊能測量隊の対馬での朝鮮測量地点



対馬北端鰐浦と韓国南岸の釜山間は対馬海峡西水道を挟み釜山湾口の影島の南端迄は海上約51km、湾奥の釜山の都心迄は約60kmの距離であるが、相互に可視の範囲である。田代博氏の可視限界距離計算式即ち、限界距離(km)＝観測地点の標高(m)の平方根×3・84で試算すると、対馬北端あるいは釜山の山の上からは対岸の海岸迄も水平線に遮断されることなく直接見えてしまう場合もあることがわかる。

(5)

対馬北端鰐浦の韓国連山展望所(標高70・9m+建物二階床高)

からの遠望写真を元に描いた韓国連山展望図や棹崎からの遠望写真とも照合すると、対馬の西岸、北端の沿岸から見える韓国の山並みと島と都市は韓国南岸中部から東岸南部へ、順に鴻島、每勿島、巨濟島、鎮海、熊川、加徳島、多大浦、松島、影島、釜山、金井山、海雲台、機張、日光等が目視可能な範囲になる。霞みのない、好天氣に恵まれると70kmから80km以上遠方の韓国東岸の長安、西生浦、蔚山方面の山々も見える。

(6)

### 〔参考文献〕

- (1) 古地図セクション「神戸市立博物館」神戸市体育協会 2000
- (2) 「伊能図」 武揚堂 2002
- (3) 入江正利「伊能忠敬長崎県測量」測量日記編 地図編 1985
- (4) 佐久間達夫「伊能忠敬測量日記」 大空社 1991
- (5) 田代 博「山岳展望の楽しみ方」山と溪谷社 1997
- (6) 「韓国道路地図」 中央地図文化社

### (3) 伊能図記載方位角と山島方位記記載方位角の比較

ここで伊能図に記載の方位角と『山島方位記』記載の方位角の精度を朝鮮の山への方位角の例で比較検証する。

#### ① 伊能図に記載の方位角の精度

十二支<sup>ニ</sup> 360度、一支<sup>ニ</sup> 30度、1分<sup>ニ</sup> 3度、半<sup>ニ</sup> 1.5度、1度30分により表現されており、最低単位は1度30分である。通常の十二支では北を指す子は、「ま北」を挟んで西洋方位の東西各15度で345度、15度の範囲を指す。

一方伊能図の方位角は子初分<sup>ニ</sup> 0度、子の壺分<sup>ニ</sup> 3度、...、子の九分半<sup>ニ</sup> 28度30分。次に丑初分<sup>ニ</sup> 30度となり、最終的には亥の九分半<sup>ニ</sup> 358度30分の次が子初分<sup>ニ</sup> 0度になる。

伊能図の方位角は漢字の十二支の表示ながら「子の初分」<sup>ニ</sup> 「ま北」<sup>ニ</sup> 0度から始まる西洋流を折衷している。例えば伊能図では対馬の棹尾崎(現在の棹崎)からの牧島への方位線に記載の方位角は亥二分半と表現されている。

亥二分半は亥<sup>ニ</sup> 330度、二分<sup>ニ</sup> 3度×2<sup>ニ</sup> 6度、半<sup>ニ</sup> 3度÷2<sup>ニ</sup> 1度30分、亥二分半<sup>ニ</sup> 337度30分となる。

海上保安庁海図第304号釜山港至巨文島(二十五万分ノ一)の中の東半分の対馬及び釜山の掲載部分を使用して同一縮尺の韓国道路地図を購入し(韓国の地形図は国外持ち出し禁止の為)繋ぎ合わせた日本と韓国の国際間の図上で方位線を再現した。しかし、伊能中図に記載された方位角の通り対馬の7ヶ所からの方位線の復元を試みたが伊能図の様にはうまく測量対象地点である韓国の陸地には収斂せず手前の対馬海峡西水道の海上で不規則に交差する結果となった。

長岡正利氏は朝鮮の山々が実際よりもかなり近くに描かれていると

指摘、同意見の筆者は韓国連山展望図も作成しており、同氏との意見交換で『山島方位記』を紹介頂いた。(7)

# 「参考文献」

(7) 長岡正利「伊能忠敬の見た山々とその方位線」「伊能図に学ぶ」

東京地学協会 1998

## ② 山島方位記記載の方位角とその精度

『山島方位記五十九・六十』に記載の1813年の対馬北部からの朝鮮の山々の測量方位角による方位線の復元を海図上で試みた。前記伊能図の方位角に該当する棹崎からの方位角を検証し、2台の方位盤による山島方位記記載方位角データを現代の方位角に書き直すと次のようになる。

観測地点 佐護郷 湊村 棹尾崎 (現在の対馬市上県町棹崎)  
測量対象 絶影島 マキシマ (釜山市影島区太宗山 250 m)

方位盤名	記載方位角	十二支	分秒	現代表示方位角
小	亥〇七一五	亥 330 度	7 度 15 分	337 度 15 分
サ	亥〇七〇〇	亥 330 度	7 度 00 分	337 度 00 分
平均値				337 度 07 分 30 秒

十二支の次に「度(°)」「単位を「分」」「分(′)」「単位を「秒」」と表現している。(〇は空欄になっているがゼロと読み、平均値を以って代表数値とした)

## ③ 伊能図と山島方位記の各記載方位角の精度の比較

伊能図に記載の方位角は1度30分刻みの単位であり、棹尾崎(棹崎)からの牧島の方位角亥二分半は337度30分であるのに対して、『山島方位記』から求められた代表数値(平均値)は337度07分30秒であり、この例では伊能図と『山島方位記』の方位角とでは15分から30分、平均で22分30秒の差が生じる。伊能図記載方位角の最低単位は1.5度=1度30分=90分であり、一方『山島方位記』記載方位角の最低単位は5分であり、『山島方位記』記載の方位角の単位は伊能図の18倍の精度である。

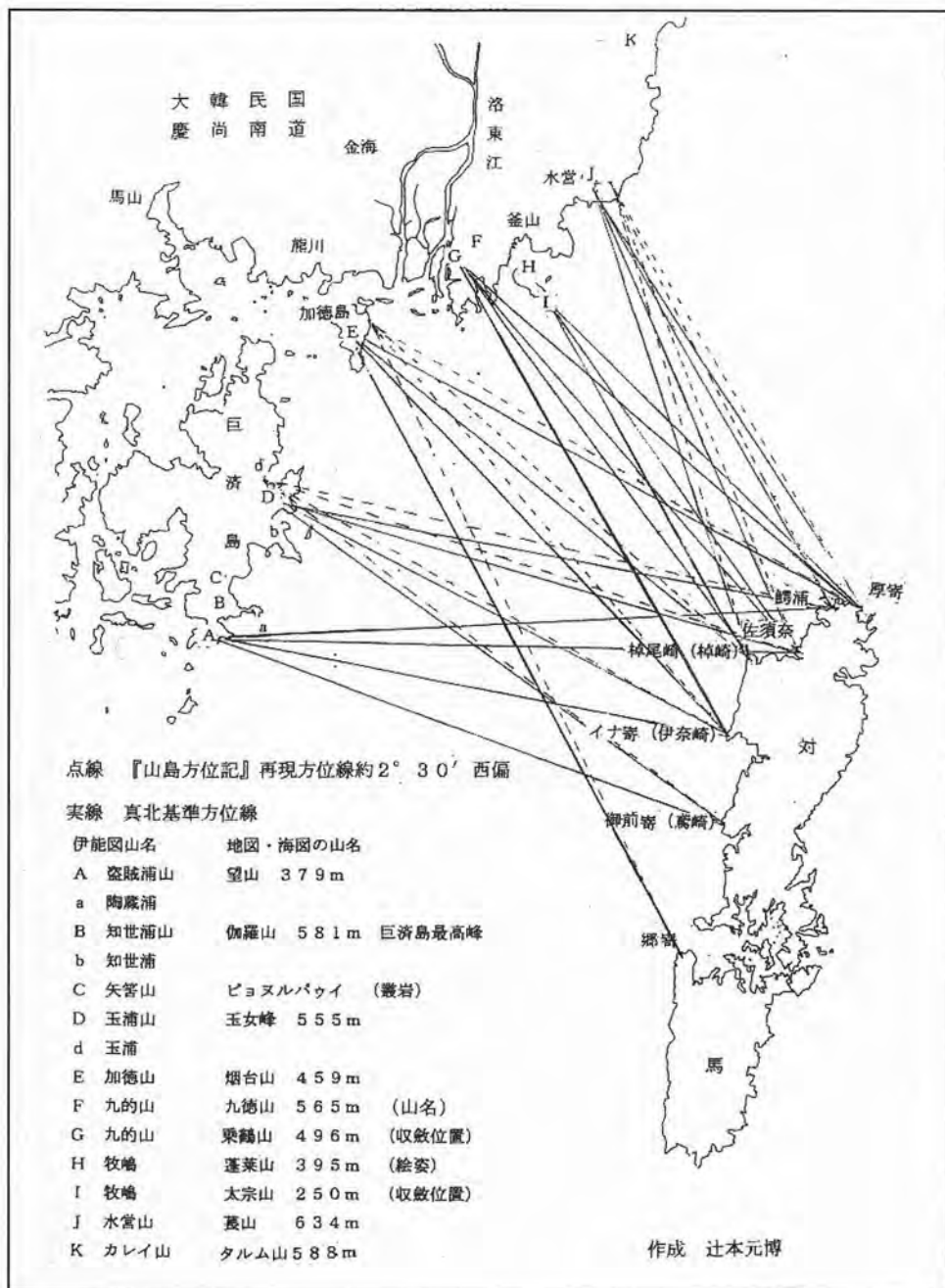
## ④ 伊能図記載方位角の再現方位線不交会の原因及び朝鮮の表現

対馬から韓国の山並み迄の距離約60 kmに対する伊能図の最低単位1度30分=90分の円弧の長さは $3 \cdot 1415 \times 60 \text{ km} \div 90 \div 60 \div 360 \parallel 1570 \cdot 75 \text{ m}$ (二十五万分の一地図上では6.3 mm)になる。更に誤差は加減により前後倍になれば3141.5 m以上になり、更に方位線の交会ともなれば誤差は増加し、複数の方位線ともなれば二十五万分の一の地図上でも方位線は不均等に散らばり集合さえも不可能に近い状態になる。伊能図記載の方位角により複数の観測地点からの方位線を復元しても大抵は誤差を増幅する結果となり韓国の山並みの位置には届かず、手前の海上でも収斂するに至らず不均等に散乱する原因といえる。

『山島方位記』の最低5分単位の円弧の長さは $3 \cdot 1415 \times 60 \text{ km} \times 2 \times 5 \div 60 \div 360 \parallel 87 \text{ m}$ になり、87 mは二十五万分の一の地図上では0.35 mmで収斂しやすくなる。『山島方位記』記載の方位角により復元した方位線は韓国の山並みの位置で収斂或いは極めて狭い範囲に集合する結果となる。但し、『山島方位記』には写真の無い時代の移動測量により観測地点が異なると山名は同じでも角度を復元すると別の

Ｂ図 伊能図掲載朝鮮の山々と対馬での測量地点の同定地図

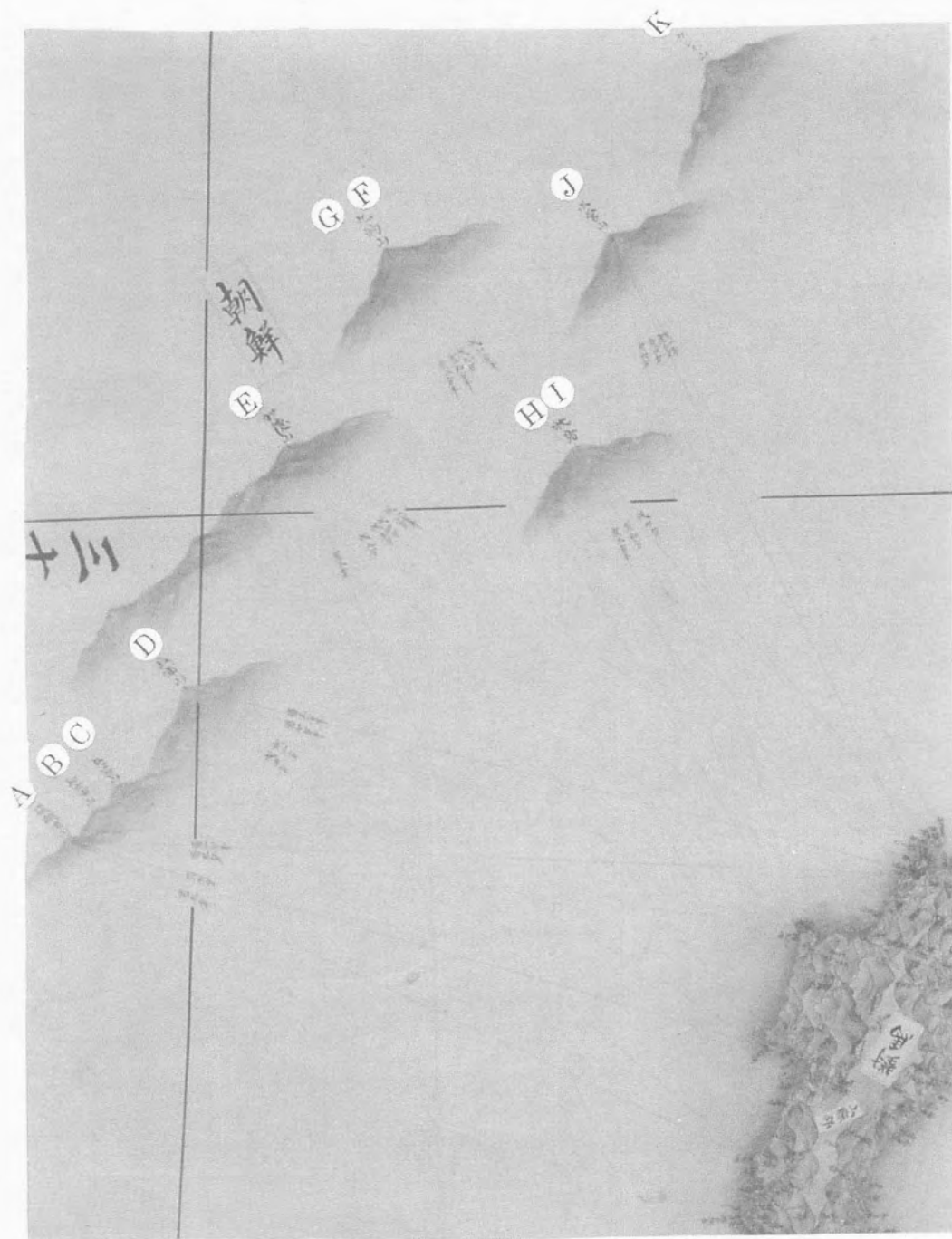
1813年測量 但し 伊能図掲載分





C図 大日本沿海輿地全図 北九州（伊能中図）部分

東京国立博物館蔵 アルファベット表示の位置は同定図を参照



山名の山になる場合もある。明らかにかけはなれた毛筆での方位角の記載間違いや山の見間違いによる山名の錯誤や復元により一見でわかる5度単位の方位盤の目盛りの見間違え等が判明した方位角は除外せざるを得ない。

### ⑤『山島方位記』記載方位角の再現方位線に出る

共通の角度のズレは磁針偏角

1 『山島方位記』の方位角による再現方位線は韓国の山並み上ではほぼ収斂或いは集合するが、再現方位線と観測地点から交差点周辺の最高標高点への真北基準の方位線との間には同方向に概ね共通する約2度30分程度の角度のズレが生じた。(B図参照)

2 対馬の観測地点である鰐浦からの韓国連山展望図でも再現方位線の収斂位置と見掛けの最高標高点との位置関係にも同様のズレが生じた。

3 対馬側の観測地点と右記最高標高点とを結んだ真北基準の方位線の方位角より『山島方位記』記載の方位角による再現方位線の方位角の角度の方が大きくなるということは最高標高点への真北を基準とする方位角より『山島方位記』の方位角の復元方位線の方がより西へ傾いた角度を指していたことになる。これが磁針偏角であるとすればこの場合は西偏Variation Westになる。逆に少なくなる場合は東偏Variation Eastになる。但し、これらを数値的に確認しようとしても韓国の地図データ等は国外持ち出し禁止の為、測量対象への詳細な真北方位角の確認はできない。そこで「山島方位記」に記載の朝鮮観測地点における対馬島内間の視程距離20km以上程度

の測量対象への方位角に付いて、双方の経緯度位置を国土地理院ホームページの地図閲覧サービス『ウオッチず』より求め、同ホームページの便利なプログラム・データの二点間方位角・距離計算式により求めた真北基準方位角と『山島方位記』記載の方位角との差の平均値を求めた。当時の対馬西岸から北端沿岸での試算の角度差は平均2度27分36秒西偏となり概ね約2度30分西偏の結果となった。(詳細後号)

4 但し、この角度差は観測地点近辺の現在の海図のコンパスローズ、或いは国土地理院の観測地点を含む近年の地形図に記載された磁針偏角の角度とも大きく異なる。例えば西暦2000年現在の対馬最北端「泉」の地形図の磁針偏角は7度10分西偏である。磁針偏角は時代により異なるという傾向があり、角度差約2度30分西偏のズレは伊能の測量当時の対馬の朝鮮観測地点の磁針偏角の可能性が浮上する。

5 磁針偏角には同一時期でも観測地点が大きく異なると、異なる角度になるという傾向がある。伊能の対馬測量の前年1813年の種子島での測量の『山島方位記』記載方位角に付き同じ方法で薩摩半島の開聞岳、硫黄島に付いて角度のズレを確認すると種子島での角度差は対馬での角度差とは異なる結果となり、磁針偏角の性質に符合。種子島では『山島方位記』記載方位角は平均1度02分の西偏で、概ね約1度00分西偏ということになり、対馬の概ね約2度30分西偏より1度30分西偏減となった。2000年現在の対馬の偏角7度10分西偏と種子島の偏角5度40分西偏の差は種子島の1度30分西偏減で昔も現代も似た傾向である。

6 西暦2000年迄の約187〜188年間の偏角の年変化は対馬

では約1分半未満西偏増、種子島でも約1分半西偏増程度であり年変化にも共通性が見られる。これら複数の照合から『山島方位記』の再現方位線と真北基準方位線との間に生ずる角度のズレは伊能測量当時の対馬或いは種子島に於ける磁針偏角と見做さざるを得ないことになる。

#### (4) 伊能図の中の朝鮮の山々の同定結果

山座同定の手順 対馬の岬、島、遠見等の観測地点の位置を確認し、伊能図と『山島方位記』の各記載方位角を照合し、『山島方位記』記載の磁針方位角から復元した方位線に判明した当時の対馬の磁針偏角を算入して海図上に方位線を再現し、朝鮮の山々の山座同定を試みた。地形の詳細に付いては写真、対馬の地形図等、朝鮮総督府臨時土地調査局五万分の一地形図等と対馬及び韓国の現地周辺での確認によることとした。

「浦」に付いて 韓国の地名に付く「浦」の字は現在の韓国の地図では韓国語の音読みで「ポ」と読むが、伊能に朝鮮地名の説明をした対馬の住民は「浦」を「カイ」と表現していることに注意したい。これは「浦」の韓国語固有語の「ケエ」の発音が日本語朝鮮地名では「カイ」に音便変化した為であるが、1945年以前の朝鮮総督府臨時土地調査局五万分の一地形図では「ケー」の振り仮名で表現されていた。

「玉浦山」の「玉浦」の場合も韓国語の音読みでは「ラッポ」、固有語読みは「ラツケエ」で江戸時代の日本語朝鮮地名では『山島方位記』にもある様に「ラツカイ」と呼んだ。慶尚南道の熊川（昔は「コムチヨン」）の窯で焼かれた茶道の茶碗の名物を、日本では「熊川」と書いて「こも／か（が）い」と読むがこれは陶器産地熊川の外港である熊浦（コムゲ）である。

をこも／か（が）い」と読む様になったからである。(8) 古文書には釜山（釜山）のことを「釜山海」と書く日本語での表現があるが「釜山浦」から派生したものではないかと筆者は考える。

#### 【参考文献】

(8) 「ある日韓歴史の旅―鎮海の桜―」 竹国友康 朝日選書 1999

(以下次号)

本研究は平成18年度日本学術振興会研究補助金（奨励研究）の一部を使用しています。

(つじもと もとひろ・福助(株)OB、日本国際地図学会会員)

#### 佐原市から香取市へ 新たな歩みへ



去る三月、佐原市は近隣市町との合併により香取市になりました。香取は香取神社に名が有るように当地では古い郡名です。本誌では当面、最新の話題などでは香取市を使いますが、忠敬さんに関する話題では佐原を継続して使っています。佐原（現香取）など敢えて注釈を使いませんが、どうぞご了承をお願いいたします。編集部

# 「文化の開拓者 伊能忠敬翁」(一)

宮内 敏

昨年、祖父宮内秀雄との共著で表題の本を公刊した。伊能忠敬研究会編集部からの依頼もあり、ここに紹介したい。

還暦も過ぎた陽春、実家内の整理をしていた折、本箱の片隅から祖父(秀雄)の変色した遺稿を見つけたのである。

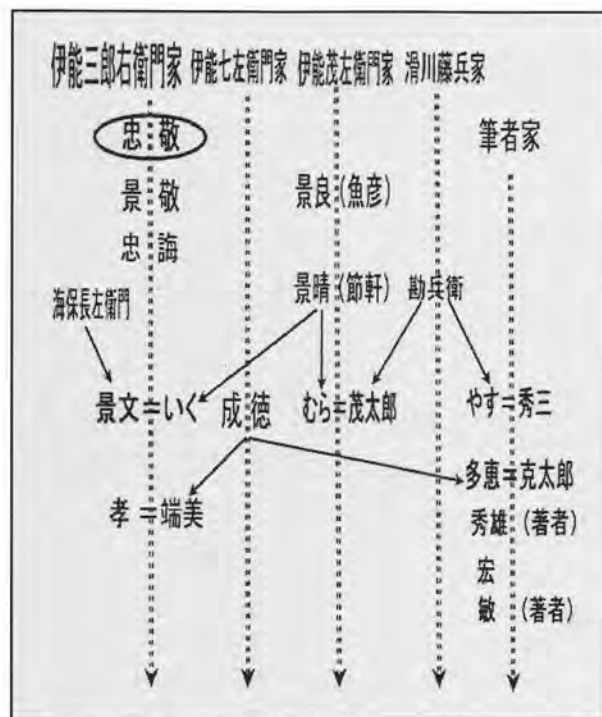
祖父の母は伊能忠敬翁の後裔伊能三郎右衛門端美氏(同族伊能七左衛門成徳次男で三郎右衛門の婿養子となる)の実姉に当たる。

祖父は弱年両親と共に佐原町に住んでいた。「その間、三郎右衛門家に入りし、また、同族外祖の伊能七左衛門成徳氏より、折に触れて翁の性行について聞かされ尊敬と親しみを感じていた」という。

(祖父稿の序より)

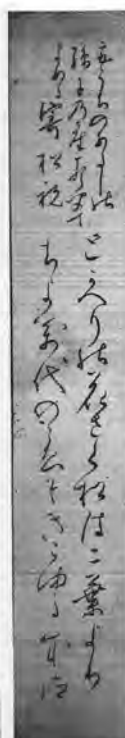
父も旧制佐原中学時代は、伊能家旧宅(現、国指定史跡)に下宿して通学していた。旧中時代、伊能孝さん(忠敬より五代、三郎右衛門端美氏の妻)には甥の子ということで、大変かわいがられ、時に見学者が来ると案内役などしていたという。注①

母の弁によると、私の両親の実質的仲人は伊能孝さんであったと聞く。祖父の祖母やすは伊能茂左衛門家(楫取魚彦を出した)伊能節軒(注②)の長女むらの婿養子(茂太郎十一代当主)とは姉弟の関係である。



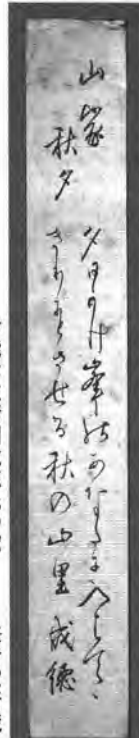
伊能家と筆者家の関係

著者秀雄誕生に際し、伊能端美氏から贈られた祝儀の短冊



伊能七左衛門成徳氏の歌

筆者家所蔵







伊能多恵 滑川やす  
(秀雄の母) (秀雄の祖母)  
宮内秀雄(中央)

明治13年(1880年)頃  
ガラス乾板写真  
(黒い布上に置いて見る)

むらの妹いくは忠敬の嫡孫忠誨の死により、断絶していた伊能三郎右衛門家を海保長左衛門の三男景文と夫婦養子で再興した。伊能家とは縁が深い。(前記関係図参照)

祖父の祖父秀三(定秀)は現銚子市高田町(旧高田村)の宮内清右衛門十二世胤繁の三男である。長男定彦は(注③)昌平齋で塩谷岩蔭(注④)のもとで学ぶ学者であった。次男俊二(定重)は江戸で鈴木春山(注⑤)について学ぶも二十歳にして病死した。三男秀三が高田村に継いでいたが、長男定彦が戻った為、分産創業(ほぼ折半)し濱宅と称した。

秀三は高田村で廻船、醸造業などしていたが、醸造の失敗(酒が酔に)や、火災などがあり、高田村での事業を諦めて、江戸の出店で金融業をしたが債権の取立てがうまくゆかず江戸の店を閉めて、潮来町(注⑥)に生活基盤を移していた時期があった。事業家としては祖父の祖父秀三の代で終わった。

祖父の父克太郎は村役などしていたが、祖父秀雄(著者)が幼少の頃は佐原町の郵便局をやっていた(伊能茂左衛門家・三郎右衛門家と

の縁戚関係があつて可能であつたと思うのだが(注⑦)。従つて、祖父は佐原小学校を卒業している。

幼少、祖父はよく伊能家に出入りし、特に母方の祖父伊能七左衛門成徳氏から折に触れて忠敬について聞かされ育つたという。

後に祖父は千葉師範学校に学び、明治三十六年に卒業し、県内の教育界にあつて、四十一年の長きに亘つて教職を務めた。その間、祖父は翁の業績を説いて師弟薫陶の資としていたが、小編を公刊し、趣旨教化の一助とする(祖父初稿の序より抜粋)夢を持ち、仕事の合間を縫つて書の編述を試みていた。



明治17年1月1日(消印より)

いつ頃から執筆し始めたかは不明だが、初稿は昭和十三年頃に完成している。第二稿は昭和二十年頃に、ほぼ完成しているにも拘わらず、書として発刊させることなく昭和二十六年に病没した。晩年健康を害したとはいえ、五年以上もの歳月があつたにもかかわらず発刊しなかつたのはなぜゆえであるうか。

遺稿が「修養の龜鑑(注⑧)、文化の開拓者 伊能忠敬翁」と題されていることから明らかなように、



祖父の遺稿 昭和十年代に書かれた初稿

戦前戦中の時代背景のもと教育者という立場で書かれたものであり、敗戦という予期せぬ出来事の前に、祖父の云う「師弟薫陶の資」という当初の目的が無くなってしまったのかも知れない。想像できうる確かなことは、戦後価値観が大変革する中で大いに迷い躊躇したということである。

祖父が忠敬に関することを調べ、書とするためにまとめていたという事を聞いてはいたが、遺稿を手にしたのは初めてであった。

遺稿はほぼ完成していたとはいえ、書き込みや訂正等が多く、旧書体、旧かなづかいで書かれており、語彙・表現も今の私にはあまりに難しく、すらすら読める代物ではなかった。

しかし、よく読んでいくと当時伊能家にあった書簡や、伊能家の方々からの聞き取り等、祖父だからこそ知り得えた情報も多く含まれているように思われた。

祖父は長年教育界にあつて、戦前の「尋常小学校修身」における偉人伊能忠敬を自ら教授してきた訳で、戦前戦中という時代背景を理解した上で、治産・修養・敬師・立身・出世・美德等の祖父の扱い方をみるのも興味深い。また、伊能家やその縁者による書はなく、内側からの書としても意味があると思われる。これらの点から、このまま埋没させるには勿体無く、形あるものとして残すことは私の責務のように思えたのである。

遺稿は初稿と第二稿の二つがあつたが書としてまとめ上げるに当たって主に第二稿を用いることとした。意味の判らない所は初稿と見比べながら書き改めた。また初稿を採用した所もある。

編述するに当たって、第一に、出来るだけ祖父の用いた語彙を使用することを心がけ、内容を大きく変えることなく、自分がすらすら読

める程度にまとめることを目指した。祖父は一字一句に拘り推考を重ねた様子が窺える。しかし、自分に理解できる言葉に改める必要から、表現や語彙を変えざるを得ない所が多々あつた。そのため、文章の扱い方に一貫性に欠けるところが多く残る結果となった。また、全体構成についても、ちぐはぐな所が若干ある。

現在、伊能忠敬に関する書籍は多く刊行されているが、昭和十年代以前に絞ればそれほど多くはない。しかし、敢えてそれらと事実内容を比較検討することなく書き留めることにした。なぜなら、それには膨大な時間と労力がかかることも確かだが、素人の自分にどれほどの事が出来るかであり、また、主に内向きの書という側面もある。そして何より、それは祖父の記録だからである。

相違点が出てきた時に其の都度、事実の検証をして頂く方があらかじめ調べて辻褄を合せておくより正しい方法だと思ふのである。

第二に、「中学生にも読める」を目標に難しい語彙には振り仮名を付け意味も解説した。また、読み易くするため、適宜、内容に沿った図や写真を入れることとした。

第三に、補足の意味をこめて現在の研究でわかっている事などは注や参考の形で書き加え、巻末には資料編を設け、この書を読めば、伊能忠敬とその周辺のことが、ある程度解るよう関係あるものを収録した。編述にあたり、内容を歪めない程度に留める予定であつたが、ボリュームは祖父の遺稿の五倍にも膨らんでしまい、祖父の題名「修養の亀鑑、文化の開拓者 伊能忠敬翁」と違和感を生じさせる結果になった。

本書では、題名を単に「文化の開拓者 伊能忠敬翁」とした。題名を変え、少なからず内容を歪めたことについて、祖父には祖父と共著

とすることで許しを乞いたい。祖父の遺稿については、昭和十年代から二十年代初頭の著作として現状のまま大切に保存したい。

本誌を刊行するに当たって、初公開となる伊能忠敬直筆の書簡と地図の写真を載せることにした。これは著者宮内秀雄の母多恵が嫁入りする時、形見分けとして貰い受け持参したものである。

また、筆者家所蔵資料等についても公開することにした。忠敬を生み育てた下総の地を知るには地理的、歴史的背景を理解する必要があると思うからである。

この地は平安時代平氏が支配し、中世は千葉氏、そして、里見氏、正木氏もこの地に大きな影響をあたえた。豊臣秀吉により小田原城は落城（一五九〇年）し、北条氏・千葉氏は滅びた。権力構造の大変化を機に未開地の多かった下総の地に帰農し、その地のリーダーとなった者も多い。伊能氏・平山氏（忠敬の仮親季忠家）・神保氏（忠敬の実父の実家）もそうであったといえないだろうか。この地方の旧家の世代はおよそ十七代前後であることが多い。多分一五九〇年（小田原落城）後あたりを初代としているからではなからうか。

当時、佐原・潮来・銚子は水運により江戸と繋がっており、同一の経済圏、文化圏といえる。これらの地は東北地方の米や木材を江戸に運ぶ、物流の拠点であった。物が動けば人も金も情報も集まる。豊かな下総の地が忠敬を生み育てた。この地域の研究に役立つとの考えから本書で筆者家資料を公開することにした。

この書の発刊は、祖父の努力を無にしたくないという一念から発したものであるが、これを機会に未公開書簡等を世に出すという目的もある。本書の発刊により、新しい事実がひとつでも発見されるものとなるなら私として望外の喜びである。

## 注

① 伊能孝氏から宏長女（著者敏の姉）出産に際しての書状



祖父の遺稿から

祖父の母、多恵が持参した地図（忠敬が写し取ったと思われる）

大きさ ほぼA3サイズ カラー

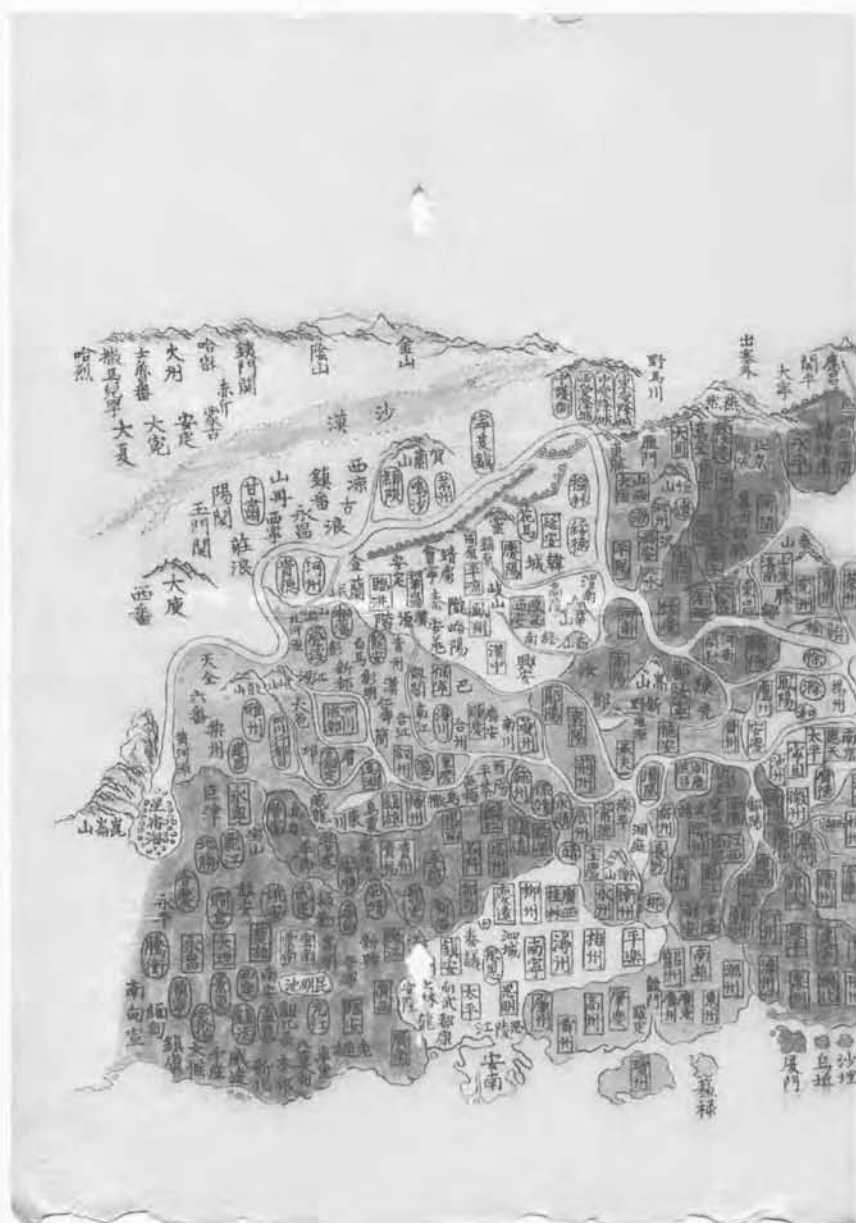
神戸市立博物館 学芸員 小野田一幸氏に調査を依頼

いくつかの地図を総合して写し撮ったと考えられる。「小野田氏見解」  
原典について調査中。情報をお持ちの方、連絡いただければ幸いです。





日本図は簡素な日本の形態から赤水図とは考えられない。日本の歴史地図である「本朝往古沿革図説」などが想定される。中国、朝鮮図は「広輿図」あるいは「唐土歴代州郡沿革地図」から採られたと考えられる。「広輿図」の場合中国に記載された地名すべてを対照することが必要。これら歴史地図は水戸藩校の立原翠軒が関わっている。忠敬は各種地図を集めていたので蔵書の中に、それらが含まれていればかなり絞ることができる。【小野田氏見解】



② 伊能景晴 節軒と号す。伊

能茂左衛門家十代当主。常陸潮  
来の儒学者宮本茶村に学び識見  
に富み、醤油醸造の傍ら公共事  
業に盡瘁し藍綬褒章を下賜され  
る。当時、佐原町の最有力者。



ひととき大きな伊能節軒の  
墓石 (佐原市観福寺)

③ 長男定彦 昌平饗で塩谷右

蔭に学ぶ、近末来坤興年表編述、後に、実家に戻って家業を継ぐ。(宮  
内清右衛門十三世)

④ 鹽谷宕陰 文化六年(一八〇九)慶応三年(一八六七)、通称 甲蔵、

十六歳で昌平饗に学ぶ。安井息軒、山田方谷と同窓。松崎慊堂の弟子  
となり、推挙されて水野忠邦に仕えた。水野が老中首座となり天保改  
革に乗り出すと顧問となる。文久二年(一八六二)安井息軒、芳野金  
陵らと昌平饗教授となり、文久三博士と云われた。「日東の欧陽脩」と  
称せられ、頼山陽と並ぶ江戸時代後期の大文章家である。

塩谷宕陰には子がなく、弟の實山が塩谷家を継ぐ。その子の青山、  
青山の子の節山(塩谷温)と、四代にわたって漢学で盛名を馳せた。

節山(塩谷温)は大正・昭和初期に東京帝大教授を務めた。

佐原諏訪神社 伊能忠敬像碑文、銚子川口神社 内宮内君浦(吉川三  
兄弟の次男、宮本茶村の弟子、文人) 碑文は塩谷温氏によるものであ  
る。また塩谷家に伊能茂左衛門家十一代貞助の娘が嫁している。宕陰  
の代表的著作「宕陰存稿(十七巻)」等。

⑤ 鈴木春山(一八〇一〜一八四六)

江戸末期の田原藩医(蘭医)、兵学者、崑山の友人。渡辺崋山、高  
野長英、鈴木春山らで尚齒会を結成し、幕府の救荒対策や対外政策を  
中心に時事を論じた。

⑥ 潮来宮本家と筆者家は大変深い関係 秀三の母ミヨ(茶村の妹)は

宮本家から嫁入りしている。ミヨは伊  
能忠敬書状にも登場し、神保庄作(忠  
敬の兄の子で測量に参加)の嫁にしよ  
うとした。(後述予定)。また宮本茶村  
の父(高重)は筆者家から婿入りして  
いる。また秀三の兄定彦の配タニ(茶  
村の娘)もまた宮本家から嫁入りして  
いる。伊能茂左衛門家と宮本家の関係  
も深い。

⑦ 明治政府の郵便局設置 予算がな

いため、「民間資産の活用」考え、地元  
の名士等から「給料不要 局舎提供」を  
条件に、郵便局(郵便取扱所)を開局  
させ、全国に統一された郵便網を完成させた。明治五年宿駅制度が廃  
止され日本全国郵便網が完成、明治六年に料金の全国一律均一料金・  
郵便の独占等を布告している。明治八年には郵便局を一〜五等に分け  
た。

佐原は当時の有力者であった伊能茂左衛門家あたりが開設し、その  
運営を祖父の父克太郎が任されていたのではないだろうか。筆者家には  
明治初期の切手や証紙・佐原郵便局の名がある野紙などが残されて  
いる。明治十三年時の下総国郵便局一覧によると、佐原は四等局で為  
替局、預金預所になっている。因みに千葉は二等局、三等局はなく、  
松戸・流山・行徳・船橋・野田・向河岸・木下・佐倉・安食・成田・  
銚子・荒野・八日市場等が佐原と同じ四等局である。

⑧ 亀鑑(きかん) 人の行いの手本、模範

(みやうち さとし・伊能家縁戚、元高校教師)



宮本茶村顯彰碑(潮来市)

長崎測量特集1

平戸ご案内

遠藤 薫

平戸街道を旅するとき、たとえば空路長崎入りするのなら、空港のある大村から大村湾沿いをJRで佐世保に向かい、佐世保から田平平戸口までは松浦鉄道で行けば、ほぼ平戸街道に沿った旅ができる。田平平戸口から伊万里までの松浦鉄道は御厨街道に沿っている。

小杜刊行の九州文化図録撰書『伊能九州図と平戸街道』では、平戸藩旧蔵の伊能図や絵図と併せて平戸を取り巻く歴史を現在の風景写真とともに紹介している。

第一章 平戸藩の交通体系と参勤交代

平戸街道の起点は、平戸島平戸城下の幸橋近くの札の辻であることは、多くの人に知られていない。

近世初頭から高札場が置かれて諸街道の起点だったか否かは明確ではないが、少なくとも元禄十五年（一七〇二）に平戸城外郭の幸橋の普請の成就を見てからは間違いのないと、九州大学名誉教授の丸山雍成氏は説き明かす。

平戸藩主松浦熙の『御参勤之節、御立揚附』では天保十



幸橋／この橋の近くに札の辻が平戸街道の起点。

三年（一八四二）平戸より「一里海上」を経て日ノ浦に上陸している。吉田松陰は『西遊日記』に「日浦に至る、舟行一里にして平戸城下に至る」と記している。これらは幕末期の文書であるが、日ノ浦との距離「海上（舟行）一里」という数値は、平戸街道の起点が幸橋近くの札の辻であることと矛盾しない。

第二章 平戸藩と伊能図

平戸にある松浦史料博物館には、平戸藩が依頼した伊能図の副本が収蔵されている。同館の久家孝史学芸員の解説によれば、九代平戸藩主松浦静山は、学芸大名と呼ばれていた。伊能忠敬が日本全国を測量していた時期、松浦静山は、すでに隠居し学究の日々を送っていた。当時の知識人たちと盛んに交流していた静山は伊能忠敬とも交流があり、領内測量図を作製したら贈ってくれるよう頼んでいたのである。忠敬の死後、弟子たちによって作製され文政年間に松浦家が入手した地図を私たちは目の当たりにすることができる。

松浦史料博物館には、平戸藩領全体と、長崎周辺の大図五点、瀬戸内海・九州北部沿岸を描いた三点から成る中図と、一枚に九州全体を描いた小図の副本が現存する。いずれも精確かつ美麗である。

平戸を地図で見ると、



松浦史料博物館／門のところにはオランダとイギリスの国旗がたなびいている。

九州の西端である。古代から大陸と関係が深く、中世には松浦党水軍が支配していた。古くから国際都市の様相を呈していた土地柄であるが、十五世紀半ばにポルトガル船が来航したのを機に、日本における西欧勢力の陣取り合戦の中心的舞台となつていく。歴史的役割という側面から考えると平戸という土地はまことに興味深い。

### 第三章 平戸藩と海外貿易の変遷

この項は平戸市教育委員会の前田秀人氏にお願いした。ポルトガル・スペインといったカトリック勢力は、東洋諸国への航路と販路を先行確保していた。日本へは先にポルトガル船が来航し、勢力への布陣を張った。ポルトガル・スペイン・カトリック勢力の南蛮交易は布教とセットになつていった。

秀吉の時代に伴天連追放令により禁教されたものの交易は続き、トブラルが続出した。

ポルトガル船が平戸を去ったのち、非・ローマカトリック勢力のオランダとイギリスの争いがはじまるが、イギリス船をオランダ船が幾度かにわたって襲撃して、平戸イギリス商館はたちゆかなくなつてしまい撤退した。その後オランダがどのようにして日本で生き残ったのか経緯を追つてみよう。

島原の乱は、幕府軍輸送の



オランダ堀／高さは約2メートル、厚さは70センチほどで、漆喰で塗り固められている。

ための陸路（すなわち街道）の整備や江戸幕府の日本における伴天連排除と、鎖国の完成という位置づけがされているが、オランダ軍勢力が、日本で積極的な役割を果たした事件としても注目できる。絵図を見ると、原城を包囲する各藩の船に混じってオランダ船の姿がある。ほんらい「商船」は「軍艦」の対義語として使用される言葉だが、オランダ商館船には平戸藩主の命により大砲が積み込まれた。射程距離の長い砲弾二〇〇発以上で原城を海上から砲撃していた。アウトレンジ戦法における想定外の新兵器に一揆勢はひとたまりもなかったことは想像に難くない。

オランダは、キリスト教の布教を行わず、貿易重視でいく。だからキリスト教徒を攻撃もする。ということをもつて示すことで、日本における西欧勢力の独占的地位を得たのである。

そういった方向から見ると、平戸周辺における海外諸勢力の攻防と島原の乱は、そのまま、日本における西欧勢力の陣取り争い、という側面を持つていたのである。オランダ人を長崎の出島に移すことで鎖国は完成するのだが、オランダ人たちは、勢力争いの勝利と引き換えに、狭い出島での不自由な生活を幕末まで強いられることになったのである。

### 第四章 平戸街道

平戸街道（ルートは、平戸く田平く一関く江迎く佐々く相浦く佐世保く早岐く川棚く彼杵）は、平戸街道江迎筋のことで、平戸街道の本通りである。

このルートは、戦国時代に平戸松浦氏による松浦統一後、南進政策で大村氏と対峙することになり、その原形が出来上がったものとされている。



平戸対岸の田平から  
彼岸への道は、平野の少  
ないリアス式の地形で、  
そこに街道を敷くと、ど  
のようなことになるかと  
いうことについて、この

項の筆者で地理学者の鴨  
川卓氏の解説は大変興味  
深い。解説にある「隆起  
海食台地、メーサ地形、  
溶岩台地、瀬戸内構造線」  
といった地形を歩きなが  
ら目にして勉強できる楽  
しいものとなっている。

長崎県は大小の入り江が多く、海岸線の総延長は北海道を遥かに越えて日本一。測量が微細になり、伊能忠敬一行も大変に苦労されたものと思われる。

第五章 御厨筋街道



江迎の山ノ田川／隆起海食台地の河川。  
大小にかかわらず川底は固い岩盤である。

御厨筋街道（ルートは、平戸／田平／一関／御厨／志佐／今福／楠久津／伊万里津）は、田平の日ノ浦宿から二・五キロほど西に進んだ一関で、江迎筋と分岐する平戸街道御厨筋のことである。

松浦史料館所蔵の『御道中図絵』には「右江迎左御厨道」と刻まれた追分け石が描かれている。また佐賀との藩境には、絵図に描かれた「じようこう石（じようこうとは蛙の意）」が座っている。

御厨筋街道の今福は、松浦家初祖の源久（承德元年「一〇九七」に

松浦を姓とし、松浦久とする）が居館を置いたところで、この地を中心に、今福宗家松浦氏は、その後、時代により平戸松浦氏、志佐松浦氏との争いがあった。

執筆は郷土史家の金子武巧氏で、本書が上梓して、二カ月後の平成十六年四月二十日にお亡くなりになりました。街道の風景写真を提供いただいた加権敏郎さんによりますと、

「……通夜に行きましたが、奥様とご子息から『父は入院前に、この本を手にする事が出来、大変よろこんでいた』と、たいへん感謝されました……」とのことでした。

本書のために金子先生からいただいた原稿が遺稿となってしまっただようです。慎んで御冥福をお祈りします。

◇

松浦鉄道から海を眺める  
とき、松浦党の活躍、大陸  
との交流とせめぎ合い、西  
欧列強の勢力争い、測量の  
様子など、この海が辿って  
きた歴史に思いを馳せざる  
を得ない。このあたりは、  
山海の幸や風光の明媚さにも  
恵まれたところである。  
ぜひ一度訪ねてみることを  
おすすめしたい。

（えんどう かおる・

図書出版のぶ工房）



じようこう石（蛙石）／長崎県と佐賀県の境に据えられている。

# 長崎街道こぼれ話

河島 悦子

「九州の長崎街道が歩きたいけど、消えてしまったんだってね」作家、司馬遼太郎氏の一言にただ嘖然とした。「街道を行く」シリーズに長崎街道はない。

終戦前、筑豊に連合軍捕虜収容所が設立され、西洋人が多数いたの  
で空襲はのがれるのでは：と低学年児童の私は、親類疎開に伯母夫婦  
宅へ預けられた。

そこに長崎街道が通っていた。松並木がそこかしこに残り、昔、茶  
店だったという家はいつも老人達がたむろして、明治に鉄道が開通す  
るまで、旅人が行き交った日々を懐かしげに話していた。「思い出は  
老人の宝宝箱」というのが、空襲のない町はのどかで宝宝箱の中は聞  
いたこともない話で一杯だった。あの頃の老人達も、松並木も、茶店  
も消えたが道筋だけは今も残っている、だのになぜ：

福岡県内、こまかくいえば、筑前領内は小学生の頃に本物で調査済  
み、県北の北九州市小倉と佐賀県西方、長崎県全部が未調査であった。  
子供のころ、この道を歩いて長崎まで行くのが夢だったが、三十年  
後の昭和五十年代、車社会の到来とともにすべてが大きく変貌してい  
た。それでもまだ明治生まれの人も多く、いまよりマシだった。

伊能図の存在は未だ知らず、紀行文の数々を読みあさり、暗闇の中  
を手探り状態で伝承を拾い継ぐ日々が続いた。そんな頃、東京国立博

九州文化図録撰書 発行／図書出版のぶ工房

Tel 092-531-6653



九州文化図録撰書刊行に際して

一本の道が「異文化の情報」の媒体だった時代があった。

今や「異文化の情報」は、パソコン回線を通じて瞬時に机上に現れる。

グーテンベルク以来「印刷媒体は人を幸せにするか」という命題が、

二十世紀半ばからは「テレビは人を幸せにするか」

そして今「デジタルは人を幸せにするか」という命題が人類につきつけられている。

情報の質とスピードこそ違いますが、発信についての真摯な態度こそ、

常に求められるべき姿だと考える。

人びとのゆたかさと幸福のために、情報と文化の果たす役割は何か。

印刷媒体に何ができるのか。それを考え続けることが、

わたしたちの使命であり、責任であると思う。

遠藤順子

物館の美しい伊能図に出会った。

二十一万分の一図だから細部は不明ながら、道の両側の村名はいまも大字として残っている。鬼に金棒を持たせたも同様で、スイスイ行くかと思いきやそう世の中はあまくない。

「伊能忠敬が通ったア？あんな偉い人がこんな田舎を通るものか」これはいい方で、拡大コピーの伊能図を見せると、「ウン、たしかにこの道を通ってるナ、でも奉行さんはこの道は通らないよ。伊能忠敬は隠密だから本道は歩かせないんだ」忠敬隠密説を大まじめにのたまう郷土史家先生もいた。古老に聞くと、子供の頃に祖父さんから聞いた話だから間違いないと元禄図に示された道をかたくなに押し通す人もいた。

佐賀県内の宿場に江戸初期に建立した寺がある。ここの住職なら古い話も聞けようかと立ち寄る。「本当にケンペルやシーボルトがうちの前を通ったんですか？」と驚いた様子なので聞き取りは諦め、いろんな紀行集の書名をおしえてあげた。後日談だが、二年後、校区の人々に月二回、文字通り寺子屋で郷土史講座を開き、地元民の尊敬を受けていた。

これではいつ長崎に辿り着けるか分からない。教えてくれる人があって、法務局の最古の字図を知る。

明治十五年度の作製だから、幕末からさほど変わってはいない。測量日記と照合してみると、曲り角には必ず字名が示されている。もう聞き取り調査の必要はなかった。但し佐原の記念館にある測量日記が読めない。とぼし読みというか、判じ読みでは分かり兼ね困り果てていると元館長佐久間達夫氏宅を教えてくれた。あの学芸員さんはどんなだったのだろう、いまもって分からない。きっと神様の化身に違いない。人間の記憶はあてにならぬものだ、よくぞ忠敬先生、日記を

残してくださった。ご子孫もまたよくぞ保存してくださったと思う。

長崎街道は人々の脳裏から消え去っている。本の題名が決まった。『伊能図で甦る古の夢、長崎街道』七色使いの地図帳だから印刷会社も大変だったのか、五ヶ月を経た完成直前、まっさきに見て欲しかった司馬遼太郎氏の突然の訃報。

一九九七年、やっと出版、十六年かかっていた。福岡、佐賀、長崎三県にまたがる道は、各地の史談会が、否・容認の両極に割れ、否認組は根拠を示せとすごい剣幕でつめよる。伊能図、明治の陸地測量図、旧字図を見せても「それは伊能忠敬がたまたまそこを通っただけ」だと譲らない。私だってそのころ生きていたわけぢやなし、「どうぞ御勝手に」と引き下がっていると近辺の農家の人々が、「昭和初期、家のボケ爺が、大名かお奉行がお通りじゃとか何とかわけの分からん世迷い言を云うんで、いつも叱りつけとったが、あれは本当の話ぢやなかったろうか、知らんこととはいえ年寄りにすまんことをした、なんぼか淋しかったろうに……」と名乗り出てくれた土地もあり、「たまたま忠敬が通った」説は近年影をひそめてきた。

出版があと五年遅れたら、証明者は勿論、法務局の旧字図も消滅していた。九州人は新しい物はすんなり容れるかわりに、古いものはポイ捨ての県民性だといわれる。

古いもので思い出すのが測量日記。長崎県平戸城下で『右に阿蘭陀屋敷跡あり、左に舟着きあり、字松のトトウという、祝町、左に船着き、字中のトトウ』とある。船着場の名称が〇〇トトウというのだが、漢字で渡唐と書く。中国貿易船、遣唐使船が寄港していたのであろう。福岡の博多港、現在は内陸になっているが、渡唐口という場所があり、トトグチといって幼いころ私たちの水遊び場であった。

地名はできるかぎり残したいものである。その意味で東京八重州口、オランダ人、ヤン・ヨーステンが住んでいたヤオス河岸の名は見事に活かされている。彼とともにリーフデ号で漂流してきた航海士、イギリス人ウィリアム・アダムス（三浦按針）は相模国三浦郡に二百五十石の領地をもらい、息子アンジに譲り平戸で病没した。供養塔が旧領地にあり京浜急行線に按針塚駅の名が残っている。



平戸のオランダ商館(モンタヌス日本遣使録所載) 長崎オランダ商館の日記より

四十年前程前、平戸市の小丘で按針の真墓というのを見た。四角の石組みだったと思う。東照神君のお気に入りだった人だから平戸松浦公も粗末なこととはしないと思われるが、国史辞典では真墓は不明と書かれている。話は測量日記に戻る。文化十年二月三日平戸で『枝川内村、川内浦、阿蘭陀屋敷の跡あり(平戸蘭館の第二倉庫跡) 国姓翁住居の屋敷跡あり、今は浦人住居』とある。我々年代は国姓翁合戦といえは知らぬ人はないが、今の若い人はどうだろうか、鄭成功の生家が残っていたが、柱に白蟻がついていた。

私の六十年に及ぶ最終目的地長崎を語るには、そのルーツ平戸を避

けては通れない。

「松浦党」上、下の二家があり上松浦党は、唐津岸岳城を本拠としていた。波多氏を名乗っていたが、秀吉の朝鮮出兵の折、敵前において卑怯の振舞有り」と呼び戻され帰途、筑波へ流された。改易になった家臣団に『大友義鎮(宗麟の子)と共に居る』と便りが一度あったのみで、いまもって消息不明である。

海外貿易を本業とする家系だけに、平戸下松浦家は外国船、とくに西欧船に対し便宜を図った。

天文十二年(一五四三)種子島に始まるポルトガル交易は鹿児島で行なわれ、同十九年(一五四九)フランシスコ・ザビエルが来鹿、翌年は平戸に移っている。その頃の長崎は『西海辺僻の地にして、昔年数家の樵、漁等、自ら生業を営むのみにて、諸氏来集り、駅路より郡国に往来する等の事之無く、元亀元年(一五七〇)西洋の商船初めて湊に着岸せしめ交易を通せん事を願ひ』とある。

長崎はキリシタン大名大村純忠の領地であり、彼は領民すべてをキリスト教に改宗させ平戸では許されなかつた神社、仏閣の全廃、旧長崎市をイエズス会に寄進、教会の設立と、インドのゴア、中国のマカオに次ぐ大租界地が出現した。

イエズス会、長崎進出のわずか五年後、天正二年(一五七四)と



17世紀のオランダ商船  
長崎オランダ商館の日記より

いう。天正十五年（一五八七）島津攻略の帰途、この話を伝え聞いた豊臣秀吉は烈火の如く怒り、筑前箱崎において、宣教師はすべて二十日以内の退去、イエズス会寄進地没収、公領化と鮮やかに対処した。この時の触れ書き高札を平戸松浦資料館でみた時、感動で鳥肌が立つほどだった。

宣教師達も鳴りをひそめ、あるいは一応国外退去、商人姿で再入国、商人として布教する。国情変化の情報がすぐには届かない西洋からは、フランシスコ会、ドミニコ会等の神父達が次々と来日、文録・慶長の役に西国大名は大部分が渡鮮、九州は隙だらけの時代もあった。

宗教は恋心に似て、阻止すればするほど燃え上がるもので、都から運ばれ長崎で処刑された二十六聖人を幕明けに、多くの人々が殉教した。

平戸から長崎へ移った南蛮（スペイン・ポルトガル）人に替わり、慶長十三年（一六〇八）オランダ東インド会社が居を構えた。勿論唐船は古くより往来している。この地は海流の関係で都合が良かったのだらう。平戸の紅毛人達はプロテスタントの商社マンだったので、松浦公と宗教上のトラブルは起きなかった。

イギリス商館は経営不振で、元和九年（一六二三）自主撤退した。蘭館に敗れたともいえるが、蘭館も赤字つづきの三十年だったという。小さな市場、日本では一社しか生き残れないと見てとったオランダ商人達は、先鞭をつけた南蛮人を追い落としにかかる。

寛永十三年（一六三六）長崎では、市中に寄宿する南蛮商人達を集中管理、いわばキリスト教布教を封じる措置として、岬の突端に人工島を築いた。民間人二十五人に出資させ、出島株を発行、入居者が家賃を払い配分するもので、年、銀八千貫だった。二年後、島原、天草の乱勃発、オランダ商館員達は、江戸幕府に貿易許可御札と称して度々上京、ポルトガル商人達の危険性を力説した。これは虚報ではなく、

実際に一五三〇年、ブラジルでは原住民を殺戮絶滅させ、降った者は内陸部に追い出し、アフリカから黒人奴隷を輸入、酷使して収益を上げていた。

これはポルトガルのみに限ったことではない。先進西欧諸国の植民地政策であり、オランダとても人のことを云える立場ではなかったが……



長崎港之図 円山応挙筆 寛政4年(1792)

長崎県立美術博物館所蔵 国史大事典より

歴史にもしくはないが織豊・徳川の全国統一がなされていなければ、我が国もどうなっていたかわからない。島原の乱平定後、寛永十八年（一六四一）ポルトガル撤去二年後、空家の出島に平戸オランダ商館への転居令が出る。各地で自由貿易だった中国船も、寛永十二年（一六三五）より長崎のみ着岸荷揚げすべしと。貿易の巨利は幕府独占の仕組みになっていた。西洋と東洋に小さな窓口を開け、世界の情報



を「風説書」として上呈を義務づけ、近い隣国、朝鮮・琉球とはよしみを通じる。見事といえる外交だが、ロシアに対しての認識は欠けていた。だから忠敬先生の出番が廻ってきたともいえる。

出島に転居するにあたり、商館側と家主達の家賃交渉明細書が残っている。ポルトガル人は八千貫払ってくれたが、オランダは五千五百貫、屋根と家の外側は家主負担、屋内は借り主負担、倉庫もこれに準じる。陸地に架かる橋は、家主が奉行所に交渉、公費負担に決まった。

銀は変動相場制なので一概には云えないが、平均六十匁が金一両として一千両弱、地子銀（税金）上納が年一貫六百七十三匁、修理費を差し引き、残り金を出資者二十五人に分配、二百十七年間、安政の開港まで契約は守られてきた。

貿易も初期は無制限に買上げ、紅毛船七八隻、中国船七十隻程は入港していたが、江戸中期、外国に金銀を吸い取られる現状にやつと気付いた幕府は、輸入制限と密貿易取締り、絹物着用禁止令等々、引締め政策を次々に発令した。「法は潜るためにある」のだそうで、シルクに見まごうしなやかな綿、たとえばインド更紗、いまもハンカチに使われている透けるような細い糸で織ったローン、南方の島で織る島物が、のち縦縞模様に変化していく。天保の浮世絵美人画の着物は輸入品と思われる。



入津唐船丸荷役之圖  
長崎名勝図絵より

幕府が知恵をしぼったのが、物々交換制、漆器、伊万里焼磁器、樟脳でわずかに気を吐くが、大部分は銅で補った。当時日本の銅は、金の含有率が高く世界一といわれたが、我が国においてはそれを取り出す技術は無かった。

（※明治政府になり、佐渡・生野等を官営とし西洋の新技術を導入、銅の精製と金・銀分離法を知る）。情報がない哀しさ、あたらず国益を失う基となった。

『傾城の外、女人入るべからず』の出島では下女も、乳母も皆か女資格をとった。これらの人を「名付け遊女」という。楼主は名を貸すのみで、毎日の派遣料が支払われ、唐館も元禄以降は蘭館同様に歩き禁止、遊女を呼んだ。蘭館のサラリーマンと違い、個人営業の船主達は船一隻分の荷を持つて行けば、桃源郷で御大尽遊びができ、戻り荷で次ぎの資本を稼げるとあつて、気前よく金を落とす。外貨獲得には一番手っ取り早いこの方法は、西海辺鄙の地に、江戸吉原、京都島原と並び称される紅灯の巷を出現させた。西洋文化の唯一流入口だから、西洋事始めが日本一多いのは当然だが、遊女の性病検診が始まるのはこの地だった。万延元年（一八六〇）松本良順が、入港したロシア海軍提督の要請により行なった。梅毒を持ち込み、治療法を教えたのが西欧人予防法はロシア人ということになる。

梅毒はアメリカインディ



長崎名勝図絵より

アンの風土病、大航海時代に持ち出され世界中に蔓延する。七十年で地球を一周した。ちなみにエイズは二十年だった。交通機関の発達か、人々の交流の多さを物語っている。この地は海外文化のみならず、異質の病原体上陸地でもあった。

市民は荷役、食料調達、給水等なんらかの形で貿易に従事する定めで、土地持ちには箇所銀、間借人には蔵銀が会所より支給された。

貿易繁盛時は、間口二間半の家一軒分の箇所銀で、親子四人が一年間暮らせる金額だったといわれた。忠敬先生が長崎測量時は四年続きの蘭船未入港で、街は不景気だった。文化十年（一八一三）象を土産に英船が蘭船と偽り入港。享保十四年（一七二九）吉宗の時以来の象であったが、衆人瞠目の中での象は返却された。そのときの長崎奉行は遠山金四郎景晋であった。

この歴史的瞬間、測量隊は諏訪神社下の大同庵に十五日間足を止めていた。『蘭館、象見る』と測量日記は必要最小限に記している。長崎奉行もこの地で七人死去、うち一人は文化五年（一八〇八）フェートン号事件の責任を負ったの自殺だった。

伊能図完成の年、文政四年（一八二二）アラビヤ産のラクダ二頭が入港、「幕府の注文に応じ持ち来たるに」不要と断られ、商館長ブロムホフ氏かんかに怒り、出島で使っていた遊女に贈った。表向きは通詞達で引き受ける形で、ブロムホフ氏江戸参府の折とともに上京、大阪で業者が引き取り、江戸で大当たりをとったと聞く。私の住む町（筑紫野市）で一泊した時の記録に、「人の言葉をよく聞き分け、足を三つに折りて座る、目がやさしい」とある。この翌年シーボルトが外科医として出島に着任する。

なんとなく話が蘭館側に偏ってしまった感があるが、唐館側でも隠元や即非などの名僧、知識人が来日、我が国の文化向上に大きく貢献



上 KAMEEL 阿蘭陀人持渡駱駝

文錦堂版 合羽摺 神戸市立博物館蔵  
国史大事典より

右 阿蘭陀船持渡牝象 文化10年(1813)

版元無記合羽摺 神戸市立博物館蔵  
国史大事典より



したことも忘れてはならない。

福岡より高速バス、JRとともに二時間と近いが、ほぼ半生を通った長崎、この街の水は汲めども尽きぬ深い和・華・蘭の味がすると思うのは私だけなのであろうか。

### 参考文献

国史大事典

長崎文献叢書

丸山遊女と唐紅毛人

江戸参府随行記

長崎オランダ商館日記、日蘭学会編

伊能忠敬測量日記

甘木市史資料近世編

(かわしま えつこ・歴史街道を歩く会代表)

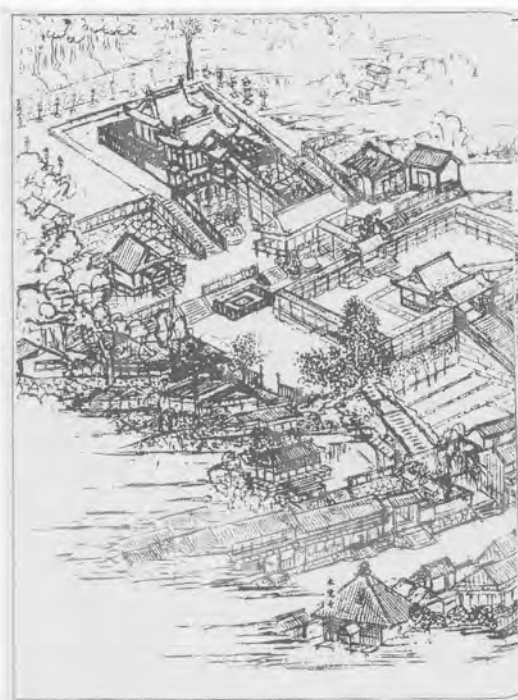


河島悦子著 伊能図で甦る古の夢

長崎街道

大里から博多へそして唐津へ

唐津街道



長崎古今乗覧名勝図絵より 現 諏訪神社及び炉粕町

長崎測量特集3

伊能測量隊 長崎に来る 松尾 紀成

長崎宿泊地大同庵近辺

文化十年八月、対岸の稲佐郷から、長崎町に着いたのは十八日の五ツ時後であった。測量日記には「四ツ半頃立山御役所に届に出る、當時御奉行遠山左衛門尉」とある。長崎奉行所は東と西の二箇所があった。所謂、立山奉行所と西奉行所（現在長崎県庁所在地）である。奉行もこの時は二人で隔年毎の勤務だった。其の交代は、九月であったという。遠山左衛門尉景晋と牧野大和守成傑である。測量隊の宿舎は、「長崎町止宿炉粕町大同庵に一同止宿」とある。大同庵に全員同宿したことがわかる。

炉粕町（ろかすまち）の大同庵、長崎市内地図で探してみると諏訪神社のすぐ近く。立山奉行所跡にも近い。勿論大同庵の建物の記名は見当たらない。しかし測量日記、文化十年八月十九日の項に、宿舎近辺の様子が、克明に記録されている。

左立山御役所石垣下左横町、東中町、右横町八百屋町、勝山町入会、左制札、左御普請方役所、勝山道追分印を残す。勝山町印に繋ぐ。又印（から）初炉粕町（炉粕町通りを行く）、左天台宗松岳山安善寺、御朱印なし、仁王門まで一町計引込、右横町馬町横町、左禅宗高林寺、右彦山修験本覚寺、止宿即炉粕町禅宗大同庵測所、左荒神社、左諏訪社、裏門木戸、諏訪境内二ノ華表。



禅宗大同庵跡

「長崎市の史跡」では炉粕町九番地一帯としている。通りの右手、がっしりした赤レンガの建物がある付近、享和二年の長崎絵図では空欄となっている。前の通りは諏訪神社に向かう。白い車があるあたりが荒神社跡である。

天台宗の安善寺（安禅寺とも書いてある）は、日銀長崎支店の裏手になるのか、県立図書館に上る道が参道に当たっているのか、はっきりせず、日銀の近代建築が視界をふさいでいる。「仁王門まで一町ばかり引き込む」とあることから、おそらく長崎公園に化しているのであろう。日銀前の角から馬町へ出る横町の通りがある。炉粕町をなお先へ進むと、左手に禅宗高林寺跡には、ブルトーザーが入り工事現場となっている。前の彦山修験の本覚寺跡は、庭の植え込みが深い瀟洒な赤板塀に囲まれた住宅地である。この本覚寺跡の隣に位置するはずの、伊能測量隊宿泊の「禅宗大同庵跡」、ここには、がっしりした洋風の宗教団体の建物が建っている。大同庵の前にあたる荒神社は、高林寺跡の工事に続き、広い範囲の土木工事が進められており、消滅していた。

諏訪の森の下は忠敬先生が歩いた文化年間には、古い寺あり神社・祠ありの落ち着いた雰囲気を感じていたに違いない。伊能測量隊は、



松ノ森天満宮

江戸後期の「長崎」港絵図を見ると、諏訪神社の大鳥居から右に松ノ森の天満宮の道がある。測量隊もこの宮に参拝している。



諏訪神社の二ノ華表

この鳥居の下を炉粕町の通りが出ている。絵図では木戸があり、境内と界になっているが、現在は勿論その跡形もなく、鳥居も五番目に位置する。

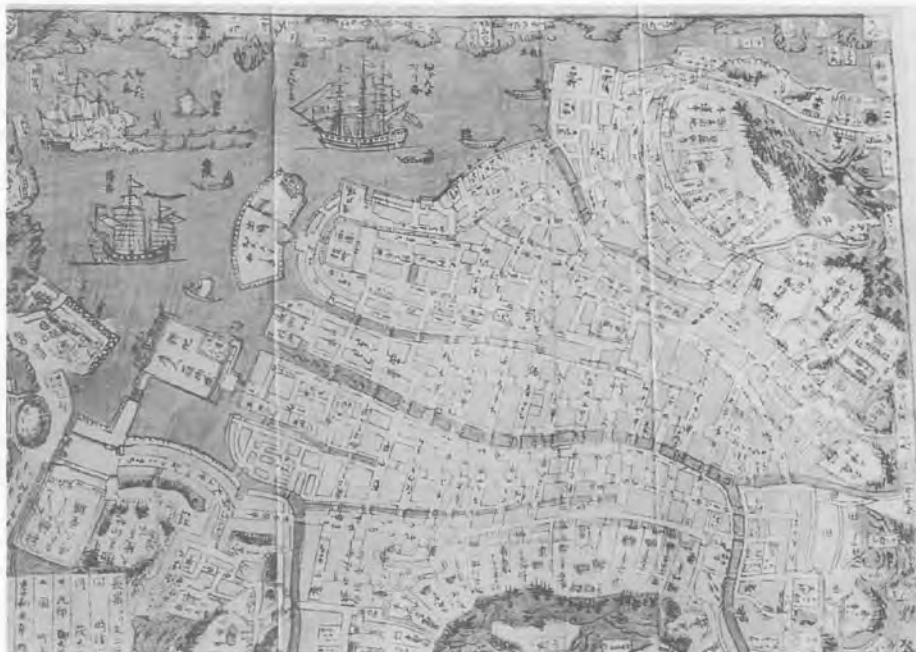
この大同庵に前半は八月十八日から九月二日まで十四日間、後半は九月十六・七日の二日間、延べ十六日間を宿泊したのである。この狭く起伏の多い長崎市街の測量に当たって新大工町の二股川（中島川）に架かる石橋から始め、先ずは諏訪大明神に打ち上げと大鳥居の元を右に松ノ森天満宮を拝し、それから一同、長崎町惣鎮守諏訪大明神に参詣した。この諏訪神社の境内の二ノ鳥居の下には炉粕町の木戸があった。測量隊の宿舎の前を通る。しかし現在は、諏訪神社の鳥居は追加され、この二ノ鳥居は五番目の鳥居になっている。

### 砲台の並ぶ長崎湾口

八月の末になると長崎市街の測量はほぼ終わり、港から船を仕立てて、長崎湾口の測量に移った。このあたりは兩岸が狭まり、対岸に打

ち寄せる波も、人の動きもはっきりわかる神崎から西泊の測量である。御領所浦上側（現三菱造船所側）、この近辺は、対岸の戸町・女神崎をふくめ長崎警備の要所で、なかでも西岸の西泊と東岸の戸町は、海峡を睨んで、「沖両御番所」と呼ばれ、長崎奉行の命で、佐嘉・福岡両藩が隔年ごとに勤番にあたっていた。両番所で人員は八百人から九百人が駐留し、俗に千人番所と云った。初めキリシタン宗禁輸の措置として、ポルトガル船来航禁止の警固であった。寛永年間にはじまる。正保四年にポルトガル船二艘来航のとき、長崎奉行は両船を港内にいれ、交渉の途中、港口の最も狭まった神崎と女神の間に大綱を張り、船数、数百艘をつないで船橋を作り閉鎖した。これは、後々まで長崎警備には有効な手段と考えられたのであろう。伊能測量隊も、神崎測量で張り切り岩を見ている。





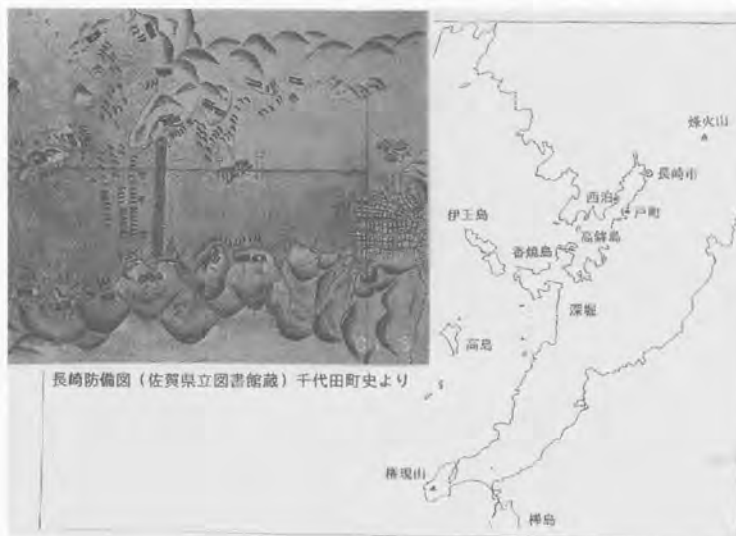
肥前長崎図（長崎歴史文化博物館蔵）

江戸後期の長崎港の賑いである。引き舟にひかれ、入港の合図の空砲をとどろかせて入ってくるオランダ船。港内には唐船も見える。

「右にイガツ岩、雷崎、釣鉄岩、此所より入江向へ鉄縄を引元岩也。  
左男神ノ社、左ノ山天文ヶ峯という。」

フエートン号事件後、幕府は長崎港の警備を強化した。新に台場を加え、又、港口を閉鎖する計画もした。長崎は重要塞化されていく。廿七日、廿八日には、戸町番所、戸町浦、女神崎、魚見岳、陰ノ尾島、そして佐嘉領の香焼島、高鉾島など長崎入江口の測量だった。

長崎港の入江口、西彼杵半島には幕府領の小瀬戸村がある山上には遠見番所が置かれていた。測量隊は去る十七日長崎に入る時、ここを通過した。赤瀬左山上に小瀬戸の遠見番あり」と『測量日記』にでている。小瀬戸の遠見番は、五島灘に突き出た野母半島先端の権現山遠見番と共に、異国船監視の場所だった。また外国



長崎防備図（佐賀県立図書館蔵）千代田町史より

船の来航を権現山の遠見番が烽火をあげて知らせると、小瀬戸村の遠見番はこれを受け、長崎奉行所に連絡する大事な中継地でもある。長崎奉行は外国船の来航をこの港口、高鉾島近海で止め、長崎湾内に入れる前に、検使を派遣したのである。

又小瀬戸村の山は、享和二年、大坂の間重富が日食観測の為下向したところである。通行の沿道の諸藩にも幕府の勘定奉行から達しが出された。

大坂町人間五郎兵衛、測量御用として長崎に遣わされ候。往来途中においても測量致し候間、罷り越し候向々にて差し支えこれ無きよう致すべき旨、御勘定組頭より書付を以て相達せられ候。尤も、六月朔日頃、大坂出立、陸地旅行、上下八人位にて、罷り越す趣に候由『佐賀県近世史料』。

幕府大坂人間五郎兵衛ヲ以テ長崎ニ派遣シ沿海之地ヲ測量セシム。之ヲ列侯ニ布告ス『蓮池藩日記』。

当時、標準時の設定もなく正確な時計もない、しかも大名領国制という悪条件の中で、機会をとらえて各地に出向き緯度・経度の測定に努めた。日食、月食ばかりでなく木星のガリレオ衛星の凌犯観測まで手をつけたというから驚きである。気の遠くなるような努力の積み重ねによって日本地図が出来上がったのだと思う。

※この小瀬戸村の山は、現在は削平されて、住宅団地が造成されている。地図を見れば木鉢ニュータウンがある。また小瀬戸沖は神ノ島・鼠島まで埋め立てられ、陸続きになっており、残念ながら昔の面影はない。

## 阿蘭陀屋敷とゾウ見物

先月十八日長崎表江致安着候、御安意可給候、扱長崎表測量之儀も存之外手間取候て、先月廿八日迄相掛候、此度ハ阿蘭陀船二艘六月末ニ入津、其外唐船四、五艘入込申候間、長崎も大賑二候、蘭船二隻も積来候間、阿蘭陀出嶋、屋敷共一覽、其外唐館、唐船等も至見物候、……

九月二日

伊能勘解由

伊能三郎右衛門殿

妙 薰 殿

『伊能忠敬書状』

この手紙は、九月三日に、長崎町乙名横瀬半三郎へ江戸行き書状並びに、時津より小倉までの先触れとともに出されている。

宛名の三郎右衛門は、忠敬先生の長男で伊能家当主、景敬である。実は六月七日、四十八歳で病没していたが、遠国御用測量中のことを考えて事実を伏せ、ただ中風で倒れ、療養中であるとのみ知らされた。が、この時にはいまだ景敬が倒れた通報も届いていず、このあと時津で手にする。

オランダ船長崎入港については、測量隊は七月一日、福江島にあったとき知らせをうけていた。

オランダ船二艘の入津で長崎の町は大喜びである。しかし、忠敬先生はこの賑わっている町に着いても、気分は晴れない。坂部貞兵衛七月十五日福江嶋で死去し残念千万である、……年来坂部へ打ち負かせて仕事していたものが、急な死去で、年寄りには大難儀である、と重いかげを引きずっておられる。

測量隊は長崎市街の測量が一段落した、九月一日、オランダ船入港で賑わっている街で、出島のオランダ屋敷やオランダ船に積んできた

象の見物をして過ごした。象の輸入は享保十三年にもあり、象の行列として沿道を沸かせた。この度のオランダ船によって渡来した象はセイロン産だという。奉行の遠山景晋も象の見分をして詳しく日記に書いているという。

測量日記には「九月朔日 晴天、同前、阿蘭陀出島館・並に象を見」と簡単に書いてある。出島のオランダ屋敷の何処かに繋いであったのであろう。

『新長崎年表』には「六月 蘭船がセイロン産象一頭を輸入したが小麦一〇〇表を給して積戻らせる」とあり、やがてこの象は、また船に乗りバタビアに帰ったことになる。

沖にはオランダ船が二艘停泊しているはずである。シャロット号、及びマリア号である。佐嘉藩多久の御屋形日記に文化十年オランダ船入港について、

「阿蘭陀船二艘入津したと長崎より注進あり

一番船

一三四人乗組

二番船

六八人乗組」

『北方町史』

しかし、このオランダ船は、日本側には知らされなかったが、大変な《くせ者》だった。

「六月二十八日 イギリスのジャワ総督ラッフルズが、蘭館乗取りのため派遣した元蘭甲比丹ワルデナールと蘭人カッサ英船シャロット号及びマリア号で入港する」『新長崎年表』。いわゆる二艘の船は、オランダ船を装ったイギリス船だったのである。出島のオランダ商館長ドーフは、前任のワルデナールとの再会を喜んだ。しかし彼の態度に不審を抱き、これに質問して事の次第を知った。

ドーフは、事務引継ぎを拒絶し、フェートン号事件以来、日本人はイギリス人に対し復讐心を抱いていることを説き、ワルデナールを説得したという。

忠敬先生と測量隊員が、出島のオランダ屋敷見学と象の見物をしたとき、ワルデナールは、屋敷の何処かに控えていたに違いない。勿論商館員も事実を知っている者が、いたかどうか、例え知っていたとしても、イギリス船などとおくびにも出さぬだろう。二艘の船からは、オランダ貿易品の積み下ろし、積み込みの計画が、滞りなくすすめられた。日本では、蘭船二艘、長崎入津であった。

#### 参考文献

- 『長崎の史跡』 長崎市立博物館
- 『長崎県の歴史散歩』 山川出版社
- 『新長崎年表』上 満井録郎・土井進一郎著 長崎文献社
- 『オランダ商館日記』五 日蘭学会編 雄松堂
- 『佐賀県近世史料』第一編九卷 佐賀県立図書館
- 『蓮池藩日誌』 蓮池商工会
- 『伊能忠敬書状』千葉県史料近世編文化史料一 千葉県
- 『伊能忠敬研究』26号「動き出した西国測量」 安藤由紀子
- 『長崎開役日記』山本博文著 ちくま新書
- 『崎陽群談』中田易直・中村質 校訂 近藤出版社
- 『夢暦長崎奉行』市川森一著 長崎文献社

(まつお のりよし・長崎街道研究家)

越後国岩船郡内沿海測量について(二)

「測量日記」と「与惣左衛門覚書」より

風間 広吉

14

立嶋組大庄屋加藤助太夫より注進書之写

一、天文方一昨十四日加茂迄御着ヒ成候ニ付、

飛脚加茂より昨晚五ツ時後ニ為前飛脚着仕候

ニ付、則先方より之書状写差上申候、先達而

酒田迄御着之節、為御知被下度頼置候得

共、逗留不被成御通行故、指掛為知参候ニ

付、御注進申上候 以上

九月十六日

加藤助太夫

木野村勇助様

伊久美奥右衛門様

近藤敬治右衛門様

文中の加茂は勿論現在の鶴岡市である。先に酒田辺りまでお出の節は知らせてくれるよう頼んでおいたのに、お泊りにならず通りすぎてしまわれた。加茂へは昨晚お着きになったので大至急ご報告する旨の急進である。

15

加茂浦半兵衛方より、加藤助太夫方へ文通写、

飛脚を以一筆啓上仕候、此度天文方御役人衆昨



「与惣左衛門覚書」表紙

日此方御一宿被遊候間、御取扱之義、段々此方

様より大庄屋衆出迎ニは及不申事ニ被仰渡候ニ

付、大庄屋出迎ニ罷出不申、御立腹ニ而、酒田

役人此方迄御出、漸々御詫申上候

一、賄之義一汁一菜ニ而、無酒ニ御座候

一、御上御一人 中三人 下三人 都合七人

但御上御一人御夜具御持参、下六人前、夜

具御用意可被成候

一、何連も下戸衆ニ御座候間、餅ニ而可然奉存

候

但小豆餅 砂糖 雑煮 餅後吸物

花かつほ

一、夜喰ニも吸物、小附飯御出被成候

一、宿之義、御上御一人座敷 中三人座敷

下三人座敷ニ可被成候

一、御出迎ニは村端迄御出可然奉存候、信左衛

16

門様へ御沙汰致候得共、此間温海江御出被成候間、小旦那へ沙汰仕候処、先達而一通り申遣候間、飛脚二は不及申候様ニ被仰候間、御取扱之義御知らせ申上候

一、何成難所ニ而も、海辺御通り被成候、御荷物餘程御座候間、難能御座候ハバ、船ニ而御荷物ハ被遣候而も宜可有御座候、右御しらせ申上度早々如此ニ御座候、委細は飛脚口上ニ可申上候 恐惶謹言

九月十五日

留塚半兵衛

加藤助太夫様

覚

- |            |             |
|------------|-------------|
| 一、八人 駕籠人足  | 一、七人 駕籠人足   |
| 一、拾五人 長持人足 | 一、四人 明荷人足   |
| 一、式人 車人足   | 一、式人 持げん持人足 |
| 一、七人 小物持人足 | 一、馬式疋馬附人足   |
| 一、七人 縄引人足  |             |

右之通、酒田行事衆も指出候趣申参候 以上

九月十五日

留塚半兵衛

加藤助太夫様

右之通り、加茂半兵衛方より内々様子申参候間、乍恐書状写、指上申候、加茂大庄屋殿は、此度入湯ニ罷越留主故、内々一家方申参候 已上

加藤助太夫

加茂浦留塚半兵衛からの加藤助太夫への書状は、その内容から藩にとつても大庄屋や年寄衆にとつても重要な情報であつた。

酒田では、藩と村役人の意志疎通が不充分で、大庄屋は出迎えに出なくてもよいとのことであつたらしい。先触を軽んじたということである。忠敬はこれをきびしくお叱りになり、酒田から追いかけてきた役人の狼狽ぶりが目に見えるようである。

おそらく全国測量の意義についても十分な知識がなかつたためと思われる。第三次測量では、このほかに往路の新庄、久保田、弘前などの城下町で、役人を呼びつけて出迎えや案内を怠つたという理由で叱つてゐる。越後においても、高田藩の鉢崎関所で役人が公用の長持を改めようとしたり、関所前での測量を平服無刀でとがめたりしたため、強く抗議して通過した記録がある。「測量日記五」の巻末に、わざわざ「越後国鉢崎御関所之事」として、四頁にわたつて記述されているが、翌年の糸魚川事件ほどの大きなトラブルにはならなかつたようである。糸魚川事件とは、問屋八右衛門が姫川は急流かつ河口の川巾が一〇〇間もあり渡船不能ということから迂回させ、あとになり川巾一〇間であつたことが判つてのトラブルである。しかし他の資料によれば、糸魚川藩の役人が、地元の「水主」の進言で危険な渡渉を思いとどまらせるために、問屋八右衛門に指示した向きもあるという。餅賄についてまで情報を寄せてゐる。一行は下戸衆であるという。餅を差し上げている。測量はどのような難所でも、海岸をお通りになる。荷物は沢山あるので、灘（風）がよければ船で運んでもよいといつてゐる。名勝笹川流れや、蒲萄山塊の山脚が日本海になだれる天険をもつこの地方の人びとにとっては大切なことであつた。



また酒田年行事所（役場）から差し出した人足数も伝えている。  
一、式人 持げん持人足 とあるのは、持げん器の誤りであろう。

17

以廻状得貴意候、各様御堅勝可被成御勤役、珍重之御事奉存候、然者只今府屋町ふ、以廻状為知有之候間、別紙写取、懸御目候、此段得御意度如此御座候 已上  
瀬波町年寄 常助

九月十七日

近藏

岩船町ふ塩谷、桃崎浜迄

御役人衆中

九月十六日発の府屋町庄屋長助からの廻状を瀬波町年寄から入手した。両年寄は共に伊与部姓である。

18

能以村継得御意候、天文方御役人様今十六日温海村御出立、鼠ヶ関昼休、府屋泊御先蝕唯今参申候、右有為御知申上度如斯ニ御座候、人足三拾人除、村役人四五人計ツ、境迄罷出候様、相聞へ候、委細相知次第遣々可申上候 以上

九月十六日五ツ時出ス

府屋町庄屋

長助

庄屋は、板垣長助家。府屋での宿泊は測量日記によれば又左衛門とあり、富樫又春家である。

19

態々以手紙申上候、弥御堅勝と可被成御勤役、珍重之御義ニ奉存候、然者昨日常助、天文方御役人様御前宿之窺ニ海浦馬下村迄罷越候処、昨日も府屋町ニ、御逗留御座候由、則馬下村庄屋、府屋町ふ被罷帰候ニ付、実否聞合、其儘罷帰申候、依而廿日頃ニ茂当町へ御出可被成と奉存候ニ付、為御知申上候、猶又いなや追々相知次第可申上候、此段塩谷町、桃崎浜へも貴上様ふ御世話御通達被下度奉願上候、右之趣得御意度、如斯御座候、以上

九月十八日

瀬波町年寄

岩船町年寄

常助

与惣左衛門様

近藏

右之趣塩谷、桃崎江も申遣候

瀬波町年寄衆からの情報である。「一行の前泊の様子を知りたく、海浦（府）馬下村まで参りましたところ、昨日も府屋にお泊りになられた由、馬下村庄屋が府屋町より帰って参りましたので実否を問合せて帰って来ました。従って二十日ころにも、瀬波町にお出になるのではないかと思います。なお追々、お知らせしましょう。このことを塩谷や桃崎浜へもお知らせ下さい。」とある。府屋では雨のため二泊したことが「測量日記」に記されている。まことに密な情報連絡である。

つぎに、伊能忠敬よりの泊触を入手する。

20

御泊触之写

就測量御用、明十八日大川村出立、海辺通其村

々江罷越候間、止宿用意可有之候、廻村々測量致し候間、測量器持、并手伝人足案内差添候而、村々境二待請可被申候、荷物之義は先達而申遣候通、長持老棹、馬二疋、測量手伝人足七人二候得共、大川村より瀬波迄罷出候間、難所之由及承候、尤長持之儀へ、貫目も重ク候へは其儘二而持送候事差支も難斗候間、測量先之村々得と申合、我等前泊迄罷出、荷物一見之上、分荷二而送候共、其儀二而繼送候共、又は風波等無之節は、船二而送候共、何連二も測量御用差支無之様執斗可給候

戊九月十七日

伊能勘解由

大川村より碁石村、弥屋村、鵜泊村、芦谷村 九月十八日泊  
寒川村、脇川村、今川村、板貝村、笹川村、桑川村 同十九日泊  
新保村、馬下村、早川村、吉浦村 同廿日泊  
柏尾村、間嶋村、野潟村、大月村、岩ヶ崎村、瀬波村  
同廿一日泊 岩船迄

右村

庄屋 中

年寄

泊触の内容は明快である。「明十八日（新曆一〇月一四日）大川村（府屋）を發ち、海沿いを通り關係の村々へ參るので宿を用意された。村々を廻つて測量するので、器具持と手伝人足に案内人を添え、村境に待ち受けられるよう。荷物は先に申したように長持一棹、馬二頭、測量手伝人足七人ゆえ、大川村から瀬波まで出かけるがその間難所と聞いている。長持は目方も重く、そのまま持ち送るのも大変ゆえ、

測量先の村々で十分申合せをし、私達の前泊地まで来て貰い荷物を一度見たうえで、分け荷にしよう、そのまま繼ぎ送りしようとした風波がないときは船で送つてもよいが、測量に支障のないようにして欲しい」とある。以下通過の村々を列記している。

## 21

追而申入候大風雨二候へば、其所及逗留日送二出立いたし候、其趣承知可有之候、此触書無遅滞早々順達岩船二而、我等方へ可被相返候、勿論渡川等有之場所ハ、海辺江船用意可差出候、当日ハ御祭礼、殊二測量御用御役人中様御通行前別而御心遣奉察入候、当組より寒川村江開合候もの差遣し、先方より合承候處、御賄之儀、一汁二菜、酒は御上向禁酒、下へハ有合之肴二而差出候由二相聞申候、此段為御膳持得御意候、御宿拵等格別之手入無之、勿論盛砂等ハいたし不申候由二御座候、委細明日柏尾村へ御出候可御意早々、已上

九月十九日

本間彦右衛門

庄左衛門様

与惣左衛門様

本間彦右衛門については不詳である。前段は明快で後半部に忠敬の人間像を垣間見る条りがある。すなわち、うわ向きは禁酒という。夜の天測に不都合なための自肅か。宿の特別な拵えも不要。貴人を迎える時の玄關さきの盛砂も必要がないとしている。他の記録によれば、夜間の天測時、雲の去来で、睡眠二、三時間のこととざらであったという。上向き禁酒もうなずける。

為測量御用、明廿二日岩船出立、海辺浪打際通新潟町迄罷越候二付、休泊宿用意有之、且測量之儀は日々二組二相分り、一組は中途之村方より相初メ候間、先後測量手伝人足并測量器持人足に案内差添、海岸江罷出待請候様いたし、尤荷物之儀は、其所勝手宜方を相廻し可被申候、猶又川々之儀は、海岸波打際を相渡り候間、渡船二而も川越二而も用意致置、測量御用差支無之様執斗可給候 已上

戊九月廿一日

伊能勘解由 印

岩船町塩谷村

桃崎村

九月廿二日休

荒井浜村

笹口村

中村 同泊村松村

同 廿三日休

次第浜村

網代村

亀塚村

鳴見村

藤塚村

太夫浜村同泊太郎太夫村

松ヶ崎村

川戸村エ榎島

同廿四日泊新潟町迄

右宿々村々

庄屋

年寄 中

問屋

追而申入候、松ヶ崎村より新川口を渡、夫より榎島、新潟川口を渡、測量致候間、右手伝人足案内等、海際二罷出、渡船差支無之様取斗可被申候若書面相分り兼候儀も有之候ハバ、前休泊迄罷越承及候様可被致候、尤大風雨二候得は、測量難相

成、其所及逗留日送二出立致候間、是又可被得其意候

一読、忠敬よりの岩船以南新潟までの泊触である。宿々村々の庄屋宛で、宿泊の村も判る。

23

一、白米老升代 五拾四文

一、両替、金老兩二付、丁錢六貫六百廿文

右之通二御座候 以上

岩船町年寄

戊九月廿一日

与惣左衛門

享和二年（一八〇二）の米相場は、江戸で五月は石当り銀五二〇五五匁、十一月は六二〇六五匁、金銀相場は金一兩につき高値で一月は六・五一〇貫、安値で六月は六・七〇四貫であった。六月以降高値になつてゐる。読史総覧によるとが当地の相場は不詳である。

24

御證文

岩船町塩谷町迄

一、人足五人

道法一里

一、馬 三疋 但内老疋八人足式人代り

一、御用長持 一棹、此持人足

右者、測量為御用、被遊御通行候二付、岩船町より塩谷町迄、宿之人馬御継立仕、尤余斗之人馬老入老疋も差出不仕、御非分之儀決而無御座候

以上

岩船町年寄

戊九月廿二日

与惣左衛門

岩船町では、人馬継ぎ立てには一人一頭たりとも余分に差し出して  
いないことの證文である。

25

覚

一、金老歩 此錢老實六百五拾五文

内五百廿六文 御払

残而老實百廿九文

右之通御座候 以上 岩船町御宿

戌九月廿一日 年寄 与惣左衛門

26

木錢證文之事

一、木錢合百三拾七文 御上御一人様三拾五文

御下ハ老人様十七文

以上御七人様分

一、白米三升五合 代百八拾九文

外ニ貳百文御茶代

ノ五百廿二文

右者測量御用ニ付、被遊御通行、当町御止宿ニ

付、書面之木錢、米代、御定法之通御払ヒ下置

儘ニ受取申上候、尤御触之趣奉承知、一汁一菜

之外御馳走ケ間敷不仕、御非分成儀毛頭無御座

候、依之木錢證文差出候處、如件

岩船町年寄

戌九月廿一日

与惣左衛門

江戸浅草藏前裏

頒曆御用屋輔内

高橋作左衛門殿役所

伊能勘解由

御当番衆中

戌九月廿一日認、從越後国岩船郡岩船

宿泊に伴う経費の覚と證文である。江戸浅草橋の曆局宛に差出して  
いる。曆局は、現在の台東区浅草橋三一九一三六あたりと比定され  
ている。

(つづく)

(かざま ひろきち・元新潟県立桜ヶ丘高等学校教諭)



名勝笹川流れ

「奇岩奇石多く…岩上の奇松絶景無類」



左方の岩は蓬萊岩

## 続 三浦半島に忠敬の足跡を歩く

白根 貞夫

前号で忠敬足跡のうち、三崎北條湾から下宮田までの海岸線歩きを報告しましたが、その続きをとの編集部からの依頼で報告をさせていただきます。

忠敬日記では、享和元年四月十七日 曇天 朝六ツ半頃下宮田村出立、和田村・長井村・太田和村・長坂村を経て、佐嶋村八ツ半頃 宿名主青池儀兵衛。七ツ後より雨。十八日十九日雨のため逗留。廿日 朝晴 五ツ半頃佐嶋出立、芦名村・秋谷村・下山口村・一色村・堀之内村を経て、小坪村へ七ツ前に着、止宿（宿年寄十郎右衛門）。

この間、風光明媚の所多く、荒崎海岸、佐嶋の天神・笠島、秋谷の立石、長者ヶ崎、葉山海岸、逗子海岸等がある。前回の油壺付近にある岩磯の所はあまりない。しかし、埋立又はコンクリート加工した所があり残念な気がした。では、前回と同じように歩みを進めて行こう。

昨年 5 月 24 日（火）晴 下宮田までの歩きにつづき、一服してから、バス停矢作入口を 12 時 05 分に出発。左手は昔入江だったが、今は面影なく波島という島にやゝ木立があり、説明されれば昔島だったと判る程度、風情が失われること夥しい。右手の円徳寺を過ぎると、海岸に出た。（12 時 28 分）こゝで某男性に出会った。上半身裸、草履で歩いている。聞けば横浜の中村橋から来て、海岸を裸で歩き廻っている。これは健康法で、夏の陽に焼くと冬風邪をひかない。小生より一まわり下とのこと。しばらく一緒に歩く。

和田・長浜はよい砂浜だ。中学生の団体が来ていた。聞くと横浜金沢区富岡中の生徒の由。よいお天氣に恵まれ、生徒諸君満足顔であった。（12 時 40 分）

三浦市から横須賀市長井の地域に入った。小さな磯があり、小学生や幼稚園生徒が遊んでおり、海辺の動物を調べていた。先述の某男性は子供と一緒に遊び始めた。小生はつき合っていると、予定が崩れるので失礼して歩き出した。

荒崎海岸への環境省の誘導標識が立っている。

荒崎へ 1.6 km、和田へ 0.5 km とある。（12 時 50 分）遊

歩道として整備され、歩道橋を作り歩き易いよう整備されている場所がある。

佃 嵐崎 13 時 00 分通過。栗谷浜着、13 時 10 分。

みると新しく大きな建物があり、聞けば老人ホームの由。海に面し人里離れた所である。この付近は磯である。更に磯伝いしようとしたが駄目で引返し、ちよつとした細道で隣の浜へと降りる。しばらく浜を歩き、荒崎の奇勝弁天島へと着いた。



荒崎 弁天島



(13時40分) 島といっても陸続きであるがぜひ一周したかった。地図上では周囲150mなので、わけないと思って歩いたが、磯の状況が厳しく15分を要した。改めて北側から写真に収めた。すぐ先に狭い入江があるが、きり立っており磯歩き出来ず、断念して丘の方へ上る。(14時30分) 荒崎公園となっており下りて行き、一旦先述の入江の方へ歩く。釣り人の姿を望み戻りつゝ、更に磯伝いをして荒崎のバス停に着。(15時00分)

これから先、不断寺バス停あたり迄は、主としてバス路線(県道)を歩くが、浜が歩ける所も多少ある。このバス停留所付近は、国際水産研修センター。県立三崎水産高校実習場・長井漁業組合等が海岸線を占有しており、全く歩けない。不断寺バス停(15時30分)から左方海岸線に沿うと、大きな県営長井住宅のマンション群となり、護岸壁が堅固に築かれ、浜歩きは全く駄目。これがずっと富浦海岸の手前迄続くのである。富浦公園へは16時20分に着く。それ迄、特筆すべき内容はない。やつと砂浜に立ち、小田和濟に臨み対岸の景色を眺めたが、よくよく調べると、この浜自然の浜ではない。埋立して人工的に作った浜だった。古い地図と比較して判った。もと横須賀市の吏員に聞いて確認することができた。終戦後、早いうちに埋立が始まったと。何とも残念である。

富浦公園を出て、長井の国道134号線に着いた所で(16時25分)、今日の歩きを完了した。この間、長井郵便局へ立寄る用件があり、目的外に10分程消費した。

歩行距離をしらべると、矢作入口から市境迄1.6km、市境から弁天島迄1.7km、弁天島から荒崎バス停まで0.9km、荒崎バス停から長井バス停迄3.8km、計8.0kmである。

11月10日(木)晴 前回から半年近く経った。夏の間を避けていたが、ついとうっかりして秋も大分深まってしまった。一大決心して歩き出す。

前回の続きをしようと思ったが、長井の北の旧林村の地域は、戦争中に横須賀海兵団の兵舎が建てられ、今は自衛隊の海上・陸上部門、電力関係諸研究所が広大な面積を占め、海岸線を歩くわけには行かない。僅かに残った所だけを歩いてみた。

バス停林から北へ向って歩き出し、竹川から左折して(10時10分)川に沿って歩き、松越川にぶつかり右折、横須賀市西部行政センターの所である。また橋を渡り海の方へ7分8分歩くと浜へ出た。(10時20分) 斉田浜といい、250m位の長さがあるが、昔の地図を比較し、全くの人口浜であると判った。この三浦半島の自然浜の少なさが判り、残念でならない。佐島側の景色を眺め、引き返し、国道134号線を北に歩く。

佐島入口(11時08分)から左折し、隧道を通り、左折して海岸へ出る。(11時30分) その浜を東へ行き、先の斉田浜の間近まで行く。途中廃止になった外人別荘跡や細い足場の悪い路を苦闘しながら進む。11時45分に先端まで進み引き返す。この佐島は漁港となっており、漁港部分はかなりコンクリート舗装が施されている。浜から商店街に入り、忠敬の宿、青地儀兵衛は江戸屋として大漁商。すばらしい家であったが、今や跡かたなく何の標識もない。しかしそのすぐ傍に、旧名主福本氏の長屋門が残る堂々たるものである。(12時10分) この佐島漁港は、昔から栄え、船祭りの時には御座船歌が歌われ、今も当地の無形民俗文化財として継承されている。次は浜に出て、観音堂岬から西の方、佐島マリーナへと行く。(12時30分) 天神島と橋で結び、レジャーランドとして人工化してある。更に佐島から芦名へかけて県道

が昭和の初めに造られた。海岸はその為、護岸工事がなされ自然海岸は失われて了った。それ迄、この佐島は陸の孤島で、佐島の中心から真北の方角の山道が唯一の他村と結ぶ道だった。しかし、この村内は古くから開けたようで、熊野神社の境内には中世のヤグラがあり、当時掘ったノミ跡が歴然と残っている。

天神島はハマユウの群落自生の地として天然記念物に指定され、また横須賀市の花にも指定されている。

マリナ入口から道なりに右に曲がり北上する。左側は海、但し自然ではなく既に加工がなされている。右側は概ね崖。

そのうち崖がなくなると芦名に入る。しばし行くと三叉路となり、左手に行き、淡島神社下に着く。(12時55分) 標識があり、神社の由緒が述べられている。社殿は女性向きに朱である。縁結びの神としてあわせて下さい淡島様よ、願いごとをかけ、成就すれば御礼参りと



佐島 福本氏屋門

いうことになる。三月三日は例大祭で大勢の人がおしかけ、最近では流し雛の行事が行なわれている。けがれを祓うため紙人形をつくり、それにけがれを移して流すという祭である。

三浦古尊録には次のように記されている。

「紀州名草郡蚊田の明神を勧請。淡島神社は天照大神の御妹で、住吉明神の后になられたが御身に帯下と言う病のため紀州栗島に流され給う。婦人の帯下の病を治さしめ給う。此の社に祈願する婦人は、底抜柄杓を奉納する。毎歳二月三日には郡中の婦人参詣群集す」

この先には浄土宗の金剛山勝長寿院浄楽寺がある。この寺は、文治五年(一一八九)和田義盛が建立した七阿弥陀堂の一つといわれている。その阿弥陀三尊は、国の重要文化財に指定され、本堂裏の収蔵庫に安置されている。また、明治初期に郵便制度を創始した前島密の墓があり、浄楽寺収蔵庫の奥に衣冠束帯の姿が見える。晩年この芦名の地に隠棲し、生涯を終えている。

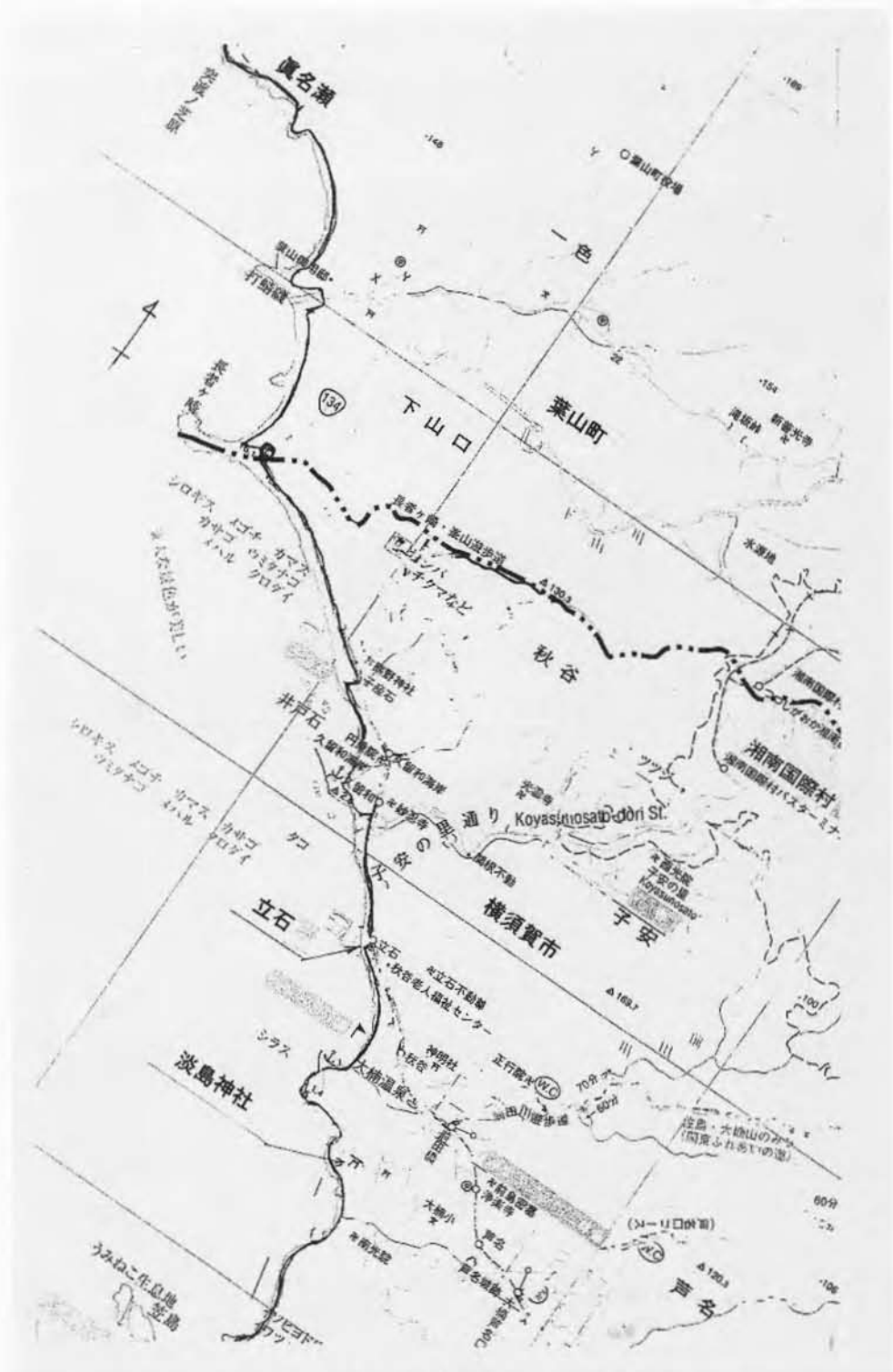


淡島神社





第1図 長浜から佐島北まで(縮尺 1:30,000)



第2図 芦名海岸から眞名瀬まで(縮尺 1:30,000)



## 良助の次男 榎本武揚 (三)

伊藤 栄子

### ロシアからの手紙

#### 原文書解説

寸椿<sup>すんしん</sup>呈仕候 時下益御清穆<sup>ぼく</sup>、御奉檄<sup>ごほう</sup>被為有候半と奉遥祝候 次ニ野生依然頑健<sup>がんけん</sup>在勤罷<sup>きんぱ</sup>在候間、乍憚<sup>おそれ</sup>御休意可被下候 さて今般、魯国軍艦「ボヤン」日本へも罷越候趣ニて乗組海軍裁判役士官「バロン・シリンスバフ」氏、当公使館ニ罷越、野生屈物等有之候ハ、持越可申段申聞候ニ付、この獣皮壹枚御見合の為め差上申候

この獣は満州地方に多く有之、樺太島にも相産し候趣、就ては定めて北海道にも可有之と存候 獣皮中の一番高価のものニ御座候間 万一北海道ニ於ても御見出し被成候ハ、一物産と存候 この皮より黒キ色多きけ(れ)ば、一枚ニて百「ルーブル」又は貳百「ルーブル」の品有之候 一ト通の皮は、其捕へたる場所ニても六七円より以下の価ニならず候 御承知も可有之候 この皮は重ニ<sup>おも</sup>冬衣の裏又は女の挿手筒<sup>か</sup>、又は帽子ニ相用申候 一、前文「バロン・シリンスバフ」氏御面謁相願候ハ、乍御面倒御逢被下候様相願度候 右得御意度如斯ニ御座候 以上

十一月一日

ペテルブルグ

榎本武揚 拝

黒田開拓長官殿 閣下

江……へ、而……て、之……の、方……よりとした。

#### 現代文大意

御便り申し上げます。益々御元気で職務に御就任のことと、遥かに御祝い申し上げます。私も丈夫で勤めておりますから、御安心ください。この度、ロシア軍艦ボヤンが日本へも行くとのことと、シリンスバフ男爵が当公使館へ来られ、日本への屈物があるなら持つて行きますと言われ、獣皮一枚を託しました。参考のために差し上げます。この獣は満州地方に多く棲み、樺太島でも産するようです。そこで北海道にも定めて棲んでいることと思われまふ。これは獣皮中一番高価なものです。万一北海道で見られたならば、一つの物産となりましよう。この皮より黒い色の濃い物は、一枚で百ルーブルから二百ルーブルもします。並の取り引きでも、それを捕えた場所にもよりまふが、六十七円より下値にはなりまふ。御承知おきください。この皮は主に冬衣の裏に、また女のマフ、帽子に用います。

一、シリンスバフ男爵が御面会を求めて来られたら、御面倒でも御逢い頂きたく、右御了承を得度く御願ひ申し上げます。 以上

十一月一日

ペテルブルグ

榎本武揚 拝

黒田開拓長官殿 閣下

\*寸<sup>すん</sup> 椿<sup>しん</sup> (短い手紙、または自書を謙遜するという言葉)

\*御清穆<sup>ごせいぼく</sup> (相手の健康をいう敬語)

\*奉<sup>ほう</sup> 檄<sup>げき</sup> (官につくこと……中国の故事から)

\*満州、樺太、北海道にもいると思われる獣で高価な毛皮といえ、

黒貂……いたちに似て、猫ほどの大きさ、北方に棲み毛皮は貴重ではなからうか。むかし欧州で貴婦人のコートに珍重された。

\*バロン (男爵)

\*野生 (小生と同じ)



\*マフ (MUFF) 毛皮を筒状に縫い両方から手を入れて保温した。  
\*当時、一円は一ルーブル六七コペイカ (榎本隆充氏著「榎本武揚  
シベリア日記」のレポートより) 一ルーブルは一〇〇コペイカ

榎本武揚は榎本隆充氏の曾祖父にあたります。この文書は  
同氏の御好意により、今度初めて公開するものです。

誌上をかりて厚く御礼申し上げます。

武揚は在露中から、卵、鶏について熱心に研究し、他の手紙には冬  
でもビイドロの屋根 (ガラス屋根) の温室の中へ温泉を引き込み、茄  
子や胡瓜、野菜、草花を育てる計画を考案している。今ならビニール  
ハウスで内部の温度を上げて、植物を成育するのは常識でも、この時  
代では思いもよらぬことであった。こうした農業に対する発想、研究  
や技術への関心の深さはやがて後年、育英費として実を結ぶことにな  
る。

#### 薩長政府の中で

武揚がロシアから帰朝の翌年、明治十二年二月十二日、条約改正取  
調御用掛を仰せ付けられた。当時日本は欧米諸国と不平等な条約を結  
んでいたため、日本は罪を犯した外国人を裁判する権利を持っていな  
かった。日本の国土でありながら、外国人居留地で行われたことにつ  
いて日本側には、何ら干渉する権利もなく、また外国からの輸入物に  
全く不利な関税しか賦課することができなかった。こうしたことは、  
維新以来独立国として出発した日本にとって、不利と同時に国辱と考  
えられていた。政府はこの不利を取り除き、真の独立を得ようと努力  
してきた。しかし明治六年の征韓論や、その後の西南戦争があつて、  
条約改正の運動は進まなかった。榎本の滞露中の外務卿であつた寺島

宗則は、岩倉遣欧米使節に加わつて外国を視察し、帰国後対外政策よ  
りも内政の整備を感じ、先ず国力の充実を第一にしていこう方針を決め  
た。ここで外国と交渉するに当たり、最も困った事は国内の法律がま  
ことに不備なことであつた。そのころ薩長の藩閥政治に反対していた  
自由民権派が、この問題をとり上げて条約改正の実現を政府に迫つた。  
こうした中で、明治十二年九月に寺島は辞職し、後任に井上馨が外務  
卿となつた。ついで榎本は彼のもとで外務省に出仕、十一月六日には  
外務大輔を命ぜられた。井上馨の考えは、対外関係で欧米人と交渉す  
るについては、できるだけ欧米文化を取り入れ、日本人の生活様式を  
西洋式にして、日本人も彼らの生活に近づいた事とし、それにより治  
外法権の撤廃交渉を有利にしようとした。こうして明治十六年に建て  
た洋風社交場が鹿鳴館であり、最も古式を重んじていた宮中でさえも、  
以後は洋服が礼装となつた。井上の欧化主義に立つた条約改正は、や  
がて世間のこうこうたる非難をあびることになる。

榎本自身は条約の全面的改正は、日本のために絶対必要なことと信  
じていたが、そのための極端な欧化政策には乗り気になれなかった。  
当時の政府高官が洋行して帰ると、急に外国崇拜者になるのとは違い、  
二度も外国へ出ていながら武揚は自分の生活まで欧風化はしなかった。  
翌十三年二月には条約改正の仕事を離れて、海軍卿兼任となり、主と  
してこの仕事に専念する。この時代の榎本は、薩長政府の御都合主義  
により、職をたらい廻しされていたのであろうか、ひとつの職場で席  
の暖まる暇もなかった。

このころ皇居の造営の議が決定され、早速榎本に白羽の矢が立った。  
ロシアなどの宮殿内の生活を見てきた彼は、皇居造営御用掛りを仰せ  
付けられ、造営事務副総裁として、事実上彼が一切のものを監督する  
立場にいた。実は明治十四年夏、天皇は北海道に行幸された。天皇

が滞在された札幌の宿舎は豊平館<sup>ほうへいかん</sup>という優美な建物であった。これは黒田が造営に当たり、滞露中だった榎本の知識を借りたものである。榎本は露都から建物の図面を送り、それに大島圭介のいた工部大学校（のち東大工学部に吸収）で教えていた英人コンドルが手を加え、開拓使の技術者らにより完成した。天皇の御目にとまった豊平館は明治建築の傑作として札幌に現存している。武揚がこの職についてから、皇室との関係は深まり、特に明治天皇は武揚の気質を好まれ、後に彼が閑職につくようになって、よく酒席にお召しになったという。

### 駐支公使として

この時代の朝鮮の国内情勢は非常に不安定であった。武揚が清国公使となったことは、朝鮮の問題と全く無関係ではなかった。朝鮮の壬午の乱の時、日本軍人数名を暴徒が虐殺し、日本公使館を襲撃して花房公使はじめ館員は英国船でやっと逃れることができた。やがて公使は兵に護られて帰任し、八月濟物浦条約により一応の落着をみた。その後朝鮮の内紛があつて、ここで日本は朝鮮問題と、清国との関係を重視し、清国の動勢を注視する必要から、適当な公使を派遣することになった。八月十二日、皇居造営事務副総裁を免ぜられ、特命全權公使として清国に赴任が決定、明治十五年九月二十二日、家族と共に横浜を出帆し、神戸を経て北京へ向った。

翌年の末には李鴻章と会って会談をする。以来武揚は李鴻章とは気が合ったのか相識の仲となった。当時李鴻章は、北洋大臣直隸省総督（北洋海軍の総指揮官で直隸省の長官）という職についていた。直隸として清末の外交問題で李鴻章の關係しないものは無かったといわれる。人間的には鷹揚な人であつたようで、彼の外交は概して平和主義で、外国との妥協が多く反対派からは批判されていた。

武揚は十六年十二月、井上外務卿に召還されて帰国したことがある。翌年二月には妻も帰国したが、仏軍が安南に進撃して中国と交戦状態に入つたため、急遽神戸から単身上海へ向つた。上海には各国軍艦が集つて万一に備え、清仏間の談判は破裂して両国の間で戦争の気配が濃厚となった。八月二十七日付の妻宛の手紙に、北京に着いた榎本はその前日に李鴻章と出会い一時間半も話し合い、同日、李自身が榎本の所に来て二時間も話し込んだ。そこで彼は榎本の好意に感じ、涙を流して心を打ち明け、清朝には人物がいなかったため、自分の建言が容れられず、フランス軍艦は暴れ廻っている。良い方法はないものかと榎本に相談した。書簡集には、二人は英語で話し合ったと書かれている。

この時代の中国は日本のように鎖国ではなかったから、上流階級や財閥、資産家など富裕層の間では子弟を外国へ留学させることが、一種の教養としてあり、これらの階級の間では英語教育も、それなりに取り入れていたといわれる。直隸総督のポストに李鴻章は二十五年もついていたから、英語も理解していたであろう。いちいち通訳を介した会話では、涙を流すような感動は伝わらない。

### 天津条約

朝鮮の内乱、甲申の変の時、清国軍隊が日本在留民を殺害凌辱したことは、日本の朝野をいたく憤慨させ、清に対する敵意を増大させた。ここで清国政府も朝鮮に関して、日清間の政治協定を結ぶ必要を感じ、両国の間で談判が開始されることになった。明治十八年三月十五日、全權大使伊藤博文、参議西郷従道、報道関係として福地源一郎（桜痴）の名もある。総勢四十余名の一行が天津に到着した。会議は四月三日から始まったが、その間に榎本は李鴻章と会い、彼の意向を聞いて談判成立をとりもった。その頃フランスと清の間は戦争状態であつたから、会議は日本側に有利であつたが、その後フランスが折れて五日に

和議の下交渉が進み、パリで調印の運びとなり、清国側は強気になって日清間の談判は難行した。朝鮮に関する交渉の三点とは、

一、朝鮮に於て、日支両国の軍隊の撤退。

一、両国から軍事教官を派遣しない。

一、出兵必要の時は事前に両国で交渉し、事変後は撤退する。

以上について、伊藤大使は、もし清国が不承知であれば、是非なく戦争の用意にかかることを述べて、談判の不調を期して帰国する決意をした。事実これを受けて公使館の引上げを覚悟し、武揚も北京の妻あてに荷物の取りまとめを指示している。この時の書簡によれば、伊藤大使の到着以来、毎夜伊藤と十二時過ぎまで相談して、武揚は二週間も風呂にも入らず、急な電信のため曉まで働いたという。やつと風呂に入った彼は、虱を見つけ下着を全部ぬぎ捨てた。男の生活とはこういうものである。その上、自分自身でこれから暗号電信を打つと記されている。公使自らが電信を打つということは、武揚ならではない。慌しい中、やがて最後の談判の日となった。これは中国側の通訳二名を入れて、すべて英語で話し合われた。

明治十八年四月十六日の手紙には、「昨日、迎賓館にての談判は、弥々両国和戦の分れ目とも申すべく程の処、<sup>さすが</sup>流石は李鴻章だけあって、空力身を出さずついに折合相付き、まずは双方国家の威光を傷つけず、円くまとまり候間、何より大慶に御座候」とやつと談判もまとまって、頭痛鉢巻の体であった伊藤大使も胸をなでおろした。そこで、過日北京の公使館建築費二万六千円不足の分、井上外務卿よりは一文も出さぬと電信で通達してきた件も、談判の決着で気をよくした伊藤大使が

内々請合つて帰国した。以来、幕臣出身の武揚も伊藤の信頼を得ることとなる。戦争を回避したことを思えば、公館建築費など安いものである。明治十八年十月十一日、清国駐在を免ぜられて武揚は帰国した。

\* 明治十八年の米価、一俵一元七十三銭

### 大臣に就任

帰朝直後の十二月、榎本は伊藤総理のもと、彼の要請により通信大臣に任命された。そのころ日本政府は、外国に迫いつけ、追い越せと鉄道の敷設よりも、電信事業を優先して進めてきた。そこで所轄の工部省は廃され、明治十八年十二月、通信省が創設された。清国から帰朝したばかりの榎本は初代通信大臣となったのである。

武揚の手紙に目を通して驚くことは、清国滞在時代、すでに外務省から公使館へ盛んに暗号電報が入っていることで、武揚の滞露中是不便な電信しかなかった。しかし武揚が露国よりの帰途、シベリアの都市間ではすでに電信が使われていて、通信手段は急速に発達していたのである。武揚が帰国の途で通つたシベリアの各都市へは、ロシア政府からの指示が届いていたらしく、各所で丁寧な扱いを受けたという。これも通信技術の発達のおかげである。

彼はまた、オランダからシーメンス式モールス発信機を持ち帰っていて、自身もキーをたたいた。民営か官営かの議論もあったが、ここで電信電話基本法が制定され、電信電話は政府が専掌することになった。彼は曾て駐露公使など多忙な中でも、電信機の改良の知識を養うことを怠らなかつた。後年、電信技術の草分けでもあるという理由で、電友協会長に押されている。

余談であるが、明治二十八年、通信省は無線電信の研究を始め、海



軍も研究と実験を重ねてきた。この努力の成果が明治三十八年五月の日露戦争で、世界にさきがけて無線を活用し、日本海海戦で日本を勝利に導いたのであった。当時ロシアのバルチック艦隊は、母港クロンスタットを出てアフリカ大陸の南を廻り東洋へ向った。艦隊に無線機はあったが、ドイツ人技師が途中マダガスカル島で下船してしまい、水兵達はこれを使えず、対馬に來た頃は無用の品同然であったという。

#### 叙爵のあと

明治二十年五月、榎本は勲功により子爵の位を授けられた。外交官として、樺太・千島の交換条約を締結し、天津条約では伊藤大使を補佐したことが認められたのである。これも伊藤や黒田の推薦によるものであった。すでに伊藤は公爵、黒田は伯爵を授けられていたが、このころ民間で爵位を授与されることは、容易なことではなかった。

武揚は与えられた仕事を懸命につとめ、私見を主張することはなかった。この公、侯、伯、子、男の五爵は夫々の立場により最高の名譽とされ、明治十七年の華族令により、爵位は世襲として受け継がれる。

この外に位階があり、従一位は殆ど薩長土出身で占められている。また公卿、諸侯、華族の爵位と位階勲等の間は全く関係なく、名門の戸主でも年が若ければ位階は低いし、有力な官職につかなければ、等級の高い勲章はもらえない。位階は正の下が従であり上下に分かれています。わが国の年功序列はこの頃からの慣行であろう。

#### 森有礼刺殺さる

榎本は伊藤総理の退官後、黒田清隆内閣の下でも留任し、二十二年三月までその職にあった。この年三月十一日は大日本憲法発布式典で、黒田清隆がそれを拝授し、榎本の関わった皇居の正殿での使用始めの日であり、盟友二人の晴れ舞台であった。ところがこの朝、文部大臣

森有礼はこの式典に臨もうとして、家の門口を出た時、国粹主義者の壮漢に襲われて絶命した。森は学校令の公布や教育制度の改革を図った進歩的政治家であったが、伊勢神宮に参拝した時、クリスチャンだった彼は神殿の御簾をステッキで押し上げたのが原因で、神道思想家の怒りを買った。このことは、時の内閣でも重大問題となり、黒田内閣は責任を問われて危機におちいったが、この後任に当たる人選はむずかしかった。そこで内閣は陸軍大臣大山巖を兼任させ、その場をつくろった。しかし事態は容易に収拾できず、黒田総理は榎本を説き彼を文部大臣のポストにすえることに成功した。

いくつかの書物では、榎本のことをピンチヒッターと記している。たしかに彼はどの方面でも使える器用な人間であり、勤務ぶりも誠実で、つねに官吏の範となったことを人々は見ていたのである。こうして三月二十二日、文部大臣就任と同時に、逓信大臣を免ぜられた。翌二十三年、帝国大学の創立により、教育制度は一応完備し、教育の根本理念としての教育勅語が發布された。彼は勅語の作製に直接関わることは無かったが、一応その仕事が付くと五月に文部大臣を辞任した。この後直ちに枢密顧問官に任命されている。

#### 大津事件

明治二十四年、想定外の事件が起った。その年四月、ロシア皇太子ニコラス・アレクサンドロウィッチ大公が東洋視察の途上、日本に來遊し、長崎、鹿児島を訪れた後、五月九日に神戸に上陸した。そこから一行は琵琶湖の遊覧をして大津市に入った。市内を通過中、一行を警護していた巡査が突然剣を抜いて、ロシア皇太子に斬りつけ、頭部に傷を負わせた。彼は皇太子が日本を偵察に來たものと考え、斬りつけたという大津事件である。当時ロシアは一大強国であり、これによりロシアを怒らせ、難題を吹きかけられるとしたら脅威であった。そ

ここで内閣としては先ずロシアに謝罪使節を送ることにし、有栖川威仁親王が特派大使に選ばれた。しかし実際には交渉に当る人物が必要であり、ここでも榎本が最適任者であり有能と考えられた。ロシア皇帝から最も優遇された外交官であったから、彼以外にはいなかったのである。彼は再三断ったが、天皇、皇后からの使者を頂きこれを受ける。いつぼう、同時に日本政府は使節派遣について、ロシア政府と交渉していたが、ロシア側が折れて謝罪使節派遣に及ばずという返答があり、榎本はこの命を解かれた。この頃は、血なまぐさい事件が多い。

明治二十四年五月二十一日、榎本は第一次松方内閣の外務大臣に就任する。これは榎本にとつて、初めて彼にふさわしい閣僚であった。以前からの懸案であった条約改正については、彼は完全な対等条約でないと、国民が納得しないという考えに立っていた。これは大津事件で辞職した前の青木外相と同様の主張であり、二代の外相による強硬な主張によつて、次の陸奥宗光外相になり、やっと実現することができたのである。

次いで二十五年八月八日、松方内閣総辞職により、彼は外務大臣を辞任するが、これは明らかに藩閥政策の犠牲であった。内閣が反政府的な野党を懐柔する政治力を欠いていたからである。いつの時代も政争の駆け引きは留まることがない。

明治二十五年九月、日本気象学会会頭となる。しかし、この年八月二日、妻たづが死去した。翌二十六年二月、議定官に就任、同月殖民協会を設立して会頭となった。

(いとう えいこ・古文書研究家)

\*訂正 前号の写真は黒田清隆でした。お詫びして訂正します。編集部

朝日新聞 06 年 4 月 19 日

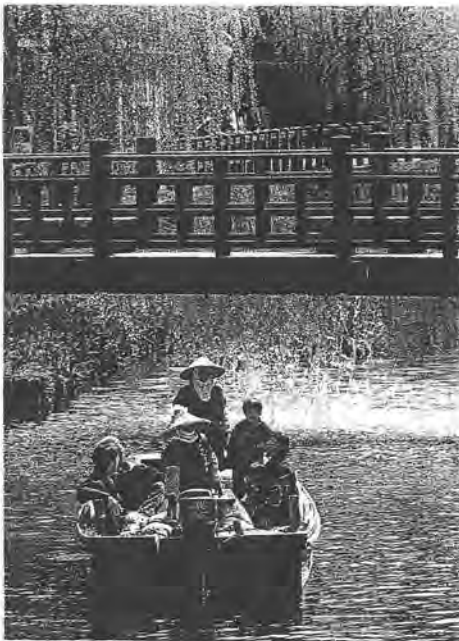
今の佐原があるのは伊能家と『ちゅうけい先生』のおかげ！

## 日本音 行紀 もうひとつの風景

### 樋橋の落水

千歳興業都市

## 水が伝える 先人の偉業



前号の扉が映える小野川に流水の音が響き、水橋めぐりの舟が川を流した一帯が佐原市佐原で、上田誠人撮影

## 伊能測量隊 子午線一度の長さの測定(一)

佐久間 達夫

伊能忠敬の蝦夷地測量の動機は、子午線上の緯度一度の長さの確定であった。忠敬が唯一の天文暦学に関する見解を述べた(「仏国曆象編斥妄」伊能忠敬記念館所蔵)に、

居地(江戸深川黒江町)は、曆局を距ること南北一里許。曆局は、北極の高さ三十五度四十二分、深川は三十五度四十分半、北極差一分半なり。これに因りて、深川の曆局を距る行路を測量し、而して吾朝南北一度の里数を窮めんと欲す。高橋子(高橋至時)曰く。可なり。然れども行路少なく極差小なり。北極一度の法となすに足らず。応に時を俟つあるべきなり(原漢文)。

と、いつている。これによると、緯度一度の距離の確定は、正確な曆を作製するには、必須なことであった。

当時、幕府は、ロシアの我が国への通商の申し入れ、工藤平助・林子平の著書による北辺警備の必要性、堀田仁助の蝦夷地沿岸測量図の不備などによって、北方の様子を知ることが要求され、それには、正確な北方の地図が必要であった。高橋至時は、幕府の意のある所を利用して、忠敬と相談して蝦夷地測量の必要性を幕府に申し入れた。至時が、いつ、だれに、このことを申し入れたかは不明であるが、忠敬の手記した「蝦夷于役志啓行策略」に、幕府への蝦夷地測量の交渉過程が、寛政一二年二月一五日から記されているので、幕府への初めての申し入れは、寛政一一年末か、同一二年の初めの頃であると言っても大過ないであろう。

寛政一二年閏四月一四日、幕府から伊能忠敬に「測量許可」が伝達された。

忠敬は、第一次蝦夷地測量で、子午線一度(地上南北一度間)の長さを二七里余と算出した。しかし、高橋至時は、測量方法や測量機器の改善によって、より正確な数値の把握を要求した(「伊能翁言行録」)。

そこで忠敬は、伊豆国から陸奥国迄の太平洋岸の各地で、北極出地度、二地点間の南北距離、それより換算した一度の長さを求めた。その時の記録は、佐原市の伊能忠敬記念館の(「雑録」子午線一度長計算)に書かれている。

それによると、一度里数の最小値は二六・五七里、最大値は三〇里で、二七里未満が一、二七以上二八里未満が一〇、二八以上二九里未満が五〇、二九以上三〇里未満が一〇、三〇以上が一で、全体で七二算出している。また、これらの数値の中には、算出値に加減して補正したものが一六ある。

一度里数の分布では、二八里以上二九里未満の度数が一番多く、忠敬が第二次測量で確定した二八里二分(一一〇・七五四)は、その級間にはいつている。また、一度里数の値が「二八・二里」(四捨五入分も含める)と、記述されているものは、七二箇所中一二箇所で最頻値となっている。なお、四捨五入による分単位までの平均値(二〇四二里÷七二=二八里三六)は、二八里四分となる。

**資料一** 子午線一度長計算(享和元年測量) 伊能忠敬記念館所蔵

・ 深川の伊能忠敬宅 北極高度 三十五度四〇分三〇秒

・ 従深川

・ 武州橘樹郡川崎宿 北極高度 三十五度三二分

・ 南北 一尺四寸九分八厘・四里一六一 一度 二九里三三

・ 同 川崎宿

・ 同 久良岐郡本郷村 北極高度 三十五度二五分

・ 南北 一尺一寸一分六厘五・三里一

一度Ⅱ二六里五七  
自深川、七里二六一

一度Ⅱ二八里一三

・同 本郷村

同 富岡村

北極高度Ⅱ三五度二分一五秒

南北Ⅱ四寸八分三里・一里三四

一度Ⅱ二七里七一

自深川 八里六〇一

一度Ⅱ二八里二八

・同 富岡村

相州三浦郡横須賀村 北極高度Ⅱ三五度一七分

南北Ⅱ八寸八分二厘・二里四分五厘 一度Ⅱ二十八里

自深川 一里〇五一・一度Ⅱ二八里二一

・同 横須賀村

同 走水村 北極高度Ⅱ三五度一六分

・自深川 至走水村 北極高度Ⅱ二四度三〇秒

南北Ⅱ四尺一寸六分五厘五毛・一一里五七一

一度Ⅱ二八里三四

・自走水 至三崎切通 南北Ⅱ一尺四寸二分四五

自三崎切通至小坪 南北Ⅱ一尺六寸四分六厘

相減 北二寸二分一五 〇里六一五三 但 一分三二

山西村梅沢 〇寸七分八厘七

・自深川

至相州足柄下郡根府川 北極高度差Ⅱ二八分

一度Ⅱ二八里二にして一里六分割、七寸九分になる

一里、三寸六分にて四尺七寸三分七厘

・同 根府川 北極高度Ⅱ三五度一二分三〇秒

同 吉浜村 北極高度Ⅱ三五度 九分三〇秒。

南北Ⅱ五寸二分八厘・一里四六六

一度Ⅱ二九里三二

・同 吉浜村

伊豆加茂郡熱海 北極高度Ⅱ三五度六分三〇秒

南北Ⅱ五寸二分六厘・一里四六一

一度Ⅱ二九里二二

・同 熱海

同 伊東和田村 北極高度Ⅱ三四度五八分四五秒

南北Ⅱ一尺三寸三厘五・三里六二

一度Ⅱ二八里〇分

・同 和田村

同 八幡野村 北極高度Ⅱ三四度五三分〇〇秒

南北Ⅱ九寸九分三厘・二里七五八三

一度Ⅱ二八里七八

・八幡野村

須崎村 北極高度Ⅱ三四度三九分二五秒

南北Ⅱ二尺三寸五分七厘四・六里五四八三

一度Ⅱ二八里五七 内、須崎入口より宿

・自深川 根府川 南北Ⅱ四尺七寸三分七厘・一三里一五六

至須崎 北極高度Ⅱ一度〇一分

・自根府川至須崎 南北Ⅱ五尺七寸七厘九・一五里八五五二

合、南北Ⅱ一丈四寸四分五厘・二九里〇一四

一度Ⅱ二八里五四 六分一にして一尺七寸四分一

即ち六厘一〇毛過

・須崎より

同 下田町 北極高度Ⅱ三四度四〇分三〇秒

南北Ⅱ一寸五分七厘五・〇里四三七五

内三分 須崎入口より止宿

・同 下田町

同 手石村 北極高度Ⅱ三四度三八分三〇秒

南北相減 南北三寸一分一五・〇里八六五三

・同  
手石村

・同

那賀郡田子村井田子 北極高度 三十四度四八分三〇

南北相減 南北一尺六寸五分七厘・四里六〇三

一度 二七里六二

・同

井田子

・同

君沢郡土肥村 北極高度 三十四度五五分

南北 一尺八分七厘・三里〇二

一度 二七里九四

・同

土肥村

・同

久連村 北極高度 三十五度一分三〇秒

南北 一尺三分七厘・二里八八

・同

一度 二六里六 六分を加え、二八里一八と成る

・同

久連村 北極高度 三十五度三分三〇秒

・同

口野村 北極高度 三十五度三分三〇秒

・同

南北 二寸二分・〇里六一

・自深川

上総市原郡五井村 北極高度 三十五度三〇分三〇秒

南北 一尺七寸八厘・四里七二四四

一度 二八里三四

・同

五井村

・同

望陀郡中島村 北極高度 三十五度二五分三〇秒

南北 八寸七分・二里四一六六

一度 二九里〇五

自深川 一度 二八里五六

・同

中島村

・同

木更津村 北極高度 三十五度二三分

南北 四寸三分六厘・一里二一一

一度 二九里〇六

自深川 一度 二八里六三

・同

木更津村

・同

周准郡富津村 北極高度 三十五度一八分三〇秒

南北 七寸五分三厘・二里〇九一 一度 二七里八八

自深川 一〇里四四三 一度 二八里四八

・同

富津村

・同

天羽郡湊村 北極高度 三十五度一三分

南北 九寸九分一厘・二里七五三

一度 三〇里

・同

自深川

・同

湊村

・同

金谷村 北極高度 三十五度一〇分一五秒

南北 四寸八分一厘・一里三三六

一度 二九里一五

・同

自深川 一度 二八里八二

・同

金谷村

安房国平郡吉浜村 北極高度 三十五度八分一五秒

南北 三寸五分三厘・〇里九八〇五五

一度 二九里四〇

・同

吉浜村

・同

勝山村 北極高度 三十五度六分三〇秒

南北 二寸九分五厘・〇里八一九四四

一度 二八里一〇

・同

勝山

・同

那古村 北極高度 三十五度一分三〇秒

南北 八寸七分四厘・二里四二七七

一度 二九里一三



・同 那古村

同 安房郡洲崎村 北極高度 $\parallel$ 三四度五八分三〇秒

南北 $\parallel$ 五寸三分五厘・一里四八六

一度 $\parallel$ 二九里七二

・自深川至房州洲崎

南北 $\parallel$ 七尺二寸九分七厘三

一度 $\parallel$ 二八里九七 北極差四二分・二〇里二七

二八里二にして、一寸九分〇八 六分一里にて三分二里八毛過

・同 洲崎

同 朝夷郡北朝夷村 北極高度 $\parallel$ 三四度五八分

南北 $\parallel$ 七分八厘

・同 北朝夷村

同 江見村 北極高度 $\parallel$ 三五度三分四五秒

南北 $\parallel$ 九寸七分八厘・二里七一六六

一度 $\parallel$ 二八里三四

・同 江見村

同 長狭郡天津村 北極高度 $\parallel$ 三五度七分

南北 $\parallel$ 五寸八分三厘・一里六二二二

一度 $\parallel$ 二九里九四

・同 天津村

上総国夷隅郡岩和田村 北極高度 $\parallel$ 三五度一〇分三〇秒

南北 $\parallel$ 五寸九分・一里六三八八

一度 $\parallel$ 二八里一〇

・上総国夷隅郡岩和田村 北極高度 $\parallel$ 三五度一〇分三〇秒

同 小浜村 同三五度一四分三〇秒

・自岩和田 南北 $\parallel$ 六寸九分・一里九一六六

一度 $\parallel$ 二八里六五

・同長柄郡中里村 北極高度 $\parallel$ 三五度二五分

自小湊 南北 $\parallel$ 一尺八寸・五里

一度 $\parallel$ 二八里五七

・上総国武射郡屋形村 北極高度 $\parallel$ 三五度三六分三〇秒

自中里 南北 $\parallel$ 一尺九寸六分三厘・五里四五二九

一度 $\parallel$ 二八里四五

・下総国海上郡銚子飯沼村 北極高度 $\parallel$ 三五度四三分

自上総国屋形村 南北 $\parallel$ 一尺八分九厘五・三里〇二六

一度 $\parallel$ 二七里九三

又、自岩和田至銚子飯沼村 五尺五寸四分二厘五

北極高差 $\parallel$ 三三分三〇秒・一五里三九五八

一度 $\parallel$ 二八里四二

・常陸国鹿島郡矢田部村より五尺二分七厘

同国同郡夏海成田村迄 三寸六分一厘として、一三里九六三九

矢田部村止宿 北極高度 $\parallel$ 三五度四六分五二秒

成田村止宿 同  $\parallel$ 三六度一六分四四秒

較  $\parallel$ 二九分五二秒

一度 $\parallel$ 二八里〇五三

・下総国銚子より夏海成田村止宿迄五尺五寸九分三厘・一五里五三七

一度 $\parallel$ 二七里八二七・三〇町弱

矢田部、銚子の間六七町不足、間縄差なるべし

・常州鹿島郡夏海成田村

奥州磐前郡小名浜米野町 $\parallel$ 北極高度三六度五六分三〇秒

南北 $\parallel$ 六尺六寸九分六厘八・一八里六〇二二

一度 $\parallel$ 二七里九〇三三

・同 小名浜

同 榎葉郡小浜村 北極高度 $\parallel$ 三七度一九分三〇秒

南北 $\parallel$ 四尺五厘五・一一里一二六四

一度 $\parallel$ 二九里〇二 一寸を減、二八里三分余に成

- ・同 小 浜  
同 行方郡鳥崎村 北極高度 $\parallel$ 三七度四〇分三〇秒  
南北 $\parallel$ 三尺五寸二分七厘二・九里七七七七  
一度 $\parallel$ 二七里九九三六
- ・同 鳥崎村  
同 宮城郡蒲生村 北極高度 $\parallel$ 三八度一五分三〇秒  
南北 $\parallel$ 五尺九寸二分四厘・一六里四五七  
一度 $\parallel$ 二八里二一
- ・同 蒲生村  
同 牡鹿郡石巻門脇 北極高度 $\parallel$ 三八度二五分  
南北 $\parallel$ 一尺六寸一分七厘・四里四九二一  
一度 $\parallel$ 二八里三七
- ・同 石 巻  
同 鮎川村 北極高度 $\parallel$ 三八度一八分  
南北 $\parallel$ 一尺一寸三分〇五・三里一四〇二  
一度 $\parallel$ 二六里九一 五分七厘六毛を加え一度二八里になる  
狐崎浜 $\parallel$ 三八度二二分
- ・同 鮎川村  
同 鮎浦 北極高度 $\parallel$ 三八度二二分三〇秒  
南北 $\parallel$ 八寸六分四厘二・二里四  
一度 $\parallel$ 三二里 一寸四分四厘を減、一度二八里に成
- ・同 鮎浦  
同 野々浜 北極高度 $\parallel$ 三八度二三分三〇秒  
南北 $\parallel$ 一尺七分・〇里四七二二  
一度 $\parallel$ 二八里三三
- ・同 鮎川村  
同 大須浜 北極高度 $\parallel$ 三八度三一分三〇秒  
南北 $\parallel$ 二尺二寸一分二・六里一四二二
- ・同 大須浜  
同 本吉郡小原木村 北極高度 $\parallel$ 三八度五八分  
南北 $\parallel$ 四尺二寸八分六四・一里九〇六六  
内、四寸五分 長面 一尺四寸八厘 伊里米  
一寸七分三 田浦 六寸五分 平磯  
二寸九分二 波路上 三寸一厘二 御崎明神  
二寸八三 唐桑 七寸二分九 小原木  
一度 $\parallel$ 二六里九六 一寸七分を加え、一度二八里に成
- ・同 小原木  
同 氣仙郡越喜来 北極高度 $\parallel$ 三九度六分三〇秒  
南北 $\parallel$ 一尺四寸一分八厘五・三里九四〇二  
一度 $\parallel$ 二七里八一
- ・同 越喜来  
同 唐丹 北極高度 $\parallel$ 三九度一二分  
南北 $\parallel$ 八寸九分六厘・二里四八六  
一度 $\parallel$ 二七里一二 三分六厘を加え、一度、二八里二一と成る
- ・同 唐丹  
同 閉伊郡大槌 北極高度 $\parallel$ 三九度二一分  
南北 $\parallel$ 一尺五寸三分二五・四里二五六九  
一度 $\parallel$ 二八里三八
- ・同 大槌  
同 山田 北極高度 $\parallel$ 三九度二七分四五秒  
南北 $\parallel$ 一尺一寸二分八厘・三里一三三  
一度 $\parallel$ 二七里八四
- ・同 山 田
- 内、八寸六分四厘鮎浦 一寸七分野々浜 四寸二厘(原本記入なし)  
五寸二分五厘分ヶ浜 二寸五分大須浜  
一度 $\parallel$ 二七里三〇 六分六厘を加え、一度二八里に成

同 歙崎 北極高度 $\parallel$ 三九度三九分

南北 $\parallel$ 一尺七寸九分二厘・四里九七七

一度 $\parallel$ 二六里五四 九分を加え、一度二七里八八

・同 歙崎

同 田老 北極高度 $\parallel$ 三九度四四分

南北 $\parallel$ 八寸四分五厘・二里三四七

一度 $\parallel$ 二八里一七

・同 田老

同 小本 北極高度 $\parallel$ 三九度五〇分四五秒

南北 $\parallel$ 一尺一寸三分七八・三里一六〇五 一度二八里一〇

・同 小本

同 田野畑 北極高度 $\parallel$ 三九度五五分三〇秒

南北 $\parallel$ 七寸八分一厘・二里一六九

一度 $\parallel$ 二七里四〇 一分八厘加え、一度二八里〇三

・同 田野畑

同 黒崎 北極高度 $\parallel$ 四〇度三〇分 減合

南北 $\parallel$ 六寸二分九厘・一里七四七二

一度 $\parallel$ 二三里三 二寸一分六厘を加え、一度二八里一七

・同 黒崎

同 野田村 北極高度 $\parallel$ 四〇度七分

南北 $\parallel$ 一尺一寸一分〇七五・三里〇八五四

一度 $\parallel$ 二八里四〇

・同 野田村

同 久慈 北極高度 $\parallel$ 四一度一二分三〇秒

南北 $\parallel$ 八寸八分・二里三五

一度 $\parallel$ 二六里六六六 九分を加え、一度二八里三六

・小原木より久慈迄 一丈二尺一寸五分〇五五

北極高度 較 $\parallel$ 一度一四四分半

一度 $\parallel$ 二七里一八 不足の寸分を加え四寸五分 一丈二尺六寸

にして三五里となる 即ち一度は二八里一八

・奥州関伊郡久慈湊より 北極高度 $\parallel$ 四〇度一二分三〇秒

同国三戸郡鮫村迄 同 四〇度三一分

南北 $\parallel$ 三尺一寸六厘六毛・八里六二九四

一度 $\parallel$ 二七里九八七四

久慈湊、四〇度一二分三六とすれば二八里一四となる

・同国北郡泊村、即鮫村の距 北極高度 $\parallel$ 四一度五分四二厘

南北 $\parallel$ 五尺八寸六分五厘八・一六里二九四一六

一度 $\parallel$ 二八里一七四

・同国同郡尻谷村自泊距 北極高度 $\parallel$ 四一度二四分

南北 $\parallel$ 三尺一寸一分七五・八里六五九七

一度 $\parallel$ 二八里三九

尻谷村四一度二四分一〇秒にして、二八里一四となる

又、久慈湊より尻谷迄、合一丈二尺九分

北極高度 $\parallel$ 一度一分三四秒・三三三三三

一度 $\parallel$ 二八里一六

又、鮫村より尻谷迄、合八尺九寸八分三厘三

北極高度 $\parallel$ 〇度五三分・二四里九五三六

一度 $\parallel$ 二八里二五

尻谷村四一度二四分一〇秒にして二八里一六

・同国同郡大畑村 $\parallel$ 北極高度 $\parallel$ 四一度二四分

野辺地町 同 四〇度五二分三〇秒

南北 $\parallel$ 五尺二寸九分七厘二・一四里七二四四四

一度 $\parallel$ 二八里〇二八 北極高度差三一分三〇秒

## 資料二

子午線一度の長さの算出値の分布

伊能忠敬は、地球は球面であり、子午線一度の長さは、緯度の如

何に関係することなく常に一定である、と、仮定していた。したがって、子午線一度の長さは、A B 二点間の緯度差で、これらの二点間の南北の距離を除いて求めている。

緯度一度の長さ	度数
26. 6	1
27. 6	1
27. 7	1
27. 8	3
27. 9	5
28. 0	9
28. 1	7
28. 2	12
28. 3	6
28. 4	5
28. 5	3
28. 6	4
28. 7	1
28. 8	3
29. 1	3
29. 2	2
29. 3	2
29. 4	1
29. 7	1
29. 9	1
30. 0	1
計	72

例えば、享和元年測量の深川の伊能忠敬宅と川崎宿までの北極高度差と南北距離からの緯度一度の求め方は、

例 深川の伊能忠敬宅と川崎宿

深川の伊能忠敬宅の北極高度 三五度四〇分三〇秒

川崎宿の北極高度 三五度三二分

二点間の緯度差 三五度四〇分三〇秒ー(ひく) 三五度三二分

〃八分三〇秒

二点間の南北の距離

大図上(一里が三寸六分の長さ) 一尺四寸九分八厘

実際の距離

四里一六一

子午線一度の求め方

四里一六一÷八分三〇秒×一度〃二九里三七と、なる。

なお、伊豆国から陸奥国までの太平洋岸での緯度一度の里数の測定値では、陸奥国の計算値に補正箇所が多くみられる。(つづく)

(さくま たつお・香取市 伊能忠敬研究家)

## 話題散歩

### インターネットで伊能書探求!

国立国会図書館はインターネットのホームページで明治時代の本をいつでも無料で読めるよう公開している「近代デジタルライブラリー」に、この四月新たに約六万七千冊が加わった。

今回加わったのは実業家渋沢栄一がパリ万国博覧会で渡航した際の日記「航西日記」(二八七一年出版)や、勝海舟の息子の嫁だったクララ・ホイトニーが書いた「手軽西洋料理」(一八八五年出版)など。

同図書館が所蔵する明治時代の図書は約十七万冊で、約十二万七千冊がネットで閲覧できるようになる。

アドレスは <http://kindai.ndl.go.jp/>

ネットで「伊能忠敬」を「詳しく検索」をすると48件が表示された。ちなみに以下のような本が原本で読める。

- 3 伊能忠敬 伊能登著 忠敬会 明44
- 4 伊能忠敬先生贈位始末 大須賀庸之助編 伊能源六 明21
- 11 高等小学読本 文部省編輯局 明22
- 31 世界偉人伝 福田琴月著
- 34 大日本沿海実測録 伊能忠敬著 実業之日本社 明43
- 大学南校 明3

書誌情報ではタイトル、著者、出版情報にこの図書の著作権情報まで。著作権保護期間満了がほとんどと思われる。



## 忠敬談話室だより



点と線―伊能図と鷹見泉石

桃霞散策余録 山本 公之

永井路子旧宅を心残りにして目指す本丸は《伊能図と鷹見泉石展》にあったのだが、「お客さん、咲いている。ほれ、ひとりしずかだよ」その途中での永井路子旧宅の庭に一步踏み込んだ時に促されての響き。ここでおもてなし。真っ白い背丈のないそれでいて群生している初めての印象。お茶に呼ばれて話し込む。

串田孫一著「博物誌1956」のカバーは、中身の新鮮さを保つように渋く出来ている。「ひとりしずか」の項の一部を原文のままに写すが、識見に命が宿る想いが此処にある。

『今年もひとりしずかが實に賑かに咲いた。僕はこの花がちっとも嫌いではないし、前に擴

大鏡でその裸花を写生したこともあるので、充分に愛着を持っているつもりだ。しかしまた一方、この花がその名にふさわしいように、藪の小暗いところに、ひとりさびしく、ぼつんと咲いているのを見たいものだと思っている。しかし、僕の庭に限らず、どこで見かける時にも澤山かたまって咲いている』

「お客さん団体さんですか」今日が古河桃まつり最後の日でもあり、そのように見間違えられても致し方ない。『いや、一人静かですよ。その花に出会えてそれだけで幸せ』と名残りを次ぎなる目標にさあ一歩進もう。

日光東照宮参詣の家光はここ下総古河城で宇都宮を前にして第二夜を過す。そもそもこの地が、老中から大老になった土井利勝が御徒頭のとときの領地は下総佐倉で、老中となつてからここ古河が領地とされた。片や堀田正俊は老中までは上野安中が領地で大老となつてからである。秀忠・家光・家綱の頃である。詳しくもないものが申すことでお許しあれ、二人の大老の領地であったことに驚く。利勝は、慶長十五年から寛永十五年（1610-1638）老中として寛永十五年から正保元年（1638-1644）まで大老として幕府の要職にて足掛け三十四年間下総古河を領地として治めた。その功績など多々あったことでしょう。また最初に領地とされた下総佐倉（千葉県佐倉市）の城址には国立歴史民俗博物館があり十分その役目を果たして

おります。面影を映し出すかの様に当時の馬の背のような地形に残されたいくつかの武家屋敷周辺坂道の説明掲示板には、藩主土井利勝と明記されている。

天保9年（1838）に京都所司代から老中になった蘭癖大名土井利位は「雪華図説」で知られている。利勝から二百年余り経っているが、詳しくは割愛と致す。

鷹見泉石記念館となつている昔の城址の裏通りの小径に史跡鷹見泉石邸。門を入つて左手の石碑の刻字をそのまま写す。

諱は忠常 通称ヲ十郎左衛門ト云フ  
天明五年六月廿九日古河城内ニ生ル  
其応世々土井侯ニ事フ 幼時父ニ從ツテ  
江戸ニ移ル 藩主土井利位 大坂城代  
京都所司代 及ビ老中タリシ間 家老の  
職に在リテ 殊功アリ 性謙虚ニシテ  
矜ラズ 識古今ヲ貫キ 兼テ世界の情勢  
ニ通シ 尤蘭學に精シク 又露語ヲ學ビ  
天文 地理 測量ノ術ヲモ修メ 夙に海  
防ニ心ヲ注ギ 蝦夷北蝦夷全圖アリ 米  
艦浦賀ニ來ツテ 互市ヲ乞フヤ 意見書  
愚意摘要ヲ公ニシ 以テ開港論ヲ高唱セ  
リ 弘化三年古河ニ移リ 安政五年七月  
十六日没ス 享年七十四 城北正隣寺ノ  
螢城ニ葬ル 大正七年從四位ヲ追贈セラ  
ル 此家ハ泉石ガ晩年居住シタル藩邸ニ  
シテ 可琴軒ト稱シ 藩祖土井利勝ガ  
古河城三階櫓築造ノ時 其餘材ヲ以テ



建テシモノナリ云ウ

昭和十二年六月 古河史蹟保存会

邸内の手水舎、今風にいうとレストハウスの棚に忘れたこと。滅多に持ち合わせない携帯電話で難儀に至らなかった次第。

ただ桃を見なすも宜しいではないかと、石碑も読むよう引き戻されたのかな。泉石翁にそのお陰といつてはなんですが、映画のロケには、加藤剛が撮影現場に奥様も一緒に来たと言われ、ティア管理人は口を開いて笑顔であった。配役の上での奥様かどうかまでは聞き漏らした。全体では、もう一棟以上あった由。余談だが大岡越前役の撮り納めを果たした加藤剛にとって、忠敬の役は意外だったと思う。もしも、「新・伊能忠敬」が映画化されるならば鷹見泉石役で出て貰いたい。

さて、鷹見泉石関係資料 絵地図選集（日本図のあゆみ）沿海地図の解説で、包紙を付属しており、表に「沿海地図」と表題を墨書、裏面に泉石の識語「文政十二丑七月十六日起筆同廿三日修業」と記されている。泉石は、本図を八日間で書写したのであった。という説明。

大漢語林によれば、識語とは写本・刊本などの原本に後人がその本の由来や書写年月などを記したものとなっている。

また、日本史総合年表（吉川弘文館）に「文政十一年（1828）十月十日 幕府シーボルトに制禁の日本地図を渡した書物奉行高橋景

保を捕える。十二月二十三日 幕府シーボルトを出島に幽閉」

「文政十二年三月二十一日 江戸大火 九月二十五日 シーボルトに帰国を命じ再入国を禁じる」となっている。

古河歴史博物館蔵 鷹見泉石日記 全八巻が二〇〇二・二〇〇四年に出ている。このように研鑽を積むことの楽しみに感謝。  
（やまもと きみゆき・小平市在住）

# 房総にご縁があつて 朝岡 洋子

武蔵野美大の教授をしていらした横地康國先生が、お若い頃に女学校で教えていただいたご縁で、先生を囲む会、賛樹会のリーダー伊能洋さんとお知り合いになりました。

フランスで発見された伊能図の佐原里帰り展を新聞で知って観に行きました。思ったより大きく、その正確さ美しさに感動しました。会場で伊能さんご夫妻と偶然にお会いしたのがご縁で伊能忠敬研究会に入会しました。忠敬先生は五十才を過ぎて持病も有りながら一歩一歩歩き続けて日本列島の地図を作り上げられた、その生き方に敬服しております。

私は長野県松本に生れ育ち県内の下伊那へ嫁ぎ十年過して転勤で千葉に来て四十年近くなり

ます。幼い頃私宛に父からもらった「房州の海」とゆうセピア色の写真の絵はがきがあります。

「一ひらのこの蝶の翅こそ見えないがなたねの花咲く冬の白浜」健三と父の名前が書いてあります。千葉へ来て南房総の初冬の路地で菜の花が咲いているのにおどろき、そして父を想いしました。父は長男で明治の人でしたが画家になりました。父の伯母の夫が東京で医者をしていてそこへ呼ばれて画家はあきらめてほしい。これからは歯科がよい時代になるからと諭されて美校を退学して東京歯科医専へ入ったそうです。

ドイツ文学者の手塚富雄先生が松本高等学校で教鞭をとっていらした頃、治療に通はれました。ドイツの大学へ転勤されて歯科へ行かれた時、治療してある歯を見て教授からほめられてとても鼻が高かったと手紙を下さいました。その頃の医学はドイツの時代でしたから父はごく喜びました。柳宗悦先生御夫妻も歯が悪くなられると近くの温泉に宿をとって通って来られました。私は柳先生からいただいた富本憲吉先生作で、モチーフにしておられた定家葛模様が真中に一つ描かれた朱色の小皿を五枚もらって来ました。知人から香りのよい花のつる草をいただいたて植えました。それがでいかかずらでよく繁って生垣になっています。

数年前娘の車で銚子の帰りに木曾義昌の墓公園入口があつて行ってみました。昔母から聞いた

た話を思い出しました。母は木曾の生れで姉が木曾義昌の子孫に嫁して間もなく結核で亡くなりました。母は末子でまだ実家にいて危篤の知らせで両親は駆け付けたそうです。実家には近所の人たちが来てお茶を飲んでいて、二階でバターと何か倒れたようなすごい音がしたが皆こわがって見に行かないので母が見ましたがなにも変りは無く、翌朝亡くなったと知らせがあつてあの音がした頃に命を落としたそうです。

木曾義昌のお墓が千葉にあるのを不思議に思つていたので此の度お墓のある旭市へ行つてみました。市役所でいたゞいたガイドマップに旭の名前の由来は、歌人野々口隆正が当地を訪れ「信濃よりいづる旭をしたひ来て東のくに跡をとどめむ」と義昌公を偲んだ歌を詠み、これが旭の名前の由来になっているとあります。いただいた文献によると木曾氏は武田信玄に攻められ義昌は信玄の娘万里姫と政略結婚をさせられたが武田氏は亡び、織田信長についたが信長は本能寺で討たれて義昌は徳川氏の傘下に入る。秀吉と家康が和解して小田原城の北条氏を攻める。この戦に義昌は病氣をして長男義利を参加させる。この不参加が秀吉や家康の不信を買ひこゝ下総国網戸城へ左遷される。義昌は文祿四年（一五九五）三月十七日五十六才で亡くなり椿の海へ水葬される。後に干拓されて水葬跡にお墓がたてられたとあります。夫人万里姫は三男義一を伴つて木曾へ帰り九十八才で亡く

なつたと書いてあります。木曾義昌のお墓がこの地にあるわけを知ることができました。

（あさおか ようこ・主婦 千葉市在住）

## 日々の話題

### ○新刊案内 西川治寛『地球人の地図思考』

― 世界地図博物館創設を願つて ―

昭和19年秋、地理学科入門以来今日までに著者は学習・研究・社会的貢献面などで、どのように地図と関わってきたか。その長い多方面に亘る経験を踏まえて、地図の思想・本質論、地図史の国土観・世界観的意義等を省察して、地図研究・教育の強化、高度情報時代の国立地図学博物館・地理情報学研究センターの創設運動を展開しながら発表してきた論文・エッセイなどをまとめたユニークな著作である。前著『日本観と自然環境』につづき、人間環境学の学際的フォーラム作りをめざす学術上の還暦記念書『伊能忠敬の偉業について検証』

晩印書館 Tel 03・3814・0853

### ○湘南で伊能図展

「北斎・広重の湘南」展にて

この夏、JR茅ヶ崎駅南口より徒歩八分の茅ヶ崎市美術館で「北斎と広重の湘南―風景と人物―」展が開催されます。この展覧会に際し、美術館ホールに『大日本沿海輿地全図』すなわち伊能大図模写の湘南部分および衛星写真などが展示されます。

展覧会は、浮世絵の名品葛飾北斎の「富嶽三十六景」、歌川広重の「東海道五十三次」などに見られる湘南風景、東は江ノ島から西は大磯・小田原、さらには富士山の景観で有名な伊豆箱根や大山を描いた風景浮世絵と、かつて茅ヶ崎に在住した歌舞伎役者市川団十郎や同市ゆかりの大岡越前守や天一坊にまつわる芝居にちなみ役者絵を中心とした人物浮世絵で構成されます。北斎・広重のほか歌川国貞、溪斎英泉、歌川豊国（三代）、月岡芳年などによって描かれた浮世絵の名品から鑑賞する江戸時代湘南の風土・風俗に、あわせて伊能図を重ねることで一味ちがった美術館散歩はいかがでしょう。

会期 二〇〇六年七月二十五日～九月一日

茅ヶ崎市美術館

Tel 0467-8811177

## お知らせ

○新入会員のみなさんです。どうぞよろしく。

奥永 渚 さん 福岡県福岡市

伊能忠敬三女・琴女の子孫

琴女は妙諦を母に一八八九年に生まれ、三女として伊能家で育ち、茨城・龍ヶ崎の名主松田家に嫁ぎました。妙諦は伊能三郎右衛門家の縁戚になる伊能家大番頭の柏木久兵衛の娘といわれています。奥永さんの母上が五世孫、渚さんは忠敬の六世孫にあたります。

### ○世田谷伊能家伝 伊能忠敬関係文書目録

現在制作中です。別途ご案内いたします。

## 伊能忠敬研究会 御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。  
二、つぎのような活動をおこなっております。

### ①会報の発行

― 予定 ―

発表誌 原則として年四回 64頁

第45号 締切 6月末 発行 8月

### ②例会・見学会の開催

第46号 締切 9月末 発行 11月

### ③忠敬関連イベントの主催または共催

第47号 締切 12月末 発行 2月

### ④その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄には専門、趣味、入会の動機など御意見を書き添えて、入会金四千元、年会費六千元、合計一万円を左記にお送り下さい。  
会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度のバックナンバーをお送りします。

④（04年8月事務所は新宿区下宮比町から移転）

〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6

日本地図センター2F 伊能忠敬研究会

Tel・Fax

03-3466-9752

事務局メール [fuku-inh@gj9.so-net.ne.jp](mailto:fuku-inh@gj9.so-net.ne.jp)

郵便振替口座 〇〇一五〇一六〇七二八六一〇

### 投稿規定

会員の皆様から会報の原稿を募集しております。一回の掲載は、原則として2〜8頁です。提出原稿は返却しません。採否は編集部に一任。手書き、FD、CDなど形式自由です。一頁は二段組31字×26行（400字詰用紙4枚分）、三段組20字×30行です。文字は9ポイントを使用。タイトルは5行分、写真、図表等（返却します）添付可。

話題、各種情報、近況などお便りをお待ちしています。

## 伊能忠敬研究会のホームページ

ホームページは秋葉武晃さんが担当しています。

<http://inoh-tadataka.org/>

史料情報は、「資料室」として坂本幹事です。現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図、会報の話題など御覧いただけます。

<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/>

忠敬関係の図書、文献資料は「伊能忠敬図書館」です。前田幹事が担当です。忠敬の書斎、休憩室の史跡めぐりも是非どうぞ。

<http://www.ttrm.or.jp/~koko>

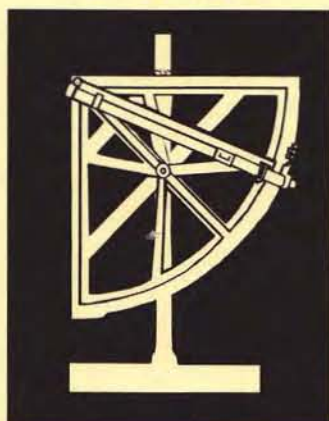
### 編集後記

今年は冬の寒さが春まで続き東京では桜花は例年以上に長持ちしました。落葉の順番どおり若葉はけやきからいちように◇四月六日は新聞をヨム日、日本新聞協会のシンポジウムに参加。「活字文化があぶない！」がテーマでした。柳田邦男氏の基調講演では言語文化と心について。デジタル文化IT革命で若者の活字離れを指摘。地域の再生、人の心の再生の必要を説いていました◇本誌には偉人・伊能忠敬を柱に幅広く話題を掲載してきています。多くの温かいメッセージに感心しながら活字の持つ良さ強さの継続に思いを巡らしました◇本号でも貴重な話題を頂戴しました。映えましたでしょうか◇柳緑花紅（やなぎはみどりはなくれない）は禅語だそうです。季節は移り初夏は平戸・長崎です。事務所のある日本地図センターの隣のビルの生垣に彩り。説明板「平戸つつじ・長崎平戸地方でいくつものつつじを交配して作り出す。花が大輪なのが特徴」◇旅先でテレビ音声。大洲のつつじ園で平戸つつじを「薄いピンクに濃いピンクが吸い込まれるような花」。言葉、文字、映像、絵画、音楽。表現の多様性を大事に。活字も（F）

# THE INOH TADATAKA JOURNAL

## STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.44 2006



### SPECIAL NEWS

Tward "The Inoh Walk 2010"

Topics from Newspapers

900 pieces New Inoh's Documents were Presented

Inoh Tadataka had much International Information

As if I give my Daughter away in Marriage

Editorial Department 1

Yomiuri Shimbun 1

The Nihon Keizai Shimbun 2

Mainichi Shimbun 4

### TOPICS

Tadataka's Wonder: Tsushima Islands

Sawara City Changed Name to Katori City

Great Achievement of our Predecessors Known by the Water

Search Books about Inoh Tadataka on the Net!

Sakuma Tatsuo 5

Editorial Department 21

Asahi Shimbun 62

Editorial Department 69

### NEW MATERIALS

Shibayama Denzaemon: Member of Inoh's Survey Team(1)

Korean Mountains on Inoh Maps - part I -

Inoh Tadataka as a Pioneer of Culture(1)

Yasunaga Junko 6

Tsujimoto Motohiro 14

Miyauchi Satoshi 22

### FEATURE ARTICLES

My Travel Guidance to Hirado

Anecdotes about Nagasaki Kaido

Inoh's Survey Team Came to Nagasaki

Endo Kaoru 29

Kawashima Etsuko 32

Matsuo Norishige 39

### REGIONAL MATERIAL

Inoh's Survey in Echigo Iwafune

from "Yosoemon's Memorandum"(2)

Kazama Hirokichi 44

### MATERIALS

Walk along Tadataka's Route in Miura Peninsula(2)

Hakoda Ryosuke's Second Son: Enomoto Takeaki(3)

Distances of one degree of the Meridian by Inoh's Survey (1)

Shirane Sadao 50

Itoh Eiko 56

Sakuma Tatsuo 63

### MEETING ROOM

"Point and Line": Takami Senseki and Inoh Maps

I have Connection with Boso

Yamamoto Kimiyuki 70

Asaoka Yoko 72

Edited and Published  
by  
THE INOH TADATAKA SOCIETY